

新古今集洋解 五卷

108
128

文學士 鹽井正男著

新古今集詳解 五卷

東京 明治書院

新古今和歌集詳解 五の巻

文學士 鹽井正男 著

明治 40 10 30 内本

戀歌 一

○題知らず

讀人知らず

よそにのみ見てややみなむ葛城や高間の山の峯の白雲

○よそにのみ見てややみなむ。よそに見るとは、直接に其の物に接せざる意にて、これは「我が戀ふる人に遇はずにしそはん事かナア」と嘆息したるなり。やは疑問の詞にて、やみなんかと言ふやうに、やみなんの下に置きて、見るべし。而して、自からナアと嘆息の意味の、末に籠もるなり。○葛城や。やは感動詞にて、葛城の高間の山と言ふべきところを、其ののを省きて、その代りに感動の意味を含めたる詞づかひなり。○峰の白雲。峰の白雲をとして見るべし。下の三句は、まのあたりに逢ひ見る事を得ざる我が戀人を譬へて言へるなり。

○一首の意は、我が斯くばかり思ふ人に、遂ひに遇ふを得ずしてしまふ事かナアといふ心を、葛城の高間の山の峰にかゝれる白雲を、よそにはかり見てくらす事かと、譬へて言へるにて。我

が思ふ人にあひ難きを嘆息したる歌なり、あひ難き人を、高山の白雲にたとへ、其の縁によりて、
遇はずにしまふ事を、よそにばかり見てと言へるなり。高山に葛城の山を用ひたるは、古歌にも
「青やぎの葛城山に入る雲の立ちてもわても君をこそ思入」などある例によりたるものなるべし。
譬喩よく其の意に適したるもよく、よそにのみ云々と、先づ其の嘆息の聲に出でたるも、自から言
ひまはしの、自然に且つ強きを得て、面白しといふべし。

○題知らず

讀人知らず

音にのみありと聞きにしみよし野の瀧は今日こそ袖に落ちけれ

○音にのみ。 評判にばかり、或は世人の噂さにはかりの意。○ありとさしこし。 吉野に大瀧の
ありといふ事は、人の噂さにはかり聞き來たれるとなり。○みよし野の瀧。 吉野にある大瀧の
意。○袖に。 我が袖になり。袖に瀧の落つるとは、袖に涙の仰山にこぼるるを言へるなり。
○一首の意は、 吉野に大瀧のありといふ事は、今まで世人の噂さにはかり、明いて居つたが、今
日はじめて其の瀧の襟な涙が、我が袖にこぼれると言ふ意にて、かなはぬ戀ひに泣きて、涙の夥し
くこぼるゝを言へるなり。我が涙を瀧に見たて、涙のこぼるゝを、落つると縁語を用ひたるはよけ
れど、瀧が袖に落つるといへる意匠は、少しく馳せすぎて、不自然に陥りたる想像、面白からずと
言ふべし。

○題知らず

人まろ

あしびきの山田もる庵におくかびの下こがれつゝ我が戀ふらく
は。

○山田もる庵。 山田を守る小屋にて、田を守る庵の事は、秋の部に多く説明したり。○かび。
蚊火なりとも鹿火なりともいふ。前者は蚊遣火の事にて、後者は鹿を逐ひ拂ふ火の意なり。二者い
づれにしてもよけれど、おのれは前者の説に従はんとす。萬葉十一卷にも、舊く「あしびきの山田
守る翁置く蚊火の下こがれつゝ我戀をらく」の字あればなり。此の歌も、其の歌の詞を、少しく引
きおほして、この集に載せたるものとあはる。田の番小屋に焼く居る蚊やり火と見るべし。○おくか
びの。 燃やして置く蚊火の如くの意なり。○下こがれつゝ。 下は心の意にて、心に思ひ焦れ思
ひ焦れつして居る意なり。それを、かびの縁にて、下焦ると言へるなり。○我が戀ふらくは。 我
が戀ふる思ひはの意なり。らくはるを延ばしたるものにて、言ふをいはく、申すを申さくといふ
と、全じ詞づかひなり。五、一、二、三、四句と、置きかへて見るべし。

○一首の意は、我が戀ひしいゝの情は、山田の番小屋にたく蚊遣火のやうに、其の人には知られず
に、唯だ我が心の下にばかりこがれつゝして居るとの意にて、獨り心に戀ひこがれて居る嘆息な
り。蚊遣火などは、火の燃えあがらぬものなれば、かく我が心中にのみの戀ひを譬へて言へるな
り。愛情に火の連想を面白しとせば、獨り焦るるの情を、蚊遣火にたとふる、また穩當なる連想と
いふべし。

○題知らず

人まろ

石の上ふるのわさ田のほには出でず心の中に戀ひやわたらむ

○石の上。ふるの枕詞、前に言へり、石の上ふるのわさ田の。此の二句は、ほに出でずと言はん爲めの序にて、一首の意味に關係なし。○ほには出でず。面にあらはざる意にて、我が戀ひしくの情を、顔にも素振りにも詞にも見せざる意なり。○戀ひやわたらむ。戀ひつゞけやうかナアといふ意なり。

○一首の意は、言ひ出しても、とても遂げ難き戀なれば、慕ふ心を、顔にもそぶりに表はさず、獨り我が心に戀ひ續けて、せめて戀ふるを樂しみに暮らさうといふ意なり。土佐日記に、「忘れ貝拾ひしもせじ白玉を戀ふるをだにも形見と思はむ」、それは「さき子を戀ふる場合に、愛は異れど、全じやうなる心なり。戀ふるは誠に苦しい事なり。其の苦しい事を、せめての樂しみにせんとしよ、誠にせつなき愛情を言へるにて、切情の極といふべし。此の歌、其の心は誠に思ひやらるるものあれど、上の序の閑文字が、其の切情の感を減せしむるものあるを、遺憾とす。

○女につかはしける

業平朝臣

春日野のわか紫のすり衣しのぶの亂れかぎり知られず

○春日野のわか紫のすり衣。春日野は大和の地名。紫は、草の名。古は染物に用ひたり。されば、

紫の根ずりの衣などとも言へり。すり衣の事は、前に屢々説明せり、わか紫のわかは、若草の若に全じ。以上三句は、しのぶの亂れを言ひ出さん爲めの序にして、意味に關係なし。すり衣の中には、しのぶ摺りと稱するものある故に、其の衣のしのぶすり、思ひ忍ぶの忍ぶといふ言葉の、全音の縁によりて、かく序としたるなり。○しのぶの亂れ。思ふ心の亂れ、即ち、思ひ思うて心の亂る事なり、○限り知られず。限りがわからぬ、即ち際限なく思ひ焦るる意なり。

○一首の意は、あなたを戀しく思うて、限りなく思ひ亂るといふ事にて、戀ひに心の甚しく亂るをいへるなり。若紫の道具立て、誠に面白しといふべし。若といひ紫といへる、其の連想自らやさしく美はしさものありて、其の女の人柄をゆかしく思ひ浮ばしむる力あればなり。なほ此の歌は伊勢物語にも見ゆ。若し其の書中の記事を真とせば、其の場合に對して、序の用ひ方も、才氣見えて、面白き歌といふべし。

○中將更衣に遣はしける

延喜御製

紫の色に心はあらねども深くぞ人を思ひそめつる

○中將更衣。更衣は、後宮女官の名にて、仁明帝の御時より置かれたるものなり、中將は此の更衣の名なるべし。○深く。紫の色の濃さに對して、我が思ふ心の切なるを、かく言へるなり。○思ひそめつる。思ひかけたる意にて、色といふ縁によりて、初めつるを染めつるに文なしたるなり。○一首の意は、我が心は紫の色では無けれども、汝を大層深く思ひかけたりとなり。紫色は濃さ

ものにて、且つ此の時代は、濃き衣と言へば、濃き紫の衣と言ふ意に用ひたる程なれば、かく紫色にたとへて、深く愛する意をあらはしたるなり。心に色、深き心に紫色、穩當なる譬喩、見るべき歌ならんか。

○題しらず

中納言兼輔

みかの原わきて流るるいづみ河いつみきとてか戀ひしかるらむ。

○みかの原、いづみ河。山城の相樂郡の地名なり。上の三句は、いつみきと言ひ出てん爲めの序にして、いつみといつ見との同音の縁によりたる細工なり。○いつみきとてか。いつ仲よくしたる人としてなり。かは疑問の辭にて、戀ひしかるらむの下に置きて、見るべし。戀歌に見しと言ふ言葉は、單に會見したる意にあらざして、睦まじく交りたる意なり。

○一首の意は、何時睦まじくしたる人なりとて、斯く我が心に忘れず戀ひしく思ふのであらうかといふ事にて、人を慕ふのは、并つて睦まじくしたる人を慕ふのが、あたりまへであるのに、替つて仲よくしたる事もない人を、心に慕うて、年月忘れず戀ひしたる事の怪しさよと、我が戀ひを、子供らしくいぶかりたるなり。いつ見きとてかの下の句の幼げなる心は、面白し。序のわきて流るるに、暗に、我が泣いて暮らすけしきをさかせるも、面白し。間も慥に一種のめでたきものあれど、やゝ其の心に對しては、詞の輕きに失したるは、難とすべきか。

○平定文家歌合に

坂上是則

會の原やふせ屋におふるは、きぎのありとは見えてあはぬ君かな

○會の原のふせや。地名にして、信濃美濃の國境にありといふ。後拾遺集の平正家の歌に「信濃なる會の原にこそあらねども、我が箒木と今は頼まむ」、或は源氏箒木の卷に「は、きぎの心を知らてその原や道にあやなくまどひぬるかな」、又狹衣に「その原と人もこそききは、きぎのなかふせやに生ひ初めにけむ」など見ゆ。會の原のふせやに、箒木を斯く文なすは、其の地箒木の草の多かりしよりの事なるべし。は、きぎ木の箒木の如くといふ意に見るべし。以上、上の三句は、譬喩なり。○ありとは見えて。其の人のありとは、我が眼に見えてなり。其の人の姿は常に目に入るを言へるなり。續千載の覺仁法親王の歌に「瀧つ瀬に早く落ちくる水の池のありとは見えてなき世なりけり」、續後拾遺の順徳院御製に「みさごゐる荒磯波による玉のありとは見えて手にもたまらず」。其の物は異れど、皆全じやうなる意の詞なり。

○一首の意は、會の原のふせやに生えて居る箒木の如くに、其の人のありとは、我が眼に見えて居るけれど、さて、睦まじく語らふ事の出来ない事であるよといへるなり。箒木の譬喩を用ひたるは、箒木は遠くより見れば、箒の立つて居るやうに見えて、近く寄つて見る時は、さうでない故に、かく見えながら相見ざる意をたとへたるなりといふ説あれど、さては、少しく滑稽にあらずや。此の譬喩はあはぬ君かなの意にまで、かけて見るべきものにはあらざらむ。單にありとは見え

て」の意にのみかけて、見るべきものなるべし。曾の原の名所には、古來必ず筍木を詠みて、其處に筍木の生えて居る事は、慥なる事なれば、我が見る人は、夢にはあらず、現に此の世に在る人なりといふ意を譬へたるものなるべし。それに於て見れば、滑稽とまでは覺えざれど、されど、其の比喩にもたせたる類似の關係いかにも弱くして、いかなる比喩にも言ひかふるを得べくして、妙ならずといふべし。

○人の文遣はし侍りける返事に添へて、女につかはしける。
藤原高光

年を経て思ふ心のしるしにはそらもたよりの風は吹きける

○序の意味は、ある女の許より、手紙をおこしたれば、其の返事に添へて、此の歌を其の女の許に言ひやりしとなり。人の文の人と、女につかはしけるの女とは同人なり。○年を経て。年を経て思ふとつゞくなり。多くの年月を思ひつゞけて居る意なり。年を経ては、多くの年月にわたる意にて、拾遺集の戀歌に「年を経て思ひつゞけて逢ひぬれば、月日のみこそ嬉しかりけれ」、伊勢物語に「年を経てすみ來し里を出でていなばいとど深草野とやなりなむ」、後深草集の雜に「年を経て頼むかひなし常磐なる松の緑も色變はりゆく」などにて、知るべし。○しるし。俗にいふさしめなり。○そらもたよりの風は吹きける。そらもは、空ながらも意なり。たよりの風吹くとは、音信の來たれるを言へるにて、直接の對面ならねど、音信を得たるをよろこべる心なり。

○一首の意は、久しく想ひ思うて居りたる我が心のさしめが見えて、そのあたりの嬉しき會見にはあらざれど、せめての音信に接する事を得たるは、誠に嬉しとなり。音信を得たるばかりをも喜ぶ詞に、其の深く慕ひ居る意をさかせたるにて、其處が詩となれるところなり。

○九條右大臣女にはじめて遣はしける。
西宮前左大臣

年月は我が身にそひて過ぎぬれど思ふ心の行かずもあるかな

○九條右大臣女とは、師輔の息女にて、母は延喜の皇女雅子内親王なり。○我が身にそへて。我が身に伴うて、即ち我が身に伴れ立ちての意なり。年月が我が身に伴れ立ちて過ぐるとは、我が齡につれて年月の過ぎゆくを言へるなり。○思ふ心。我が戀しく思ふ心。○行かずもあるかな。心の行かずとは、わが心の遂げられぬ意にて、我が戀ひのかなはぬを言へるなり。それを、年月の過ぎぬる 縁によりて、行かずといへるなり。

○一首の意は、我が身の年齢と共に、年月は過ぎて行くけれど、其の我が身を離れざる我が思ふ戀ひは、今日までもかなはぬ事よとの嘆息なり。畢竟、年月を経ても思ふやうにならぬ心を歌へるなり。我が身にそへてと言へる詞は、此の歌の骨子にて、これを本として、我が身に添へて過ぎぬる月日と、我が身を離れぬ思ひの、思ふやうに成り行かざる事との對稱によりて、作り立てたる歌なり。巧みにはあれど、感情は巧みなる爲めに、反つて削がれたるをさぼゆ。

○返へし

大納言俊賢母

もろ共にあはれといはずば人知れぬ問はず語りを我れのみやせむ

○俊賢母とは、即ち、其の九條右大臣の息女なり。西宮前左大臣高明の室となりて、俊賢を生む。○もろ共に。あなたと我れと共にの意なり。○あはれといはずば。前の歌の意を受けたる詞にて、斯くまでに思ふと言はずに居らばの意なり。○人知れぬ。人に知られぬと全意にて、先方の人にはわからぬ意をいへるなり。○とはずかたり。他より問はれざるに、獨り語たり出て、我が心をほのめかす事なり。千載集の戀の部に「包めども堪へぬ思ひになりぬれば、問はず語たりのせまほしきかな」、續古今の雜歌に家隆が「心をば我が心こそ慰じれあらし事の問はず語たりに、玉葉集の戀歌に「見し夢を我が心にも忘ればや問はず語たりにいはれもぞする」などを見て、知るべし。○我れのみやせん。我ればかり問はず語たりをせんなりしといふの意なり。○一首の意は、我が身も、實は同じ思ひにあこがれ居たり。されば、若しあなたが斯くまでと心を示し給はずば、我が身ばかりが、堪へぬ思ひに問はず語たりをすべかりしをといふ意にて、さるに、あなたより斯く言はれたる故に、我れも全じ思ひなるを聞こゆるを得て、諸共の思ひを言ひかはすを得たる嬉れしさと云ふ意を、餘したり。つまり喜びて同意を告げたる歌なり。問はず語たりの詞、面白し。これにて、自分も堪へぬ程に思ひ居る意をさかせる、短き詞に多くの意をさか

せたる工夫、凡ならずと言ふべきなり。

○天曆の御時歌合に

中納言朝忠

人づてに知らせてしがな隠れぬのみこもりにのみ戀ひやわたらむ

○人づてに。言傳てといふも全じく、他人に依つて我が意思を傳ふる事なり。○しらせてしがな。我が心を知らせたき事よと、希望の意なり。○かくれぬ。隠れ沼の意にて、山か森か藪の蔭にありて、よく見えざる沼の様なり。ぬはぬま(沼)の略なり。古今集戀歌に友則が「紅の色には出てし隠れぬの下にかよひて戀ひは死ぬとも」、後拾遺冬歌に頼慶法師が「狭庭はむべやえけらし隠れぬの蘆間の氷一重しにけり」、續拾遺戀歌に知家が「年經とも離れかは知らむかくれぬの下に通ひて思ふ心を」などにて、知るべし。○みこもり。水にこもる、即ち、水にかくれてといふ事にて、我が心ばかり密に思ふ意味を、たとへて言へるなり。○戀ひや渡らん。戀ひつゞけて居やうかナアといふ事也。三の句の上に「自から言ふは恥かし故に」といふ如き詞を、置き、戀ひやわたらむの末に「それもまた誠に苦しき故に」といふ如き意を、足して見るべし。

○一首の意は、自から言ふは恥かし故に、獨り心の中に密に戀ひつゞけて居やうかナア。されど、それもまたいかに、苦しき故に、人傳てに知らせたいものであるといふ意にて、言ふは恥かし、獨り思ふは苦し、人傳てに我が心を知らせたいものであると嘆息したるなり。初戀の恥かし

且つは堪へがたき情は、尤もとまほゆるまでの歌なりや。

○はじめて女に遣はしける

大宰大貳高遠

みこもりの沼のいはがき包めどもいかなる隙にぬるるたもとぞ。

○みこもりの。みこもりのいはがきと續くなり。みこもりは水にこもるにて、いはがきは沼の岸を圍める岩を言へるなり。沼の水深うして隠れたる岩岸の意なり。いはがきは、岩の垣にて、殊更に作りたる垣にはあらねど、岩の自から垣のやうに立ちめぐりて沼の岸をなしたるより、言へるなり。金葉集夏歌に師頼が「五月雨に沼の岩垣水越えて真菰刈るべき方もまほはず」、千載集の歌に良經が「五月雨にぬれくひかんあやめ草沼の岩垣波もこそせ」などにて、知るべし。上の二句は、つゝめどもを言ひ出ださむ序に用ひたるにて、歌の意味に關係なし。○つゝめども。心に深くしみ隠くして居るけれどもなり。我が戀情を隠くして居るとなり。○いかなるひまに。いかなる心の隙よりの意なり。○ぬるるたもとぞ。涙に我が袖のぬるるを言へるなり。○一首の意は、心の中に深くしみ隠しんで、隠くして居るけれども、いつか涙がこぼる。いかなる心のひまより、しみ甲斐もなく、斯くは涙のこぼるのかといふ事にて、心にしみ隠くして居つても、自から堪へ難き戀ひしさに、いつか泣がる我が心を、自から咎めて、其のといめ難き戀ひしさを表はしたるなり。

○いかなる折りにかありけむ女に 謙徳公

から衣袖に人目はつゝめどもこぼるるものは涙なりけり。

○から衣。袖の枕詞なり。○袖に人目はつゝめども。我が涙を、袖に隠くして、人には見せじと用意し居れどもなり、○こぼるるものは、隠くしされずしてこぼるるものはの意味に見るべし。○涙なりけりのけりは、感動詞なり。

○一首の意は、我が涙を袖に隠くして、人には見られじとすれど、隠しされずして、こぼるるものは、君を思ふ我が此の涙であるツイとなり。つゝみされずこぼるる涙にて、とどめ難き戀情をきかせたるなり。つゝみあへぬ涙、せきとめ難き涙、心に似ざる涙など、忍ぶとすれど堪へられずこぼるる涙は、常に歌に多くよまれたれど、此の歌の詞の、新しくこぼるるところは、袖につゝむと言ひまきて、さて、こぼるるものはと言ひたる發表にあるべし。

○右大將朝光五節の舞姫奉りける、かしづきを見てつかはしける。 前大納言公任

天つ空とよのあかりに見し人のなほ面影の強ひて戀ひしき

○此の歌の端書は、左大將朝光が五節の舞姫を奉りける時、其の舞姫のかしづきの女房を見て、送りたる歌なりといふ事なり。○五節の舞姫。十一月禁中にて行はせらるる豊明の節會に、公卿と國守より、各二人づきの舞姫を出だして、其の舞を天覽に供するの式あり。それを言ふ。豊明の節會とは、今年の新穀を、神に奉りて、其の後、君もさこしめし、臣にも賜はる爲めの節會な

り。舞姫のかしづきとは、其の舞姫の容儀を整ふる爲めなどに、附き添ひ居る女房を言ふなり。○天つ空。天つ空なるの意にて、禁中の豊明の節會をかしこみて、天上なる豊明の節會と形容したるなり。○とよのあかり、豊明の節會の事なり。○なほ。俗にいふまだにて。今日に至るもまだ、其のかしづきの女房の美しかりし姿の、目に見ゆるとなり。○面影。我か目にちらつきて見ゆる其の介添への女房の姿をいへるなり、○強ひて。忘れんとして忘れられざる意味にて言へる詞なり。古今集戀歌に典風が「わびぬれば強ひて忘れんと思へども、夢といふものぞ人だのめなる」、全集離別に「強ひて行く人をとどめん櫻花いづれを道とまどふまで散れ」、後撰集春歌に「吹く風の誘ふものとは知りながらちりぬる花の強ひて戀ひしき」、これ等の強ひてにて知るべし。○こひしき。戀ひしき事よと、末に感動の詞を省きたるなり。

○一首の意は、禁中の豊明の節會の折りに見たる人の姿の美しさ、今日に至るもなほ目にちらつきて、忘れんとしても忘れられず戀ひしき事よといへるにて、豊明の節會にほの見し君の容姿の、忘れがたく、戀ひになやみ居るよしを言ひやれるなり。ほの見しの意は、別にそれと詞はなけれども、天つ空の詞の中に、自からこもりて聞くべきものとおぼえて、此の意を添へて解釋したり。天つ空のあかりと續けたる意を、八代集抄には、天は明かなるものなれば、斯く言へるなりと説かれたれど、さ程にむづかしく理屈をつけて見ずとも、よろしかるべし。禁中を天上にたとふる事は常にて、こゝも單に其の意匠に出でたるのみ。而して、此のほの見しの意をも、自からこめたるものとおぼゆ、「あまつ空とよのあかりに見し」の詞が、自から其の女房の容姿を、めてたくおぼえしむるところ、此の歌の光彩とすべきところなるべし。

○つれなく侍りける女に、しはすのつごもりに遣はしける。
謙徳公

あら玉の年にまかせて見るよりは我れこそ越えぬ逢坂の關

○あら玉の。年の枕詞なり。○年にまかせて。年の越ゆるにまかせての意なり。○見るよりは。逢坂の關を年の越ゆるにまかせて見て居るよりはなり。年を擬人して、新年が東より逢坂の關を越えて來ると見たてたるなり。年をかく見たつる事は、後撰集雜歌にも「待つ人は來ぬときけどもあら玉の年のみ越ゆる逢坂の關」など見ゆ。○我れこそ越えぬ。我れこそ逢坂の關を越えぬと思ふといふ事にて、人に逢はんと思ふ意を、斯く言へるなり。人に逢ふを、逢坂の關を越ゆると文なす事は、歌に多し。清少納言も「よをこめて鶏の空音ははかるとも世に逢坂の關はゆるさじ」、後撰集の戀歌に「人知れぬ身は急げども年をへてなど越え難き逢坂の關」、其の反歌に「東路に行きかふ人にあらぬ身はいつかは越えむ逢坂の關」など、なほ多くあり。

○一首の意は、今宵、逢坂の關を、年の越えて來る事なるが、其の年にばかり越えさせて見て居るよりは、我れこそ早く其の逢坂の關を越えんと思ふといふ事にて、今宵は是非に逢ひたく思ふ意なり。年が東の空より逢坂の關を越えて來るといふ趣向と、人にあふ逢坂の關を越ゆるといふ詞とより、工みたる歌なり。「年にまかせて見る」といふ詞は、「年にばかり逢坂の關を越えさせて見る」

といふ意なれど、自から其の中に、逢ふを得ずして年を送らすの恨めしき意をさかせるは、巧みなりといふべし。すべて巧みなる意匠の歌といふべし。涙を言はざる故に、情の淺きやうなる嫌ひはあれど、なか／＼にさま變はりたるころありて、面白しといふべし。

○堀河關白文など遣はして、里は何處ぞと問ひ侍りけれ

ば、本院侍従

我が宿は其處とも何にか教しふべき言はてこそ見め尋ねけりやと

○端書の意は、堀河の關白が手紙などをあこされて、そなたの里の家は何處ぞと問はれたれば、かくよみて言ひやりたりとなり。里とは禁中の住居に對して、此の侍従自身の宿を言へるなり。○其處とも云々。私の宿は斯ういふ處であると、さしてそれとはどうして教ふべきか、教ふべきにあらざとなり何かのかは反語なり。○いはてこそ我が宿は何處なりとも言はずしてなり。○見め尋ねけりやと見めとつく／＼なり。我が宿をわざ／＼尋ね來たまひたるかと見て、さて、人の實情のあるかを見んといへるなり。

○一首の意は、我が宿は何處であるとは、どうして教へやう、教ふべきにあらず。我が宿を教へざるに尋ねて來たまはば、それを實情の人ならめ。されば、教へずして、さて、我が宿を尋ねて來たまへるかを見て、實情のある人なるかを見むものよといふ事なり。尋ねけりやとの詞は、わざ

／＼尋ね／＼て來たまへるか、さては實情の人なりしかと、嬉れしく思はんといふ意にて、此の場合面白き詞なれど、其の句調のつまりて聞ゆるは、今少しく言ひまはしの工夫を要するにあらずや。

○返へし 忠義公

我が思ひ空の煙りとなりぬれば雲居ながらもなほ尋ねてむ

○わが思ひ。そなたを戀ふ我が思ひなり。○空の煙りとなりぬれば。我が戀情は燃えに燃えて、今は空の煙と立ちのぼつて迷うて居る故にといふ事なり。思ひが天の煙りとなれるとは、非常に戀ひまどうて居る意なり。激情の比喻に煙りを用ふる事は、常に、後撰集戀歌に「富士のねをよそにぞきし今はわが思ひにもゆる煙りなりけり」、金葉集の戀歌に周防内侍が「戀ひわびてなむる空の浮雲やわが下もえの煙なるらむ」、拾遺集戀歌に「限りなき思ひの空にみちぬれば、いくその煙雲となるらむ」、其の返歌に「空にみつ思ひの煙雲ならば詠むる人の目にぞ見えまし」など、なほいと多し。思ひの火といふ比喻より、更に進みて言へる比喻なり。○雲居ながらも。よそながらも全じ。雲居を外の意に用ふる事は、後撰集の戀歌に「山のはに斯る思ひの絶えざらば雲居ながらも哀れと思はむ」、新敎撰集の戀歌に和泉式部が「さもあらばあれ雲居ながらも山の端に出て入る宵の月をだに見ば」などにて、知るべし。さて、こゝは「天の外なれどもされど」の意なり。宿を教へてくれぬ程の思ひやりのなき人なれば、頼み難き心より、斯く天の外なれどといへるなり。○なほ尋ねてむ。なほ何處までも尋ねて行かむとなり。

○一首の意は、あなたを思ひこがる我が情は、空の煙となつて迷うて居る故に、頼み難きあなたなれども、なほ何處までも尋ねてまゐりましようといふ事にて、何處までも尋ねて行くと言うて、逢はてはやみ難き熱情を斯くまでとあらはしたるなり。頼み少き人なれど、我が熱情はあくまでもといふ意を「雲居ながらもなほ尋ねるといひ、其の雲居の縁より、我が思ひ空の煙りとなり居る比喩を用ひたるなどの工みより、すべて、當意即妙の反歌の手ぶり、巧みなりといふべし。

○題しらず

貫之

しるしなき煙りを雲にまがへつゝ世を経て富士の山と燃えなむ
○しるしなき。 思ふさゝめなき事。○煙り。 思ひの煙りなり、○雲にまがへつゝ。 雲に似せて、或は雲と全じ様になしてといふ如き意なり。思ひの煙りの、雲と全じ様に見ゆるまで、澤山と立ちのぼるさまなり。○世を経て。 年を経てと全じ。幾年久しきの意なり、○富士の山と。 富士の山の如くといふ意にて、富士の山の如く、幾年絶えず燃えむとなり。○燃えむ。 思ひ燃えむと見るべし。

○一首の意は、 思ひ焦るれど更にさゝめなし。よし、此の思ひの煙りを、雲の如く立ちのぼらせ、富士の山のやうに幾年久しく絶えず思ひ燃えむとなり。思ふかひはなければども、さてあきらめられぬ戀情に、かくて思ひ焦れ思ひ焦れて何時までもあらむとの熱情をのべたるなり。貫之集の六巻に「しるしなき煙を雲にまかへつゝ世を経て富士の山と燃えける」といふあり。その下の句を訂正したるものなるべし。去り難き戀情に、富士の山の煙を思ひよせて、詠む事は、奮くより見ゆる例にて、人丸の歌に「ちはやぶる神も思ひのあればこそ年へてふじの山も燃ゆらめ」後撰集の戀歌にも「しるしなき思ひとささくふじのねもかくとばかりの煙りなるらむ」全集「ふじのねをよそにぞさし今は我が思ひに燃ゆる煙りなりけり」萬葉集にも「わさも子に逢ふよしをなみ駿河なるふじの高根の燃えつゝかあらむ」、なほいと多し。これもまた、それによりて工みたる歌なり。絶えず思ひ焦るる比喻に、富士の山と言ひ、而して、焦るる思ひを煙りとたとへて、工みたるなり。此の歌の心を思ひやる時は、誠に切なる情なり。されど、さほどに熱情のこもりて聞えぬは、畢竟此の詞より工みて作れるなるが故なり。詞の技術にのみすがりて作るやうになりては、抒情歌の本意に反く。抒情歌は殊に熱情を本とす。技術を用ふるも、熱情自から其處に出づるが如くならざるべからず。新古今集の戀歌は、此の點よりの失敗多きは、技術に進みたるの時代、やむを得ぬ事なれど、惜しむべきにこそ。

○題しらず

清原深養父

煙り立つ思ひならねど人知れず侘びてはふじのねをのみぞ泣く
○煙り立つ云々。 思ひに煙りの立つものにあらねば、煙りの立つ我が思ひにはあらねどもといふ事なり。此の次に、「我が思ひは絶えずして」といふ詞を置きて見るべし。○侘びては。 戀ひわびてはなり。○ふじのねをのみぞなく。 富士山の煙の絶えざるやうに、絶えず泣いて居るの意に見

るべし。富士の山の煙は絶えざるより、思ひよせて、絶えずねをなく意を、かくふじのねに言ひかけて發表せるなり。後撰集の戀歌に「戀ひをのみ常にするが山なればふじのねにのみ泣かぬ日はなし」の下の句と、全じ意匠なり。新續古今集戀歌に「如何にせん富士のねにこそ立てねども袖に思ひの絶えぬ煙りを」のふじのねに立つなども、全様なる手振りなり。

○一首の意は、思ひには煙の立つものにあらず、我が思ひに煙りはあらねども、我が思ひは絶えずして、人知れず戀ひ佗びては富士のねの煙りの絶えざるやうに、我れは絶えず泣き居るとなり。ふじのねをのみをなくの趣向は、あまりに工みすぎたる技術にあらずや。絶えぬ思ひに富士の山の煙の絶えざるほどの比喩は、さもあるべけれど、ふじのねをなくとは、少しくふざけたる心地す。されば、巧みによめりといふまでにて、其の情の少しも動かざるにあらずや。

○女につかはしける

藤原惟成

風吹けば室の八島の夕けぶり心の空に立ちにけるかな

○室の八島、春歌の部に注せり。○夕けぶり。夕煙の空に立つ意に見るべし。上の三句は比喩なり。故に四句の上に「其の如くに」の詞をあきて、見るべし。○心の空に云々。心の煙りが空に立つといふなり。上の比喩の煙りによりて、心と言うて、心の煙りをさかせたり。心の煙りが空に立つとは、我が心に焦る、思ひの表にあらはるゝを言ふなり。新千載集戀歌に後京極攝政「忍びかね心の空に立つ煙り見せばや、富士の山にまがへて」なども、同じなり。

○一首の意は、風ふくと、室の八島に、夕煙りが空に立つ。其の如くに、我が心に焦るる思ひが、表にあらはれましたといふ事にて、よき便りのあるにつけて、我が思ひのとめ難く、斯くあらはしてつけまゐらすといふ意なり。調子のよさと、巧みなるを、此の時代の歌として見るべきのみ。

○文つかはしける女に、同じつかさの上なりける人通ふ

と聞きて、遣はしける。

藤原義孝

白雲の峯にしもなど通ふらむ同じみかさの山のふもとを

○端書^{ハナカキ}の意は、文などやりて、心を語たりかはして居る女の許に、同じ官職に居る長官が通ふとさして、其の女の許に、詠みてやれりとなり。義孝は近衛少將なりし故、近衛大將なる人の通ひしならむ。○白雲。女をたとへたるなり。○峯。其の長官をたとへたり。○など通ふらむ。どうして心を通はすのであらうと怪しみ咎めたる意なり。○おなじみかさの山。全じ官職をたとへたるなり。大將中將少將の異名を三笠の山と稱す。

○宰相中將より中納言になりて、またの年ののり弓のかへり立ちのあるじにまかりて、これかれ思ひをのぶるついでに

ふるさとのみかさの山は遠けれど、聲は昔のうとからぬかな。(後撰集雜歌藤原兼輔)

○同大臣の大將にてよろこび申し給へりし、勢ひゆかしく見えしかば、いとどしく咲き添ふ花の木末かな、三笠の山に枝をつらねて、(右京大夫集)

などにて、知るべし。○麓を。麓なるにといふ意にて、大將を峰とたとへたるに對して、少將の自分を三笠山の麓と喩へたるなり。此の句の下に、「それを棄てて」といふ詞を足して、見るべし。

○一首の意は、同じ近衛の官職の者なるに、これまでの自分を棄てて、どうして、あなたは大將様に心を通はすのであらうと、女の不實を怪しみ咎めて恨みたるにて、それを同じ三笠の山の麓なるに、その麓を棄てて、白雲は何故に峯に通ふ事ぞと、雲の上の事にたとへて發表せるなり。大將中將少將の異名の三笠の山よりよみたる趣向なれど、其の比喩も穩當にすなほにして、技術の妙をあらはし得たりといふべし。

○題知らず

和泉式部

今日もまたかくやいふきのさしも草さらば我れのみ燃えやわたらむ

○かくや言ふ。言ふのいふを、伊吹のさしも草のいふに言ひかけたり。後拾遺集戀歌に實方「かくとだにまちはらふよのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを」のいふきの用ひ方と同じ。かくや言ふとは、斯くつれなく言ふ事かの意に見るべし。伊吹のさしも草は、さらばの語を言ひ出ださん序なり伊吹は近江の山の名、さしも草は艾（もぐさ）の異名にて、さしもの音にかけて、「さしも草さしもひまなき五月雨にいふきの楸の猶やもゆるらむ。新拾遺集夏歌」さしも草もゆる伊吹の山のはの何時ともわかぬ心なりけり。（新勅撰集戀歌）の如く、さしもの序に用ふるが、多くある例なれど、此處は、單にさの音にかけて、さらばの序に用ひたるなり。○さらば。伴れないならばの意なり。○燃えやわたらむ。焦れて思ひつゞけやうといふ意を、さしも草の縁にて、言へるなり。

○一首の意は、今日もまた、斯く伴れなく言ふ事か。さらば、しかたがない、我れのみ獨り戀ひしき心に思ひつゞけやう、とても忘れ難き戀ひなればとなり。切なる情を、やさしげに言ひたるころ、愛すべし。

○題しらす

源重之

つくば山端山繁山茂けれど思ひ入るにはさはらざりけり

○つくば山、云々。つくばは常陸の筑波山にて、端山繁山は、山々の意と草木の茂き山の意とをさかせたる詞なり。新勅撰集戀歌經家「筑波山端山繁山尋ね見む戀ひにまされるなげきありやと」、新續古今集冬歌親雅「筑波山端山しげ山さしなべて残る蔭なく積もる雪かな」など、皆同じ。此の歌は比喩歌なれば、筑波の山々の草木の繁きは、人目の繁げきをたとへたるなり。○思ひ入るには。我が心より思ひ込んで山に入るといふ事にて、其の人を思ひ込んで逢ふ上にはの意をたとへたるなり。○さはらざりけり。故隙とならずとか、妨害とならずといふやうなる意なり。源氏物語に「憂き事に胸のみ騒ぐ戀にはひまの灘も障らざりけり」、榮華物語に「思ひやる心ばかりは奥山の深き雪にも障らざりけり」、新拾遺戀歌に「湊入りの葦間をわけて漕ぐ舟も思ふ中には障らざりけり」などの障らざりけり、皆同じ。

○一首の意は、いかばかり人目は多くとも、思ひ込んで逢ふ上には、少しも妨げにはならぬといふ事にて、さるに人目故に逢はれじと云ふは、思ひ込んで逢はんとせざるが故なりとの恨みの餘情をこめたるなり。比喻もまだやかにすなほにして、且つ、其の恨みを餘情にこむるやうに、婉曲に言ひたるも、面白し。

○又通ふ人ある女の許に遣はしける、

大中臣能宣朝臣

我れならぬ人に心をつくば山下に通はむ道だにやなき

○また通ふ人ある女とは、自分の外にまた他に通ふ人あるといふ事なり。○我れならぬ人。他の人なり。○心をつくば山。心をつくづくを、筑波山のつくに言ひかけたるなれば、心をつく筑波山として見るべし。心をつくとは、心をかくる、或は、心を寄すると同じく、愛情をむくる意なり。筑波山は下に通はんを言ひだす序にして、歌意に關係なし。○下に通はん。心の中に親しくせん意なり。それを、心を下とも言ひ、親しくするを心を通はすなど言ふより、又、筑波山の序の縁より、下に通ふ道などと文なしたるなり。○道だにやなき。心に親しくする方法ばかりも無き事かと嘆息したるなり。

○一首の意は、あなたは他人に親しく逢はるとも、自分はなほ心の中に互ひに親しく思ひあふ方法だけもないかナアとなり。相逢ふ事は適はずとも、せめて心の中の親しみのありたしとの切情なり。抄には、此の下に通はんの意を、忍びて通はんと説かれたれど、さては面白からじ。たとへ直接に逢ふ親しみはせずとも、互ひの心の中は思ひ思ふ親しき中にてありたき意に見る方、情も切なるを得て、面白きにあらずや。此の歌、其の情はいかにも切にあはれなれど、つくば山の戀詞の細工は、反つて、其の情を削ぎたるを覺ゆ。

○はじめて女に遣はしける

大江匡衡朝臣

人しれず思ふ心はあしびきの山下水のわきやかへらむ

○山下水。山麓の木がくれなどを流れゆく水を言へるなり。人知れず思ふ心の激しきにたとへたる比喻なり。○わきやかへらむ。戀情の激しく亂るゝを、水の縁にて言へるなり。○一首の意は、獨り思ひ焦るゝ心は、山下水の如くに激しく亂るるであらうといふ事にて、あなたを思ひ焦るる自分の心は、それぞ。なにとぞ察してくれよとの餘情なり。獨り思ひ焦るゝ戀情の、切なきものなるよしを説明して、餘情に自分の戀情をのべて同情を求めたるなり。比喻もすなほにして、平凡なれどやさしくあはれなる感はある歌といふべし。

○女を物ごしにほのかに見て遣はしける

清原元輔

にほふらむ霞の中の櫻花思ひやりてもをしき春かな

○にほふらむ。にほふは、つや／＼と美しく光る事にて、らむは、婉曲に言はん爲めに、附したるにて、にほふとのみ言ふも、さして意味には禮はりなし。○櫻花。女を花に見たてたるにて、上の三句は、物越しにほのかに見たる女を、霞の中に匂ふ花に見たてたる比喩なり。○思ひやりても。他人のものとなして、自分のものとして見られぬを思ひやりて、マア一の言なり。○をしき春かな。をしき姿であるワイの意なり。女を花にたとへたる縁によりて、姿を春と文なしたるなり。

○一首の意は、つや／＼と美しい、あの霞みの中に匂ふ花のごと、ほの見たるあなたの美しき姿、他人の物として見る事かと思へば、誠に惜しう御座るといふ事にて、女を花にたとへたる比喩歌なり。我が物として見られぬ残念さを言うて、其の同情を求めたる意匠は、誠に面白し。されど、匂ふらむの冒頭の句、少しく耳ざはりなるを覺ゆ。

○年を経て言ひわたりける女の、さすがにけぢかくはあらざりけるに、春の末つ方言ひつかはしける。

大中臣能宣朝臣

幾返へり咲き散る花をながめつ、物思ひくらす春にあふらむ。

○端書の意は、多年我が戀ひつゞけ居れど、相近づく能はざる境遇の女の許に、春の末頃に言ひやれりとなり。○幾返へり。幾年か繰り返しかへしての意なり。○ながめつ。物思ひてながめつ

の意なり。○春にあるらむ。かひなき春にあふ事なるよとの嘆息なり。

○一首の意は、春毎に咲き散る花を、あなたを思ふなげきの中にながめ／＼と、幾年か斯く繰り返しかへしく、全じかひなき春にあふ事であらう、さても／＼といふ事にて、年月をかかはぬ戀ひになげきくらす嘆息をのべて、其の同情を求めなすなり。春の末にやるなれば、全じなげきの月日をくりかへす事を、物思ひくらす春のみといひ、また物皆嘆きの中に暮らす意を、ささるる花をながめつといひて、表はしたるなど、意匠面白くしてすなほに、また、あはれなる情もきこえたりや。

○題しらず

躬

恒

奥山の峯飛び越ゆる初雁のはつかにだにも見てややみなむ

○奥山の峰とび越ゆる初雁の。はつかにを言ひださむ序にして、歌意に關係なし。初雁のはつと僅のはつの同音にかけて、序とせるなり。○はつかにだにも。僅に一寸でもマアといふ意。續拾遺集戀歌爲氏「山の端に更けて出てたる月影のはつかにだにも争かて知らむ」なども同じ。○見てややみなむ。あはずにしまふ事かマアの嘆息なり。

○一首の意は、僅に一寸でも逢はずにしまふ事かマアと、あひがたきを嘆息したるなり。上の三句は序歌なれど、初雁のゆかしきもの、峰とび越ゆるの瞬間のけしきなどを用ひたる、其の人のゆかしげなるをも、自からさかせ、又、下の句の意に自から應ずるところあるは、面白き序歌の用

ひ方と言ふべし。哀れなる感情もさこえたり。

○題しらず

亭子院御歌

大空をわたる春日の影なれやよそにのみしてのどけかるらむ

○此の歌、大和物語に、「先帝の御時、刑部の君とて侍ひ給ひける更衣の、里にまかり出て給ひて久しう入り給はざりけるに」とあり。刑部の君と言ふ更衣が、我が實家に出てて、久しく禁中に歸へり來たらざる時によめる歌なりとなり。○大空に渡る。空をめぐり行く意なり。○春日の影なれや。春の日の影なればにやと同じ。影なる故にやなり。古今集四の卷に「里はあれて人はふりにし宿なれや庭もま垣も秋の野らなる」、同十二卷に「わが戀ひは深山がくれの草なれや茂さまされど知る人のなき」などの宿なれや、草なれやと同じ。これらも、宿なればにや、草なればにやの意なり。○よそにのみして。我が居る禁中を外にばかりしてとなり。○のどけかるらむ。里に長閑にくらして居る事ならむとなり。

○一首の意は、そなたは、大空をめぐりゆく春日の日の影なる故にや、此の禁中は全くよそにして歸らず、里に長閑に暮らして居るのであらうといふ事にて、久しく里より歸り來ぬを、婉曲に怨みたるなり。春日の影とたとへて、長閑に里にくらすと言ひたる詞の文を、めてたく見るべきみ歌なりや。

○正月、雨ふり風ふきける日、女につかはしける。

謙徳公

春風の吹くにもまさる涙かなわがみなかみも氷とくらし

○吹くにも。吹くにつけてもなり。○まさる涙かな。涙の多くこぼるる事となり。○我がみなかみ。我が身の奥を、水の上流にたとへたるなり。○氷りとくらし。氷りのとくるらしいとなり。

○一首の意は、春風の吹くにつけても、我が涙は一層多くこぼるゝやうになつたワイ。春には心のなごむべきに、斯く餘計涙のこぼるゝは、春の來たれる爲めに、我が身の奥にも、氷りのとけ初めたらしいといふ事にて、春來たりて一層物思はるゝ心を、春風に水上の氷りとけて水かさまさるけしきに、幼く思ひよせてよめるものなり。わが水上も氷りとくといふ意匠は、此の歌の骨としたるところなれど、少しくよぎけたる心地するは、我が心の奥と水の上流との、比況の、やゝ穩當ならざればなり。

○たびく返事せぬ女に

おなじ人

水の上に浮きたる鳥の跡もなくおぼつかなさと思ふころかな

○水の上に浮きたる鳥の跡もなく。返事の文のなきをたとへたるなり。文字の事を鳥の跡といふ事は、古今集の序文に「まさ木のかづらながく傳はり、鳥の跡久しくとまれば云々」、枕の草紙にも「心にくき所へつかはすへき仰せがきなどを、あやしき鳥のあとなどのやうには、などかはあ

らむ、夫木集家長「池にすむ鳥のあとさへ絶えぬらむ氷る硯のみづぐきの末」それより斯く工みたるなり。水の上に浮きたる鳥の跡となしたるは、水上の跡殊にとまるものなき意より、僅かばかりの文もなき意をきかせたるなれば、僅かばかりの返事もなき意に見るべし。○おぼつかなさ。女の心中のいかに思うてならんか、同情を寄せてくれるか否か、頼みがたき心なり。

○一首の意は、いかに文をやりても、一寸の返事もなき故に、此の頃は頻りとおぼつかなく思ひなげかるゝとなり。哀れなる情もひびきたり。水の上の鳥の跡の意匠も、面白く工みたりといふべし。

○題しらず

會 福好忠

片岡の雪間にねざす若草のほのかに見てし人ぞこひしき

○雪間にねざす若草の。ほのかにを言ひ出づる序なり、雪の積もれる間より生ひ出づる若草は、値にちらとばかり見るべきものなればなり。

○一首の意は、ちらと見たる人の、戀しく思はるゝといふ事にて、また注すべきものもなし。

○返へりごとをせぬ女の許に、つかはさんとて、人のよませ侍りければ、二月ばかりによみ侍りける。

和泉式部

あとをだに草のはつかに見てしがな結ぶばかりの程ならずとも

○あとをだに。「親しく遇はずとも、せめて返事の手紙だけでも」の意なり。○草のはつかに。一寸と言ふやうなる意なり。古今集戀歌壬生忠岑「春日野の雪間をわけて生ひ出づる草のはつかに見えし君かも」の詞によれるものなるべし。而して、一首の意匠、此の草の縁によりて仕組みたり。見てしかな。見たき事よの希望なり。○結ぶばかり云々。契りを結ぶ程にはあらずともなり。草の長く延びたるを、結ぶ程になりぬと言ふより、草の縁によりて工みたるなり。

○一首の意は、契りを結ぶ程ならずとも、せめて返事だけでも、一寸は見たきものなりとの意にて、古今集の其の歌の草のはつかにの詞を根據として、其の草の縁を以て、跡といひ、結ぶといひて一首を結構したるところ、工みて而して目に障る刀痕もなく、さすがに才女が妙手を見せたりといふべし。

○題しらず

藤原興風

霜の上に跡ふみつくる濱千鳥行くへもなしと音をのみぞなく

○霜の上に。險難を犯してといふ意味を、たとへてもたせたり。○跡ふみつくる。手紙を出だしたる事をたとへて言へるなり。○濱千鳥。自身をたとへたるなり。○行くへもなし。心の定めやうのなき意にて、どうしてよいやらわからぬ心を言へるなり。萬葉集「大崎の荒磯のわたりはよ葛の行くへもなくや戀ひわたりなむ」なども、同じなり。

○一首の意は、險難をしかして文を送りたるに、返事の更に無ければ、自分はとうしてよいやらわからぬと、毎日泣いて戀うてばかり居るといふにて、返事のなさを恨みたるなり。文の事を濱千鳥のあとなど、常に言ふより、其の詞より、あとよみつくる、行く方もなし、音とのみなくと、すへて濱千鳥の縁によりて、一首の趣向を立てたる比喩歌なり。此の女は、大に憚るところあるものなるより、險難ををかして手紙をやりたる意を、箱の上にとたとへて發表せるものならむとちばゆ。すなほに工みたる比喩、見るべしと言ふべきか。

○題しらず

中納言家持

秋はぎの枝もとををに置く露の今朝消えぬとも色に出てめや

○枝もとををに。枝もたわむといふも同じ。枝も挽みしなふ程にの意なり。○置く露の。露の如くにの意なり。○今朝消えぬとも。今朝我が命の亡くなるともにて、露の縁にて消ゆるといへり。戀ひくして今朝つひに戀ひ死にもせんとの切情なり。○色に出てめや。此の句の上に、秋萩の如くといふ詞を、置きて見るべし。秋萩の如くに色に出づる事はせずとなり。秋萩は紅葉する故に、それに反對して、我れは心の色を表はさずと工めるなり。心の色をあらはすとは、我が戀ひしき心をあらはす事なり。

○一首の意は、秋萩の枝に置く露の如く、我が命は今朝もろく戀ひなきて死するとも、秋萩の如く我が心を色にあらはすやうの事はせじ。我れはそれとはうちつけねども、今朝も命のおぼつかない程に戀うて居るとの意なり。萬葉集に「秋萩の枝もとををにおく露のけなげぬとも色に出てめやも」とあるを、訂正して載せたるものなり。消なげけぬともとあるを、今朝消えぬともとなほしたり。今朝と限定して言へる、誠に面白し。萬葉集のよりも、一層其の情の強くさこゆるものあるは、この妙技によれり。味ふべき今朝といふべし。

○題しらず

藤原高光

秋風に亂れて物は思へども萩の下葉の色はかはらず

○亂れて。萩の亂るる如くに亂れての意に見るべし。○萩の下葉の。の如くの意なり。○色は變はらず。色には顯はすを得ずといふ意を、萩の下葉の變色するによせて、色は變はらずと言へるなり。

○一首の意は、秋風に萩の亂るる如く、自分も亂れて戀ひなげけども、さりとて萩の下葉の色の變はるがやうに、君を思ひ亂るる心は、けしきに顯はすを得ずといふ事にて、色にはえ顯はさざれど、君を思ひ亂れてぞ、推察せられてよと訴へたるなり。

○忍草の紅葉したるにつけて、女の許に遣はしける。

花園左大臣

我が戀ひも今は色にや出てなまし軒の忍ぶも紅葉しにけり

○今は。今はモイなり。これまでは忍んで来たが、今は最早忍ぶに堪へ難くなる意なり。○軒の忍ぶ。忍ぶと言ふ名を以て居る忍ぶ草もの意に見るべし。○紅葉しにけり。色に出でたる意なり。

○一首の意は、忍ぶを名とせる軒の忍ぶ草も、今は色に出でたるよ。君を戀ふ自分の情も、今はモイ忍び難く、表にあらはれやうといふ事にて、これまでは、おつと堪へ隠して居つたが、今はもはや心に包みきれず、つぐるなれば、同情をよせてくれよとの意なり。軒の忍ぶ草の紅葉に、何んの戀ひの意味あるにあらねど、それを、切なる情より、斯く幼く思ひよせたるにて、そこが詩情なり。

○和歌所歌合に久忍戀といふ事を、攝政太政大臣

石の上ふるの神杉ふりぬれど色には出でず露も時雨も

○ふりぬれど、久しき年月を経たる意。○露も時雨も。露にも時雨にも意なり。比喻歌なれば、此の露と時雨は、實は我が涙を言へるなり。

○一首の意は、石上の布留の神社の杉は、久しき年を経たれども、露にも時雨にも少しも色をかへずといふ事にて、自分の戀も、久しきよりの事にて、常に泣きこがれては居れど、色にはあらはさずといふ意を、たとへて發表せるなり。而して、其の心中を推察せられよとの心を、餘情に残したり。露も時雨もと言ふ中に、我が常に泣き居る心をさかせたる工夫、誠に面白しといふべし。尾張の家菴には、上の二句はふりぬれどの序なりと言はれたれど、おのれは同意し難し。これは比喻歌

なれば、上の二句も序にはあらずと思ふ。

○小野宮歌合に忍戀の心を 太上天皇

我が戀ひは楨の下葉にもる時雨ぬるとも袖の色に出でぬや

○もる時雨。上葉の間よりも来たりて、下葉にかゝる時雨なり。もる時雨の如くの意に見るべし。二三の句は比喻なり。楨の下葉にもる時雨の如くとは、もりくる時雨にぬれても、楨の下葉の色かへざる如くの意なり。○ぬるとも。我れは戀ひしくの涙に袖をぬらしつもの意なり。○色にいてぬやのやは反語なり。

○一首の意は、楨の下葉は、もりくる時雨にぬれても、色には出でじ。その如くに、自分も、人を戀ふ涙は、袖を濡らして居れど、さて色には出でじとなり、楨の下葉にもる時雨の比喻は、巧みなりといふべし。忍びくりに泣き居る自分の涙に對して、面白く言ひ得たる詞ならずや。

○百首歌奉りし時よめる 前大僧正慈圓

我が戀ひは松を時雨の染めかねてまくずが原に風さわぐなり

○二の句より下は、すべて比喻なり。○松を時雨の染めかねて。戀ひなけど、さて思ひのかなはぬをたとへたるなり。時雨はわが戀の涙、松はわが戀ひ、染めかねては、かなはぬ意の比喻なり。○まが原に風さわぐ。恨めしく思ひ亂れ居るけしきをたとへたるなり。葛の葉はよく恨めしき意にかけて用ふ。古今集戀歌平定文「秋風の吹きうら返へす葛の葉のうらみてもなほ恨めしきかな」

拾遺集戀歌藤原正家「秋風に吹き返へされて葛の葉のいかに恨みし物とかはしる」後拾遺集戀歌寂
覺法師「秋風になびきながらも葛の葉の恨めしくのみなどか見ゆらむ」など、多く見ゆ。されば、
ま葛が原に風さわぐけしきをかりて、恨めしき心をあらはしたるなり。

○一首の意は、我が戀ひは、ふる時雨のかひなく、松はいつまでも伴れなき縁にして、葛の野原に
風のうらめしく吹きすさぶけしきであるといふ事にて、戀ひなげどく思ひはかなはずして恨めし
く思ひ亂るる意をのべたるなり。此の時代の巧みなる手ぶりを示したる歌といふべし。

○家に歌合じ侍りけるに、夏戀の心を、

攝政太政大臣

うつせみのなくねやよそにもりの露ほしあへぬ袖を人のとふま
て

○うつせみの。夏の戀といふ題より、なくねを言はん爲めの道具に、此の夏の景物を取り來たり
て、夏の題意をさかせたるなり。○なくね。我が戀ひ泣く聲なり。○よそにもりの露。聲のよ
そにもりぬらむといふ詞のもりと、森の露と言ひかけたる懸詞なり。うつせみと森とは、一首を
結構する上の道具に用ひたるまでにて、歌意には關係なし。○露ほしあへぬ袖。涙のほしきれぬ
袖の意。袖の涙のほしきれぬ程にこぼるるさまなり。○人の問ふまで。人の怪しみて問ふ程まで
にの意にて、此の下に「我が戀ひなれば」といふ如き詞を、添へて見るべし。

○一首の意は、ほしきれぬ程に涙にぬる我が袖は、人のあやしみてとふ程までには、あなたを戀ふ我
が戀ひなれば、今は其の泣くねの、忍ぶとすれど、外にもれてきこゆる事ならむとなり。よそにも
りの露の懸詞は、少しく耳立ちておもしろからねど、一首の結構言ひまはしは、實に此の時代の巧
みを見せたる歌といふべし。

○

寂蓮法師

思ひあれば袖に螢をつゝみてもいはばやものを問ふ人はなし

○思ひあれば。忍びがたく戀ひしき思ひあればなり。○袖に螢を包みても。後撰集大和物語に見えたる、
螢を汗衫カサネの袖に包みて、「つゝめどもかくれぬものは夏虫の身よりあまれる思ひなりけり」と歌ひ
て、思ひ焦るる心をつけたといふ記事の本としたる意匠にて、それに倣うて、我が心中をつげんと、
螢を袖につゝみて見せてもといふ意なり。○いはばやものを。うちつけに物を言ひたく思ふとなり。
直接に我が心を語たりたく思ふ意なり。○問ふ人はなし。螢を袖につゝみてもの下に置きて見るべ
し。物を思ひ居るか、其の人の問うてくれぬとなり。畢竟、我が心を推察してくれぬとの意なり。

○一首の意は、忍びがたく戀ひしき思ひある故に、螢を袖に包みて其の人に見すれど、其の人は推
察してくれぬ。いつそ直接に我がつげたく思ふとなり。美濃の家菴に、古今集戀歌肥友則「夕ざれ
ば螢よりけに燃ゆれども、光り見ねばや人のつれなき」をも本歌として、問ふ人はなしの意に「光
り見ねばや」の意を添へて見るやうに言はれたれど、おのれは、此の古歌はこの歌に關係なしと思

よ。唯だ大和物語後撰集の其の古談によりたるを、二三の句に認むるをよぼゆるのみ。尾張の家也も、これを説き破らざりしは、いかにや。抄の説は全く誤れり。

○水無瀬にて、男のこども久戀といふ事をよみ侍りしに、

太上天皇

思ひつゝ、經にける年のかひやなきたゞあらましの夕ぐれの空

○思ひつゝ。 逢はれん逢はれんと思ひつゝなり。○かひやなき。 美濃の家也に「かひぞなきなどばあらで、やとあるは、末つひにかひなくてややみなむの意なり」と言はれたる如し。かひなくて終るか知らぬと、おぼつかなく思ひたる意なり。○あらまし。 かう有らうあう有らうと預期する意なり。逢はれんくゝとの預期なり。○夕ぐれの空。 夕ぐれの空のみにてといふ意に見るべし。○一首の意は、 あはれんくゝと思ひつゝ、幾年月を送り來たりぬ。されど今だにあふを得ず。此の様子にては、たゞ預期するのみの夕ぐればかりにて、つひにあふを得ずして終はるか知らぬ、おぼつかなきといふ事にて、其の言ひまはしの、誠に巧みにして、また、其の意匠も面白く工みたるは、此の時代のめてなき手ぶりを見せたりといふべし。

○百首歌の中に忍戀

式子内親王

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることのよわりもぞす

る

○玉の緒よ。玉の緒は命の事にて、我が命よと呼びかけたるなり。○絶えなば絶えね。死ぬなら死ぬといふを。緒の縁にて言へるなり。獨り心に思ひ焦るれば、死にさうな心もちのする意をこめたり。○ながらへば、此のまゝに存命せばなり。○忍ぶる事。 忍ぶるは、心にのみ思つて、色に出さじと隠すなり。○弱りもぞす。 忍ぶ力の無くなるをいふ。弱りもぞせむと言ふべきを、必ずと想像する意より、強く断定して言ふなり。○一首の意は、我が戀ひを、隠し忍びては來たりたれど、次第に忍び難き心地する。かくて、此のまゝに存命せば、忍ぶ力は必ず無くなるは知れたり。色に出づるは恥かし、また人に知らるゝも恥かし。我が命よ、死ぬなら死んでしまへ。其の方が、いつその事よしといふ事なり。獨り心に戀へば、死にさうな氣もちもするに、あらはすは恥かしく、さりとて、忍ぶはいかにも堪へがたきより、いつそ死をと嘆きたる意なり。細き意匠を、残りなく言ひまはしたる手腕、いつもながら上手といふべし。玉の緒よ絶えなば絶えよとはじめにうちつけたるも、切情に適して、遒勁なる發表を得て、誠にめでたし。

○全じく

おなじ人

忘れてはうちなげかるる夕べかな我れのみ知りてすぐる月日を

○忘れては。四、五の句の下に置きて見るべし。○うちなげかるる夕べかな。夕べには毎時嘆げか

るるワイとなり。此の上に「人の知りたるやうに、かなはぬ戀ひを」といふ詞をあきて見るべし。○
我れのみ知りて。戀ひしく思ふ事を、其の人にはつぐるを得ずして、獨り我が心に思ひ焦れての
み居るなれば、自分の戀ひは、唯だ自分の知るのみなり。

○一首の意は、戀しく思ふ事は、其人には言ひかねて、自分獨り心に戀ひ焦れて居るなれば、我
が戀ひは、唯だ自分が知るのみなるに、それを忘れては、夕べになると、毎時、其の人の知りたる
やうに、かなはぬ戀ひをなげくツイといふ事にて、かねて、言ひかねながら、さすがにかなはぬを
嘆ぐ戀ひの心なり。おもしろき戀の情をうつし得たりといふべし。

○全じく

おなじ人

わが戀ひは知る人もなしせく床の涙もらすなつげのを枕

○せく床の涙。せくとは寒く意にて、我が涙を人に知られじとするを言へるなり。床の涙は、夜
床に獨りこぼす涙なり。○もらすな。此の泪のさまをもらして、人に知らすな之意なり。○つげ
の小枕。黄楊木で造れる枕なり。枕よと呼びかけたる意に見るべし。

○一首の意は、我が戀ひは、知つて居る人は無い。若し知つて居るものありとせば、我が夜床の枕
である。人に知られじと、夜床にのみは戀ひ泣き居る事は、枕は知つて居る。されば、其の夜床の
涙を、我が黄楊の枕よ、よそにももらして、人に知らしてくるなよと、たのみたるなり。恥かしさ
に包み隠して居れど、獨り寐の夜床には、常に戀ひ泣き居るさまを言へるなり。せく床の涙に、

夜床には常に密に泣き戀ふといふ意をこめたり。枕に涙をもらすな之意匠も、枕に頼むが、主旨に
はあらずして、これを以て、獨り密に戀ひ泣き居る意を發表したる道具立てなり。耻かしく苦しさ
戀ひの情、おもしろきを得たりといふべし。

○百首歌よみ侍りける時、忍戀、入道前關白太政大臣

忍ぶるに心のひまはなけれどもなほもるものは涙なりけり

○忍ぶるに、人に知られじと隠す意なり。○心のひまはなけれども。油断なく意を用ふれども
なり。隠くすに油断なく意を用ふる詞の下には、絶ゆる間もなき我が戀ひの心をこめたり。○な
ほ。それでもまだの意なり。○もるものは、もれて人目につくものはの意なり。

○一首の意は、人に知られじと、油断なく意を用ひて隠して居れど、それでもまだ、我が絶え間
なき切なる戀ひは、自から泣くをとめず、戀ひ泣く涙の、もれて、人目にもつくツイとなり。耻か
しさに深く包みて獨り泣き居るさまを言へるなり。涙の忍びがたきを説明するにはあらず、これを
道具立てとして、獨り泣き居る意を發表したる意匠なり。

○冷泉院みこのみやと申しける時、侍ひける女房を見か
けして、言ひわたり侍りける頃、手習ひしける所にまかり
て、物に書きつけ侍りける。

謙徳公

つらけれど恨みんとはたおもほえずなほ行くさきを頼む心に

○端書の意は、冷泉院が皇太子にておはしたる時、其の御殿につとめ居たる女官と、顔を見あはすやうになりて、戀ひしきよしを、久しく言ひつけ居りたるが、其の頃、ある日、其の人の手習ひしける所にゆきて、書きつけたる歌なりとなり。

○一首の意は、かくつらきあなたなれど、まだ將來をあてにする心より、つらき心を、恨めしくは、マァー、思はないとなり。伴れない人も怨めしうはあれど、なほいつかはと將來の頼みを未練にて、怨めしとは一向思はずとの意なり。

○返へし

讀人知らず

雨こそは頼まばもらめたのまづば思はぬ人と見てをやみなん

○雨こそは、もらめへつとくなり。○頼まば、頼ばとてもの意に見るべし。頼めどと言ふべきところなれど、頼まばに對して、頼まばとありたくて、かくむづかしくともを省きたる詞づかひなるべし。上の二句の意は「頼まばとて、雨はなほもらん」との比喩なり。俗に頼む木の下に雨の漏るなどいふ意と。全じなるべし。○二の句の下に「併し頼まば、私は雨の如きつれなき事はせぬ。言はるゝ如く行末を頼みたまはば、私を思うてくれるうれしき人と思はん」といふ如き詞を入れて見るべし。○見でをやみなん。思うてマァーしまはうとなり。とは感動の助詞なり。○一首の意は、よし頼むとも、雨はなほ伴れなく漏るやうの事をする。されど、私は雨の如き伴

れなきものにはあらず。言はるゝ通り將來を頼みたまはば、私を愛して下さるゝうれしき人と思ひましよう。若し頼みたまはずば、思うて下さらぬ人と思つてしまひましようソイといふ事にて、「されば言はるゝ通り、將來を頼みて、いつまでも戀はらず愛する心を見せて給はれといふ意を余したり。畢竟いつまでも戀はるゝ心に、深き情の人なるを見て、同意せんとの心なり。行く末をたのむと言はれたるより、そのたのむの詞を本として、斯く意匠をたてたるなり。

○題しらず

紀貫之

風ふけばとはに波越す磯なれや我が衣手のかわく時なき

○とはに。常にの意なり。○磯なれや。磯なればにや、即ち、磯なる故にやなり。○我が衣手の乾く時なき。絶えず袖の濡るよとの意なり。常に戀ひ泣くさまなり。○一首の意は、常に波の越え居る磯である故にや、我が袖の乾く時はないワイといふ事にて、涙に絶えず袖の濡るより、波に絶えず濡るる磯なるかと、幼くあやしみたるは、狂じたる切情にておもしろきなり。畢竟、つれなき人を怨む涙の深きさまなり。此の歌、伊勢物語に「風吹けばとはに波越す岩なれや」とあるに、單に磯と岩の一字の異りたるのみ。伊勢物語の岩の方、穩當なる道具と思ふ。

○題しらず

道信朝臣

須磨の蟹の波かけ衣よそののみきくは我が身になりけるかな

○須磨の蟹。いづくの蟹にてもよろしかるべけれど、須磨の蟹は、古來常に詠むところなれば、用ひたるものなるべし。蟹は海岸の賤を言ふ。○波かけ衣。波のかゝりて濡れたる衣なり。漁りに藻刈りに鹽くみに、海士が衣の常に海波に濡るるをいふなり。○よそにのみさく。他事にはかり聞いて居る意にて、よそにのみさく須磨の蟹の波かけ衣はと、詞を轉倒して見るべし。○我が身になりけるかな。今は我が身の上の事になつたツイの嘆息なり。我が涙に濡るる袖の、蟹の波かけ衣の如きを嘆息せるなり。

○一首の意は、須磨の海士の、絶えず波にぬらす衣のさまは、他事にさゝ居りたるが、今は我が身の上の事になつて、我が衣は絶えず濡れ居るツイといふ事にて、戀ひの涙に絶えずかさくれ居る意なり。「よそにのみさく」の詞は、須磨の蟹の波かけ衣の上に置きて見るべきなれど、少しく無理なる言ひまはしと言ふべし。

○薬玉を女に遣はすとて、男にかはりて、

三條院女藏人左近

沼毎に袖ぞぬれけるあやめ草心に似たるねをもとむとて

○薬玉。夏の巻に詳しく言へり。五月の祝ひに、互ひに取りやりする物なり。○沼毎に。多くの沼をあさりたる意をかかせたり。○袖ぞぬれける。袖を水に濡らしたる難義を言ふと共に、我が涙をもさかせたり。○あやめ草。あやめ草のねをもとむと續くなり。○心に似たるね。菖蒲

の根に、我が泣くねのねをかけたなり。されば、戀ひ泣くわが心に似たる菖蒲草の根を求むとてといふ意に見るべし。

○一首の意は、私はあなたを戀うて泣いて居る。其の私の心に似たる菖蒲の根を、尋ねて送らんと思つて、あちらこちらの沼に、泣きながら袖を水にぬらしましたよといふ事にて、かゝる心盡くしの薬玉、其の情を察して下されとの餘意なり。抄には、心に似たるねを、我が心の深長なるに似たる根と説かれたれど、未だし。戀ひなく心に似たるねに見るべきものとおぼゆ。さる方、戀ひに泣く意も、一層こもりて、面白しとおぼゆればなり。

○五月五日、馬内侍に遣はしける。 前大納言公任

時鳥いつかと待ちし菖蒲草今日はいかなるねにかなくべき

○時鳥。時鳥の待ちしといふ意なり。○いつかと待ちし、いつしか早く來たれと待ちし意なり。○菖蒲草。菖蒲草の時の意に見るべし。五月の五日をかかせたる詞なり。上の三句は、古歌に五月まつ山時鳥などいうて、時鳥は五月を待ちて鳴き出づるやうに言ふより、いつか早く來たれと時鳥の待ちたる其の節になりたりといへるなり。○いかなるねにかなくべき。いかなる泣き聲に泣きてよからうか。即ち、いかに泣いて此の心をつげなば、あなたの心にあはれとさこえやうかの意なり。ねは泣くねにて、菖蒲の根の縁にて言へり。

○いつか早く來たれと此の時鳥の待ちたる其の節にもなりぬ。今日は、さて、いかに泣いて此の心

をつけまつらば、あなたにあはれときかれやうかといふ意にて、常に戀ひ焦れて居る心を、五月の五日に言ひやるなれば、五月待つ山時鳥などの古歌より、我が身を時鳥にたとへ、また菖蒲草を取りなし、さて、泣いて是非同情を求むる意を、いかなるねになかばよからむなどと工みて、歌ひたるなり。我が身を時鳥にたとへ、さて、いかに言はば同情を得べき意をきかせたる下の句の意匠、巧みに面白くも描へられたりといふべし。

○返へし

馬内侍

五月雨はそらおぼれする時鳥ときになくねは人もとがめず

○五月雨は。五月雨の頃は時鳥のなくべき時なりの意に見るべし。○そらおぼれする。俗にそらとぼけるといふ如き詞にて、自分の知りたる事を、よそくしく知らぬげにもてなすをいふ。續拾遺集戀歌、紫式部「おぼつかた、それかあらぬか明けくれの空おぼれする楳の花」、壬生三品集「契りしはいかにと問ひてながむれば空おぼれする春の夜の月」などにて、知るべし。○時鳥。時鳥よと呼びかけたり。○ときになくねは。鳴くべき時になく、聲はの意なり。○一首の意は、五月雨の頃は、時鳥のなくべき時なり。それを知りながら、いかになかんなど、空とぼけたる時鳥よ。なくべき時になくは、誰れも咎める事にあらずといふ事にて、されば、さる事を言はずに、思ふまゝになくべしとの餘情なり。公任のは、時鳥は自分をたとへたるにて、いかなるねになくとは、同情を求むる底意なれど、馬内侍は、其の下の意を知り得ぬやうにして、單に

時鳥のいかになくべきかと問ふ意にのみ見て、斯く返へしたるにて、公任の意を取りあはぬ心なり。巧みなる意匠、しかも、すなほなるは、返へし得たりといふべし。

○兵衛佐に侍りける時、五月ばかりに、よそながら物申し
そめて遣はしける。 法性寺入道前攝政太政大臣

時鳥聲をばきけと花の枝にまだふみなれぬ物をこそ思へ

○よそながら申しそめて。まのあたりにはまだはなしはせざる意なり。○時鳥。時鳥の聲をばにて、時鳥は、馬内侍をたとへていへるなれど、歌意にまでの深き關係をもたせずに見るべし。上の二句の下には、戀ひしく思ひ居れどといふ詞をおきて見るべし。○花の枝に。「楳の花の枝に」なれど、これも、歌意には關係なくして見るべし。○まだふみなれぬ。まだ文などを遣はしなれぬ意を、時鳥、花の枝などの縁にて、言へり。○一首の意は、お聲は聞きて、誠に戀ひしう思ひ居れど、未だかゝる文など遣はしなれずして、とやかくと嘆き居るといふ意なり。時鳥、花の枝は、一首を仕立つるまでの道具にして、歌の意にまで、深くかけて見るべからず。其の道具立てを味ふべき歌なれど、花の枝に時鳥のまだふみなれぬの詞は自分の心に、時鳥は先方の人にして用ひたるは同じものを兩方に混用して面白からず、無理なりといはざるべからず。

○返へし

馬内侍

時鳥しのぶるものをかしは木のもりても聲のきこえけるかな

○しのぶるものを。人に知られじと、聲は忍び隠くして居りたるにといふの意なり。密には自分も思ひ居たる意をこめたり。○かしは木、兵衛の異名を柏木といふ。先方の人が兵衛佐なれば、かく言ひて、また、柏木の森をいひかけたり。○もりても。柏木の森を、聲のもりてに言ひかけたり。○聲の。我が聲のきかれたる事よなり。

○一首の意は、此の時鳥は、人に知られじと、聲は忍び隠くして居れど、柏木の森をもれて、耻かしくも聲をきかれたる事よといふなり。比喩歌にて、時鳥は馬内侍自身なり。先方の歌の時鳥を受けて、自分の比喩にせるなり。私よりも思ひ焦れ居たりといふ事にて、さて、恥かしやとの意を婉曲にのべたるなり。

○郭公のなきけるを聞きつやと申しける人に、

おなじ人

心のみ空に成りつゝ時鳥ひとだのめなるねこそなかるれ

○端書の意は、時鳥が鳴きたるが、そなたも聞きたるかと、人の問ひけるに、かくよみて答へたりとなり。○心のみ。我が心ばかりがなり。○空になりつゝ、心が空になるとは、思ひあこがれたるを言ふなり。○時鳥。時鳥の如きの意に見るべし。○人だのめなる。頼むかひなき意なりと抄に言はれし如し。○一首の上に、「郭公は鳴いたかどうか知らざれど」といふやうなる詞を、添へて見るべし。

○一首の意は、心空に思ひあこがれて居れば、時鳥がないたかどうかは知らざれど、此の自身が時鳥のやうに、かひなき涙をこぼして居りまするといふ事にて、心を戀ひに奪はれたるさまなり。時鳥の聲の問題を、すげなくはねつけたるところ、切情思ひやられて面白し。

○題しらず

伊勢

みくま野の浦より遠に漕ぐ舟の我れをばよそに隔てつるかな

○みくま野の浦。紀伊の名所なり。○漕ぐ舟の。舟の如くに見るべし。抄には、上の三句は序といはれたれど、これは比喩なるべし。○よそに隔てつるかな。人が自分を遠ざけて親しまぬさまをいへるなり。

○一首の意は、海岸遠く漕ぐ舟の如く、人は自分を遠ざけたアトといふ事にて、わが心をよそにして、何にとも思はぬ人を、恨みたるなり。沖漕ぐ舟の比喩は、よく其の情景に適して、おもしろしといふべし。

○題しらず

おなじ人

難波瀉みじかき蘆のふしのまもあはて此の世をすぐしてよとや

○難波瀉。葦の序歌なり。○みじかき葦のふしの川。短き葦の節の間の如き短き時間を言へるなり。○あはて。我が焦るる君にあはずしてなり。此の世をすぐしてよとや。逢はずして此の世

を終はれとて、斯くは何んの同情もなき事かとなり。

○一首の意は、これ程までいろいろと、我が焦るる思ひを聞こえまつるに、阿んのうれしきも言葉もなきは、華のふしの間の如き短き時も、君に逢はずして我が世を終はれよとてかど、怨みたるなり。詞優美に、言ひまはしも道勁に、めてたくも其の切情をあらはし得たる、非凡の手腕といふべし。

○題しらず

人まろ

み狩りするかりばの小野のならばの馴れはまさらて戀ひぞまされる

○み狩りするかりば。御獵の場所なり。○ならば。ならば鳥の略語にて、鷹の異名なり。上の三句は、馴れまさらてと言ひ出ださん序にて、歌意に關係なし。馴れはまさらて。其の人にいよく馴るる事は得ずしてなり。

○一首の意は、いろいろと心は盡くせども、戀ひしき人にいよく馴るる事は得ずして、唯だ戀ひしき心の増すばかりであるといふ事にて、いかにするも、人の嬉しき同意のなくて、益々戀ひしき意なり。

○題しらず

讀人知らず

うど濱の疎くのみやは世をば經むなみのよるくあひ見てしがな

○うど濱。駿河の名所有度濱にて、疎くと有度との同音にかけての序歌なり。歌意に關係なし。○疎くのみやは。「斯く疎くてばかり」にて、やはは反語、經んの下に置きて見るべし。○なみのよるく。絶えざる意を、濱の縁にて言へるなり。

○一首の意は、斯く疎くてばかり、世を過ぎやうか、さるものにあらじ。絶えずあひ見たいものであるワイとなり。

○題しらず

おなじく

あづまぢの道のはてなる常陸帯のかごとばかりもあはんとぞ思ふ。

○常陸帯。昔正月十四日、常陸の鹿島神社の祭に、男女が布の帯に、其の想ふ男女の名を記して、神前に供へ、巫覡の結びて願つを受けて、婚を下定するといふ習ひありたり。これを帯占といへり。常陸帯とは、其の帯より出でたる詞なり。これまでの三句は、かごとばかりを言ひ出さん序歌にて、一首の意味に關係なし。帯にはかごとといふ物あり。即ち、帯鉤にて、帯の端につくる銅製の鉤にて、今のこはぜの如く、合はせて、帯をひきしむるに用ふるなり。○かごとばかり。言ひわ

けほどの僅かいさかの意にて、こはホンの一寸の間といふ意なり。其のかがごとばかりのかがごと帯鉤のかがごと、同音なるより、常陸帯のかがごとばかりとかけて序とせるなり。新勅撰戀歌安藝「越えばやな東路とさく常陸帯のかがごとばかりの逢坂の關」も全じなり。なほ此のかがごとばかりの例を一二あぐれば、源氏物語藤袴「おなじ野の露にやつるる藤ばかまあはれはかけよかごとばかりも」全總角「夜衣きてなれさ」とは言はずともかごとばかりはかけずしもあらむ」など、皆この意なり。なほかごとの詞は、俗にいふかこつけるなどいふ意に用ふる事もあれど、こには用なき故に言はず。

○一首の意は、言ひわけほどの一寸の間にもよき故に、どうぞして君に逢はうと思ふといふ事なり。

○おなじく

おなじく

濁江のすまん事こそかたからめいかてほのかに影を見てまし。

○すまん事こそ。共に夫婦となりて住む意を。水の澄む事にたとへたり。○いかて。どうぞしてなり。○影を見てまし。戀ひしき君の姿を見やうと思ふとなり。それを、濁江の縁にて、影を見ると言へるなり。上の三句は比喻なり。

○二首の意は、濁江の水の澄む事は出来ない。その如く、共に君と住む事は出来ざらむが、どうぞして戀ひしき君の姿を、ほのかにも見やうと思ふといふ事にて、せめて一目見るだけでもしたしとの切なる戀情なり。

の切なる戀情なり。

○おなじく

おなじく

時雨ふる冬の木の葉のかわかずぞ物思ふ人の袖はありける。

○冬の木の葉の。冬の頃の木の葉の如くといふ意に見るべし。○かわかずぞ。乾かすにぞの意なり。袖は乾かすにぞありけると續くなり。

○一首の意は、時雨ふる冬の頃の木の葉の如くに、戀ひなげく人の袖は、常にこぼるる涙の爲めに、乾かすにぞあるワイといふ事にて、常に涙にくれ居るさまなり。抄には、上の二句を乾かぬの序歌と言はれたれど、序にはあらず、これは比喻にて、一首の意味の上に關係あり。

○おなじく

おなじく

ありとのみ音に聞きつゝ音羽川わたらば袖に影も見えなむ

○ありとのみ。君は其處に在りとはかり噺さに聞きつゝなり。二の句の次に、顔も見るを得ずといふ如き詞を置きて、見るべし。○音羽川。音にきく、わたらば、影も見えなむなどの、一首の詞の上の結構に用ひたるまでの道具にて、歌意には關係なし。○わたらば。思ひ焦れて行くをば、川の縁にて言へるなり。○袖に。涙に濡るる袖にの意なり。○見えなむ。見えて欲しいとなり。

○一首の意は、君は其處にありとはかり、噺さに聞きつゝ、さて、顔も見る事を得ず。あはれ、

思ひ焦れて行かば、此の涙に濡るる袖に、せめて影を見せてくれよと、はかなき影ばかりも見たき戀情なり。

○おなじく

おなじく

水莖の岡の木の葉を吹きかへし誰れかは君を戀ひんとか見し

○水莖の岡の木の葉。水莖の岡に散りたる木の葉の意に見るべし。水莖の岡は、近江の名所、或は、讃岐の名所なりといふ。何處の落葉にてもよろしかるべきを、殊更に水莖の岡を用ひたるは、文通も絶ちたる意を、下にきかせんとしたるなるべし。○吹きかへし。風が落葉を吹きかへすに、一度吹きて散らしたる落葉を、また吹きかへすさまなり。また繰り返して、絶ちたる人を戀ふ意をいへるなり。○こひんと思ひし。戀はうとは思はなかつたにといふ意にて、「さるにいかにしたる事ぞまた戀ひしく思ふ」の餘情をさきて、見るべし。

○一首の意は、文通も絶ちたる君を、またくりかへして、斯く戀はうとは思はざりしに、いかにしたる事ぞ、また戀ひしく思ふとなり。何處までも戀ひしき人の、一度は絶ちても、また戀ひしく思はるるさまなり。

○おなじく

おなじく

我が袖にあとふみつけよ濱千鳥あふことかたし見ても忍ばん

○我が袖に云々。文字を千鳥の跡ともいふより、我れに之を給はれとの意を、かく工みて言へるなり。

○見ても忍ばん。せめて君の文を朝夕に見て、戀ひしき此の心を辛抱せんとなり。

○一首の意は、何にとぞ文を給はれ。親しくあふ事は、とても出来ざれば、せめて好れしき君の文を得て、それを朝夕見て、戀ひしき此の心を慰めて、辛抱せんといふ事なり。其の情は切に思ひやらるるものあれど、あとふみつけよの細工、反つて其の情をさきたるをさぼゆ。

○女の許より歸り侍りけるに、程もなく雪のいみじう

降り侍りければ、

中納言兼輔

冬の夜の涙にこぼる我が袖の心とけずも見ゆる君かな

○冬の夜の涙に云々。歸り來たりての寒夜の獨り寝、女の伴れなき心を怨みて落涙ひややかなるさまなり。而して、上の三句は、心とけずもの比喻にも用ひたるなり。○心とけずも。うちとけずにマアといふ意。

○一首の意は、此の寒夜の獨り寝は、伴れなき君の心を怨みなきて、袖は涙にこぼりて冷やかなり。其の氷りて冷やかなる袖の如く、君はどうしても、いつまでも冷やかなる心にうちとけずに見ゆる事よ、うらめしやとなり。上の句の詞面白し。情景誠にあはれにおぼえしむるものあり。

○題しらず

藤原元真

霜こほり心もとけぬ冬の池に夜更けてぞなくをしの一聲

○霜こほり。寒夜のけしきなり。○心もとけぬ。心のびくとせぬ意にて、のびくとゆつくり安らかに寝られぬけしきなり。○冬の。冬の此の寒夜の意に見るべし。

○霜よりこほる寒夜の獨り寝、のびくと安らかにもねられずに居れば、夜ふけて、池の鴛鴦が一聲悲しげに泣くをさくといふ事にて、いかに身にしむ事ぞ、思ひやる人もと、同情を求めたるなり。寒夜の獨りねの身にしむけしきをのべて、其の侘しさを訴へて、同情を求めたるなり。歌からは舊けれど、其の情其の景、いかにも哀れに思ひやられて、限りなき餘情ある歌といふべし。

○おなじく

人も

涙川身もうくばかりなかるれど消えぬは人の思ひなりけり

○涙川云々。川といひ身もうくばかりといへるは、皆涙の仰山なるを形容したる詞なり。なかるは流ると泣かるゝを懸けたり。すべて上の句は、戀ひ泣く涙のあびたゞしきを言へるなり。

○消えぬは。其のあびたゞしき平にも消えぬものはの意に見るべし。戀ひしき心のやまぬを言へるなり。○思ひなりけり。思ひに火を文なしたり。それによりて、思ひのやまぬを、消えぬと言ひたり。

○一首の意は、戀ひ泣く我が涙は、川となりて、身も浮き上がる程に流るれど、其のあびたゞしき平にも消滅せぬものは、焦るる思ひの火であるワイとにて。涙と思ひの上に水火の關係を、幼く取り來たりて、人の戀愛の情ばかりは止み難きを言へるなり。

○女に遣はしける

實方朝臣

いかにせん久米路の橋のなか空にわたしもはてぬ身とやなりなん。

○いかにせん。どうしやうかと思ひ亂るる心なり。○久米路の橋。昔文武帝の時に役の小角(役の行者の事)といふ鳥渡あり。呪術に長じて、葛城山の岩窟に住みたるが、葛城山より金峰山にかけて岩橋を渡さんとて一言主神を語りたるが、御神其の形の醜さを耻ぢて、夜間に作り渡されけるに、渡し遂げざる程に夜明けにけりといふ古談あり。それより、物の遂げぬたとへに、久米の岩橋久米路の橋を用ふる事は、後撰集以來の歌にも多く見ゆ。後撰集戀歌「かつらぎや久米路の橋にあらばこそ思ふ心を中空にせめ」葛城や久米路にわたす岩橋の中々にても歸へりぬる哉「中絶えて來る人もなき葛城の久米路の橋は今も危ふし」などにて知るべし。この歌のも、久米路の橋の如くにの意に見て、遂げずに終る戀のたとへに見るべし。○中空に渡しもはてぬ。橋の縁にて、思ふ事中途に終る意を言へるなり。

○一首の意は、斯くては、我が身は久米路の橋の如く、思ふ事の遂げずに終はる身と成つてしまふ。どうしやうぞといふ事にて、戀ひの成らずに終はらばと、思ひ亂れて訴へたる意なり。

○女の杉の實を包みておこせて侍りければ

おなじ人

誰れぞ此のみわの檜原も知らなくに心のすぎの我れを尋ぬる

○誰れぞ此の。此の尋ぬるは誰れぞといふ事なり。此のは、いたく感動して其の筋はれたるをさしたる詞なり。○みわの檜原。三輪山の檜原にて、我が身をたとへてあらはしたるなり、而して、送られたる杉のみのみといふ言を、みわのみにひびかせたり。○三輪の檜原も知らなくには、我が身はまだ御存じなきにといふ事なり。何故に三輪の檜原を我が身の代りに用ひたるかは、次に言ふべし。○心のすぎ。心の直ぐといふ事を、杉にかけて言へり。我か心の直ぐなるを言へるなり。此の句は「心のすぎのしるしにて」といふ意に見るべし。即ち、直ぐなる我が心がしるしとなりて、人の尋ねられたる事ならむと言ふ意なり。

○一首の意は、まだ我が身を御存じもなき人なるに、斯くわざ／＼とひたまへば、我が心の直ぐなるが、しるしとなりての事ならむが、斯くも尋ねくださるほどなためういますか。よくマア、我が心の直ぐなるを知つても尋ね下さつた事よといふ事なり。心のすぎの我れを尋ぬるといふの意匠は、彼の有名なる古今集の「我が庵は三輪の山もと戀ひしくばとふらひ來ませ杉立てる門」といふ古歌より工みたるものなる事は、疑ふべからず。それには、杉をしるしと言ひたれば、心のすぐなるをすぎにかけて、我が心のすぐなるを標しにて、人の問へるか、洒落れたるなり。三輪の檜原を我が身に換へたるは、其の古歌の三輪により、三輪には檜原を常に歌にもよむよりの細工なり。いか

にもむづかしき歌なれど、己れは斯く見て、斯く説明したり。かく見る時は、其の意匠、當意即妙の洒落れは、また一時の興なきにもあらず。作者實方は詩才を以て詠はれし人。かく此の意を見る時は、さすがに才子が當坐の才吟、妙といふべき歌ならんか。

○題しらず

小 辨

我が戀ひは言はぬばかりぞ難波なる蘆のしのやの下にこそたけ

○言はぬばかりぞ。口に出してそれと言はぬだけである、心には深く思うて居るのであるとなり。○難波なる芦のしのやの。蘆屋の焼火の如くの意に見るべし。萬葉集「難波人蘆火たくやのすしたれど、ふのが妻こそとこめづらしき」などの舊きより、難波の海士の蘆家の焼火は、常に歌に多くよめば「蘆のしのやの」のみにて、焼火をもさかせるなり。○下にこそたけ。心には思ひ焦れて居るを、蘆火の縁にて言へるなり。○我が戀ひは、口に出して言はぬだけである。それ故に、人には見えまいが、蘆屋の焼火の如く、心の下には思ひ燃えて居るぞとなり。

○題しらず

伊 勢

我が戀ひはありその海の風をいたみ頻りに寄する波の間もなし

○ありその海。越中の有磯海なり。近寄り難き戀ひをたとへたるなるべし。○風をいたみ。北海

ゆゑ風のはげしきさまにて、人の伴れなきとたとへたるなり。○頻りに寄する波。打ち寄せしける波のさまにて、戀ひ戀ふる意をたとへたるなり。○波の間もなし。波の絶え間なきさまにて、絶えず戀ひしたふ意をたとへたり。

○一首の意は、有磯の海の、風烈しく吹く故に、うちよする波の絶え間もなし。我が戀ひも丁度それなりといふにて、めづらしくはあらねど、おだやかなるところを味ふべきか。

○人に遣はしける

藤原清正

須磨の浦に蛭のこりつむ藻鹽木のからくも下にもえわたるかな

○藻鹽木。藻鹽を焼きて鹽を製するに用ふる薪なり。藻鹽木の如くの意に見るべし。○からくも。苦しきもを、鹽の縁にて言へり。○下にもえわたる。心の下に焦れつゞくる意を、藻鹽木の縁にて言へり。

○一首の意は、藻鹽をたく木のやうに心の下に、苦しきも思ひ焦れつゞけて居るワイといふ事にて、心に戀ひつゞくる苦しさを訴へたるなり。

○題しらず

源景明

あるかひもなきさに寄する白波の間なく物思ふわが身なりけり

○なきさ。あるかひも無さに、海岸のなきさをかけたれば、あるかひもなく、なきさに寄する

といふやうに見るべし。あるかひもなく」とは、生きて居るかひもなき意なり。「なきさに寄する白波の間なく」は間なき事の比喻なり。間なくは絶え間なきなり。

○一首の意は、生きて居るかひもなく、我が身は、宛も海岸に寄する波の如く、絶えず戀ひなげく身なるよといふ事にて、生きて居るかひもなく、唯だ戀ひなげくのみの身を嘆息をしたるなり。

○全じく

貫之

足びきの山下たぎつ岩浪の心くだけて人ぞこひしき

○山下たぎつ。山の麓をたぎり流るゝ意なり。○岩浪の。岩にうちよせてくだくる浪の如くの意なり。心くだけてを形容したる比喻なり。○心くだけて。とさまかくさま思ひ亂るゝさまなり。

○一首の意は、山の麓をたぎり流るゝ水が、岩にあたりてくだくる其の浪の如く、とさまかくさま亂れて戀ひこがるゝとなり。

○おなじく

おなじく

足曳の山下茂き夏草の深くも君を思ふころかな

○山下茂き。山の麓に茂る意なり。○夏草の。夏草の如くの意にて、深くを形容したる比喻なり。○一首の意は、山の麓に茂る夏草の如く、この頃は深くも君を思ひこがるゝ事なり。

○題しらず

坂上是則

男鹿ふす夏野の草の道をなみしげき戀ひ路にまどふ頃かな

○男鹿ふす夏野の草の。道をなみを言ひ出ださん序歌にて、歌意に關係なし。○道をなみ。道なき故にの意にて、我が戀ひのかなふ道なき故にといふ事なり。○しげき戀ひ路。ひまなく戀ふ心を、野と草の縁にて言へるなり。○まどふ。思ひ亂るゝ意を、道の縁にて言へり。
○一首の意は、我が戀ひのかなふ道もなき故に、此の頃は唯だ心の中にひまもなく戀ひ亂るゝフイといふ事なり。草ふかき夏野の道なきにまどふといふ文は、穩當なれども、男鹿ふすとの序の詞は、少しく歌の品を下げたる嫌ひありといふべし。

○題しらす

曾彌好忠

蚊やり火のさ夜更けがたの下こがれくるしや我が身人知れずのみ

○上の句は、人知れず唯心にのみこがれて居るといふ下の句の意を形容したる比喩なり。○苦しや。苦痛であるよの嘆息なり。○人知れずのみ。人に知られず唯だ心の奥に焦るゝのみにての意に見るべし。
○一首の意は、蚊やり火の夜ふけたる頃の下こがれの如く、全く人には知られずして、我れは思ひ焦るゝのみの苦しさととなり。深夜の蚊遣火を殊更に取りいてたるは、全く人に知られざる意にそへたる意匠なれど、織巧をまぬかれじ。

○題しらす

おなじ人

由良の門を渡る舟人かぢを絶え行方も知らぬ戀ひの道かな

○上の句は比喩なり。由良の門を漕ぎ行く舟人が楫を失ひたる如くの意に見るべし。荒き海を渡るに、楫を失はば、たよりなき限りなり。行方も知らぬの比喩に用ひたるなり。○行方も知らぬ。いかにしてよきやら心の定めやうなき意なり。
○一首の意は、波荒き由良の門をわたる舟人か、楫を失ひたるやうに、いかにしてよきやら、更にたよりなき戀ひであるよといふ事にて、たよるすべなき戀ひに失望したる嘆息なり。上の句の比喩も、いかにも穩當にして面白く、意匠もめてたく、また、調もめてたき歌といふべし。

○鳥羽院の御時、上のをの子ども、寄風戀といふ心をよみ

侍りけるに、

権中納言師時

追ひ風に八重の汐路をゆく舟のほのかにだにもあひ見てしがな

○うへのをの子ども。殿上人を言ふなり。○追ひ風。順風なり。上の三句はほのかにの序なり。舟の帆(ほ)にほのかのほの全音を言ひかけたるなり。
○一首の意は、うちとけてはあひ難くとも、ホンの僅でもあひたきものよとなり。上の句はほのかの序にて、歌意には關係なれど、一首の意匠の仕立ての上には、やんさかせたるものあり。順風に

行く舟なれば、見とむるは極めて僅かなる間なるべし。故に、ほのかにの意味を、極めてほのかにとさかするものあるなり。其の序の細工の巧みなるを見るべきのみ。

○百首歌奉りしに

攝政太政大臣

かぢを絶え由良の港に寄る舟のたよりもしらぬ沖つ沙風

○上の三句は、由良の港に寄る舟の梶を絶えての意に見るべし。寄る舟は、漕ぎ寄らんとする舟の意なり。此の三句は、前の好忠の「ゆらの門を渡る舟人」の歌を、本歌としてよまれたるものなり。○たよりも知らぬ。たよりもわからぬ我が戀ひよの意に見るべし。どうしてよいやら頼むすべなき意なり。○沖つ沙風。沖の沙風に吹き隔てられて迷ふ如くといふ意に見るべし。○一首の意は、由良の港に漕ぎ寄らんとする舟が、梶を失ひて、しかも沖の沙風に吹き隔てられて迷ふ如くに、さても、たよるすべなきわが戀ひなるよとなり。複雑なる意匠を、巧みに言ひまはし得て、調のめでたきところ、體に此の時代の妙手を示したりといふべし。

○題しらず

式子内親王

知るべせよ跡なき波に漕ぐ舟の行く方も知らぬ八重の沙風

○知るべせよ。我が戀ひの案内をせよと頼むなり。案内して其の人に報らせてくれよと頼む意なり。○跡なき波に。しるしとすべき物もなき波上の意にて、おぼつかなき波上のけしきなり。○

漕ぐ舟の。漕ぐ舟の如くの意なり。○行く方も知らぬ。行く方も知らぬわが戀のしるべせよと、ついでに見るべし。○八重の沙風。八重の沙風にの意に見るべし。八重の沙風に吹かれて漕ぎゆく舟とつづくなり。八重は渺々たる海上をきかせたる詞なり。

○一首の意は、沙風すさぶ渺々たる海上、しるしとすべき物もなき波間を、漕ぎ行く舟の如く、賊にどうしてよいやら便りなき我が戀なれば、あはれしるべして、我が心を其の人にしらせてくれよとなり。古今集の「白波の跡なき方に行く舟も風を便りのしるべなりける」を本歌としてよめるなり。本居翁は、この歌は戀ひとさこゆべき詞なしと難せられたれど、其處が此の時代の歌の心がけたるところなり。其の詞なくして、其の意を巧みに言ふが、此の時代の歌の意匠のあもしろさところなり。

○題しらず

權中納言長方

紀の國や由良の港に拾ふてふたまさかにだにあひ見てしがな

○紀の國や云々。上の三句は、たまさかにを言ひ出す序に用ひたるなり。萬葉七の卷に「妹が爲め玉を拾ふときの國の由良のみささに此の日くらしつ」などいふ歌もありて、由良の湊の名物に玉のありたるものなるべし。それ等を本として。玉をたまさかと言ひたけて、序とせるにて、歌意に關係なし。

○一首の意は、常にあひ難くとも、たまさかにても、せめてあひたきものよとなり。

○法性寺入道前關白太政大臣家の歌合に

權中納言師俊

つれもなき人の心のうきにはふ蘆の下ねのねにこそはなけ

○うきにはふ、うきは愛きにて、つらき意なり。其のうきを、假りに沼の如く見たてて、さて、蘆は沼などに根さす物なれば、蘆を取り來たりて、うきにはふ蘆の下根と言ひつゞけたるなり。○はふ芦の下ね」は、「ねにこそはなけ」の序にして、一首の意味に關係なし。根と音との全音にかけて、序とせるなり。

○一首の意は、同情なき人の心のつらき故に、聲をあげて泣いて居るとなり。はふ芦の下根の細工、いかにも、詞のたくみにのみ流れて、此の時代の歌の短所を見せたる歌とのみいふべし。

○和歌所歌合に忍戀をよめる 攝政太政大臣

難波人いかなるえにか朽ちはてむあふ事なみに身をつくしつゝ

○難波人。自身の事を、此の一首の結構上より、難波の人はと言ひたるのみ。○いかなるえにか。いかなる縁にてかの意を、難波江の縁にて、えといへるなり。縁(えに)をえとのみ言うて、江にかくる事は、常に在り。後撰集戀歌「水鳥のはかなき跡に年をへて通ふばかりのえにこそありけれ、」古今六帖「君が名も我が名もをしの一つがひ、同じえにこそ住まほしけれ」なども、其の一つなり。

いかなる悪縁にてかの意に見るべし。○朽ちはてむ。死ぬ事を言へり。○あふ事なみに。あふ事なき戀ひ故にの意なり。○みをつくしつゝ。身力を用ひつくす事なり。それに落標(みをつくし)の音をひとかせたり。

○一首の意は。自分はいかなる悪縁にて、斯くあふ事かたき戀ひ故に、我が身力をつかひ盡くして、死ぬる事ならむかと嘆息せるなり。本居翁は、難波人といへる詞を難ぜられたれど、此の歌はえといひ、なみといひ、みをつくしといひ、朽ちはつるといひ、すべて入江の縁にて組み立てたれば、自分の事を難波人といへるにて、其の縁語のみを以て巧みにしたてたるところが、此の歌の見どころなりや。谷むべきにあらず。

○隱名戀といへる心を 俊成

蟹の刈るみるめをなみにまがへつゝなぐさの濱をたづねわびつる

○蟹の刈る。みるめの序に用ひて、歌意に關係なし。海松のみるめと、あひ見る意のみるめと、全音なるより、かけて序とせるなり、○みるめをなみにまがへつゝ。あひ見るすべを全く失ひての意なり。濱の縁にて、波にまかへつゝと文なしたり。○なぐさの濱。其の名をといふ意に、一首の意匠上より、なぐさの濱の名所を用ひたるなり。

○一首の意は、一度相見し人の、名も何にも知らせざりし故に、またあひ見むすべを、全く失ひ

て、名を何にと尋ねんやうだになきに、戀ひ佗ひるよといふ事なり。下の句のなぐさの瀬の工みは面白けれど、上の句の意匠は、少しくよぶけてきこゆるを、惜しむべし。

○題しらず

相 摸

あふまでのみるめかるべきかたぞなきまた波なれぬ磯のあま

○あふまでの。親しく其の人に交るに至るまでの手始めとしてといふ意に見るべし。○みるめかるべきかたぞなき。一寸の對面の得やうもないといふ如き意なり。それを、蟹の縁より、海松刈る方ぞなきといふ詞にかけたり。○また波なれぬ。まだ戀路に馴れぬといふを、やはり、蟹の縁にて、波といへり。○磯の蟹人。自分をたとへたるなり。

○一首の意は、自分は未だ戀路に馴れぬ者なれば、親しく相交はる事はもとより、其の順序としての一寸の對面をも得かぬとの意なり。みるめかるべき方なしとの意匠は、舊くあれど、あふまでといへる意匠は、拙にこれを新しくしたりといふべし。また、磯の蟹人といひ、波なれぬといへるあたりの意匠は、優美に巧みに作り得たる歌といふべし。

○題しらず

業 平

みるめかるかたや何處ぞさをさして我れに教へよ蟹のつり舟

○みるめかるかたや。海松を刈る處は何處がよいかと、尋ねるさまにて、何處にいかにせば其の人にあふを得るかと言ふ意を、たとへたるなり。○棹さして。それと指し示してといふを、たとへたるなり。○蟹のつり舟。我が依頼する其の人をたとへたるなり。

○一首の意は、何處にいかにせば、あの人にあふを得るか、我れに教へてくれよと、頼めるにて、それを、蟹のつり舟、棹さしつ、海松かる處を教へよと、比喩を以て言へるなり。穩當なる比喩見るべし。

戀歌二

○五十首歌奉りしに寄雲戀

俊成女

下もえに思ひ消えなん煙りだに跡なき雲のはてぞ悲しき

○下もえに思ひ消えなん。獨り心に思ひ焦れて、遂に戀ひ死にもせん意を、煙りの縁にて言へり。
○煙りだに。火葬の煙りにて、其の亡き後の煙りだにの意なり。此の次に「其の人の死後の煙りと
は知らずして」といふ如き意を入れて見るべし。○あとなき雲。其の煙りと見らるる跡もなき雲、
即ち、なべて一つの雲になるを言へるなり。

○一首の意は、斯く獨り心に思ひ焦れて、自分は終に戀ひ死にして、煙りと成るのみならず、其の
煙りだに、わが死後の煙りと、其の人にもながめ知られんやうもなく、なべて一つの雲となつてし
まふ身の行末の悲しさよとなり。死後の煙りも人に知られずにとの嘆息、いかに哀れに、女子の
情思ひやらるるものあり。煙を本としての一首の結構も、よく優美に、よくすなほにして、巧みな
るを得たりといふべし。

○攝政太政大臣家百首歌合に

定家

なびかじな蟹のも塩火たき初めて煙りは空にくゆりわぶとも

○なびかじな。なびかずと思はるるといふ事にて、俗にいふ「なびくまいぞナア」の如き意

なり。自分がなびかじと言ふにあらず、先方の人が靡くまじと推量したる詞なり。なびくは同心する
意。なは感動詞なり。○蟹のも塩火たき初めて。心の下に焦れ初めたるをたとへて言へるなり。

○煙りは空にくゆりわぶ。堪へぬ思ひの表にあらはれて、なげき悶ゆる意を、煙りの縁にて言へ
り

○一首の意は、心の下に深く戀ひ初めて、堪へぬ思ひは表にあらはれて、なげき悶ゆるが、此の
けしきを見るとも、あの人は、とても同心すまいナアといふことにて、初戀ひのをさなき心よ
り、とてもあひ難からむと思ひやる意なり。石原主は、さばかりあふよしなき人を、戀ひ初めたる歌
と心得べし」と説かれたれど、特別にあひがたき人を戀ひ初めたる故に、「なびかじな」と推量せる
にはあらず。初戀ひのまだうひくしき心より、斯くあひがたからむとのみ思ひやるあどなき心と
見る方、一段と面白し。六百番歌合に初戀の題の歌なれば、しか見ても、決して無理にはあらずと
思ふ。しか見れば、試に面白き初戀ひのあどなく切なる情を歌ひ得たりとおぼえて、いと面白し。

○百首歌奉りし時戀歌

攝政太政大臣

戀ひをのみすまの浦人もしほたればしあへぬ袖のはてをしらば

や

○すまの浦人。戀ひをのみするに、須磨をかけたる懸詞なり。戀ひをのみする須磨の浦人」と見
るべし。須磨の浦人は、一首の結構上、自身の上を文なしたる技術なり。○もしほたれ。思ひに

沈むをしほたるといふ。それを、も沙の半に濡れをばつによせて、文なしたる技術なり。此の技術は常に用ひらる。行平が「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦にもしほたれつゝ侘ふと答へよ」なども、其の一つなり。○ほしあへぬ袖。ほしきれぬ袖にて、涙のほしきれぬ程、袖にこぼるゝさまなり。○はてを知らばや。終りを知りたきものよなり。此のほしきれぬ袖の、終ひに乾くか乾かぬを知りたいと言ふ事にて、終ひには逢はれるか、逢はれずに終はるかを知りたいとの意をかへて發表せしなり。

○一首の意は、斯く戀うてばかり居る自分は、思ひに沈みて、涙は常に袖をしとどに濡らして、ほしきれずに居るが、さて、終に斯くあはれずして泣くべきか、或は、相逢ふを得て、涙の乾く時もあるべきか、それが早く知りたいとなり。本居翁は「しらはやと言へる、似つかはしからず。袖のはてを知らばやと願ふは、何んの意ぞや」と難せられたれど、涙の袖の乾く乾かぬに、逢はるか逢はれぬかの意をきかせたるをさとり得ざる難にして、いとをかし。何んの意ぞやなど難すべしにあらず、反つて、誠にめづらかに面白く見るべき技術の、其處にあるにこそ。

○戀の歌にてよめる

二條院讃岐

みるめこそ入りぬる磯の草ならめ袖さへ波の下に朽ちぬる

○みるめこそ云々。萬葉集に「沙みてば入りぬる磯の草なれや見らくすくなく戀ふらくの多き」といふ歌あり。沙の満つる時は、水中に入る磯の草の如く、見る時少く戀ふ事の多しといふ意の歌なり。

り。それを本歌として、此の上の二句は、あひ見る事の少き意を言へるなり。上の三句は、いかにあひ見る事少ければとの意に見るべし。○袖さへ。袖までがなり。○波の下に朽ちぬる。涙に袖の朽ちたるよといふ意を、入りぬる磯の縁にて、波の下に朽ちたるよと文なしたり。

○一首の意は、見る事のいかに少ければとて、マァ、袖までが涙に濡れて朽ちたるよとなり。あふ事稀れなる戀ひになげく意なり。本歌を用ひての技術の巧みなるを見るべき歌といはんか。

○年経たる戀ひといへる心を讀み侍りける。

俊頼朝臣

君戀ふとなるみの浦の濱ひさぎしをれてのみも年を経るかな

○君戀ふとなるみの浦。君を戀ふとなる身といふに、鳴海の浦を言ひかけたる懸詞なり。君を戀ふと成る身の鳴海の浦」といふやうにして見るべし。君を戀ふと成る身」は、「君を戀ふとて生まれる身といふ如き意なり。鳴海の浦の濱ひさぎ」は、自身をたとへたるなり。

○一首の意は。君を戀ふとて生まれたる此の鳴海の浦の濱は、なげき沈みてばかり、年を経るツイといふ事なり。鳴海の浦の濱に、なげきしをれて年を経る自身をたとへたるは、舊く濱を八しくあはざる思ひなどのたとへに取り來たるよりなり。萬葉十一の卷「浪間より見ゆる小島の濱楸久しくなりぬ君にあはずして」伊勢物語にも拾遺集にも載りたり。しをれて朽ちてなどにかけて言ふ事は、なほ此の時代には、六百番歌合經家「涙にはうきみやま木も朽ちぬべし沖の小島の楸なら

ねど、「壬生集」いほ山越えてこぬみの濱楸久しくなりぬ浪にしをれて」なども見ゆ。さる心より、斯く今の自身の事を濱楸にたとへていへるなり。而して、鴨海濱の濱楸になしたるは、全く成る身の懸詞の技よりなり。上の句の意匠、面白く見えたる歌なりや。

○忍ぶ戀ひの心を

前太政大臣

知るらめや木の葉ふりしく谷水のいはまにもらす下の心を

○知るらめや。知るべきが知るまじの意、やは反語なり。○木の葉ふりしく谷水の。いはまにもらすの序にて、歌意に關係なし。谷水が岩間を走るといふ詞を、言はずにむせぶにかけて、序とせるなり。木の葉ふりしくは、落葉に埋れたるさまなり、○いはまにもらす。言はずにむせぶ意なり。谷水の岩をもるといふけしきによせて、むせぶをもちと言へり。○下の心を。心の奥に戀ふ此の思ひをなり。
○一首の意は、言はずして唯心に戀ひむせび居る此の心を、人の知るべきにあらずとなり。言はざる故に、知らざるは當然なれど、されど、つらしやとの餘情をこめて、見るべし。此の餘情のありて、はじめて、此の歌の情は存するなり。

○左大將に侍りける時、家に百首の歌合し侍りけるに、忍

ぶ戀ひの心を、

攝政太政大臣

もらすなよ雲居る峰の初時雨木の葉は下に色かはるとも

○もらすなよ。戀ひしき心を決して人にもらす勿れと、自から制するなり。○雲居る峰の初時雨。比喻なり。雲のかかり居る峰の初時雨の如くの意に見るべし。○木の葉は下にかはる。思ひ焦る心のいかに深くなるとの意なり。それを、時雨の縁にて言へり。
○一首の意は、雲のかかり居る峰の初時雨が、其の時雨に染むる紅葉をかくすが如く、我が此の初戀ひの、いかに深くなりゆくとも、決して人にもらす勿れといふ事にて、とても終ひには忍び難きは、戀ひのならひなるより、自から斯く制する意なり。本居翁も石原主も、此の忍ぶ戀ひは、一度あひての後に、今より後思ひは深くなりぬとも、決して他人にもらすなと、其の迷ひたる人に言ひふくめたるやうに説かれたり。その意にもきこゆるところあれど、しか見る時は、なほ淺はかり。自から制するならば、もらすなよと言はずして、もらすなよといふべきなりと論ぜられたれど、それも窮屈なる見解なり。自から制するにも、などかく言ふを得ざらんや。初時雨にはじめてあひたる意ありと、本居翁は言はれたれど、然らず。初時雨にはじめて戀ふ意をきかせたるなり。戀ひ初めたるわが情の、いかに深く苦しくなるとも、決してもらすなと、自から制する意に見る方、穩當にして、しかも一層面白きにあらずや。おのれは、二氏の説を退けて、前陳の如く解かんとするものなり。

○戀ひの歌あまたよみ侍りけるに

後徳大寺左大臣

かくとだに思ふ心をいはずやま下ゆく水の草がくれつ、

○かくとだに。斯く／＼心に深く思ひ焦れて居ると云ふだけの意なり、○いはせ山。言はずに岩瀬山をかけたる懸詞なり。言はずは言ひ得ずの意なり。岩瀬山は大和の名所なり。○下ゆく水の云々。岩瀬山の下ゆく水のかくれつ、我れは戀ふ」といふやうに見るべし。人知れず焦れなげく意をたとへたるなり。

○一首の意は、思ひ焦るる心を、かく／＼とだけも言ひ得ずして、岩瀬山の下ゆく水の草にかれつゝむせび流るゝやうに、自分は獨り心の中に戀ひ泣きて居るとなり。下の句には人に知られざる戀ひのみにあらず、戀ひ泣く涙をもこめたる如く。岩瀬山の下ゆく水を取り出だしたるは、後撰集「岩瀬山谷の下水打忍び人のみぬまは流れてぞふる」などもあるより、思ふ心をいはずにかくるにもよきよりのわざなるべし。石原圭は下の句を「かくとだに」の序と言はれたり。かくと言ふ意は、自からこもるものなれど、こは序と見ずして、下の句の末に我れは戀うて居るといふやうの詞を添へて見る方、すなほなりとまぼゆ。

○題しらず

股富門院大輔

もらさばや思ふ心をさてのみはえぞやましろの井での柵

○もらさばや。思ふ心を人につげんと思ふ意なり。○さてのみは。心に獨り思ひ焦れてばかりはの意なり。○まごやましろの。まごやまんのやまに、山城をかけたる懸詞なり。まごやまんとは、かく言はずのみは止むを得ぬ意なり。山城の井での柵。もらさすにはやみがたき意を、もらさすには止みがたきむでの柵ぞと、洒落れたるなり。むでの柵は水をせく柵にて、自から水のもるゝものなれば、かく洒落れていへるなり。

○一首の意は、思ふ心を、人にもらさばや。かくもらさすにのみやみがたき、今は、井せきの柵であるよといふ事にて、最早言はずには居られぬ切情の意なり。下の句の詞、一種の詩趣あるを味ふべし。

○忍ぶ戀ひの心を

近衛院御歌

戀ひしとも言はば心の行くべきに苦しや人めつゝむ思ひは

○心のゆくべきに。心の行くとは、心の憂鬱の晴るる意或は、慰めらるる意なり。○苦しや。苦しむよにて、最後におきて見るべし。○人めつゝむ思ひは。我が思ひを人に見られぬやう隠して居るなり。戀ひしとも言はぬ意は、もとよりなり。

○一首の意は、戀ひしく思うて居るとも、其の人につげなば、せめて少しは心の慰めらるるべきなるに、それも言はずして、かく心一つにつゝむは、いかにも苦しむといふなり。下の句の苦しやの轉聲、道勁なる發表を得て、自から其の情の強きまこゆるを見るべし。上の句の心も、其の情可憐なりといふべし。

○見れどあはぬ戀ひといふ心を讀みて侍りける。

花園左大臣

人知れぬ戀ひに我が身はしづめどもみるめにうくは涙なりけり

○花園左大臣。源有仁の事にて、輔仁親王の子、白河の皇孫なり。○みる目にうく。「其の人を見る度に、目に浮ぶ物は」の意なり。

○一首の意は、親しく契りを結びたしと、獨り心に焦るる思ひに、我が身は洗んで居れど、君を見る度に、涙は目にうかびてこぼるといふ事にて、其の人を見る度、あはれぬをなげきて泣き居るさまなり。それを、洗むと浮くとの對稱によりて、かく工みたるなり。織巧にして、「みるめに浮く涙」のあたりは、少しく滑稽にもきこゆるは、單に細工歌の失敗を示したりといふべし。

○題しらす

神祇伯顯仲

物思ふと言はぬばかりは忍ぶともいかがはすべき袖の筆を

○物思ふと戀ひなげきて居るとなり。○忍ぶとも。戀ひしさを隠して居るともなり。○いかがはすべき。つゝみがたき涙には、戀ひしさを隠しやうなしと言へるなり。○袖の筆。涙なり。

○一首の意は、戀ひなげきて居ると言ふ事を、言はぬだけは、戀ひしさを隠して居るとも、つゝみきれぬ涙は、戀ひしさを隠しかねるとなり。抄に忍ぶを堪へる意に説かれたれど、さにはあらじと云

ほゆ。

○忍ぶ戀ひの心を

清 輔

人知れず苦しきものはしのお山下はふ葛のうらみなりけり

○しのお山下はふ葛の。忍ぶといふ意を、一首の上にもたせて、且つ、うらみといひ出だす序に用ひたるなり。葛の葉をうらみにかけて言ふ事は、前にも屢説きたり。忍ぶ恨みなりけりと見るべし。忍ぶ恨みとは、忍ぶ戀ひの恨みにて、我が心にも思ひ居りて、それと人に知られぬを恨むを云ふ。

○一首の意は、我が心にも思ひ居て、それと人に知られぬ戀ひの恨みは、誠に苦しきものなるよとなり。

○和歌所歌合に忍ぶ戀ひの心を

雅 經

消えねたゞ忍ぶの山の峯の雲かゝる心のあともなきまで

○消えねたゞ。いつその事に思ひ死してしまへとなり。雲の縁にて死ねを消えねと入り。かゝる時のたゞは、餘事は全く棄て去る意にて、俗にいふいつその事にあたるなり。○忍ぶの山の峯の雲。獨り心に思ひ亂るゝ戀ひの身をたとへたる暗喩なり。○かゝる心。斯くの如き思ひにて、雲に縁をもたせたる詞づかひなり。○あともなきまで。「あとかたの全く無き程迄」にて、亡き後

に執着の念も残らぬまでにと、本居翁の言へる如し。あとなきも、雲の縁にていへり。
 ○一首の意は、 獨り心に思ひ亂るゝ戀ひの我が身よ、いつその事に、斯くの如き思ひの、全くあ
 とかたも残らぬ程までに、思ひ死にしてしまへよといふ事にて、獨り心に焦るゝ戀ひの苦しきより、
 いつぞ潔く死んでしまへと、我が身を思ひすてたる意なり。其の情も強く、其の言ひまはしも強く、
 而して忍ぶの山の暗喩も、すべての縁語も、皆すなほに優美にして、誠に遒勁に且つ優美によまれ
 たる歌といふべし。此の時代の長所を示し得て、めでたくもめでたし。

○千五百番歌合に

通

光

限りあれば忍ぶの山の麓にも落葉が上の露ぞ色づく

○限りあれば。すべて物事には際限のあるものなればの意にて、忍ぶ力にも全しく限りのあるよ
 しを言へるなり。○忍ぶの山の麓にも。年月忍びて戀ひ來たれる今の我が身を、たとへたる暗喩
 なり。○落葉が上の。袖の上をたとへたる暗喩なり。單に木の葉といはずして、落葉といへるは、
 久しく戀ひ來たりてのはての意をさかせん爲めなり。○露ぞ色づく。泪の紅涙になりたる暗喩な
 り。
 ○一首の意は、 物には際限のあれば、我が忍ぶ力も限りありて、今は袖にこぼるる泪が、紅涙に
 なりたりといふ事にて、落葉が上と言ひたる暗喩は、此の時代の意匠の深さを見せて、おもしろし
 といふべし。

○

二條院讃岐

うちはへてくるしきものは人めのみ忍ぶの浦の蛭のたくなは

○うちはへて。うちついでての意。うちはへ、くる、皆下の句の細に縁をもたせたる詞づかひな
 り。○忍ぶの浦。忍ぶ心の暗喩なり。○蛭のたくな。戀ひ戀ふ情の暗喩なり。たくな細とは栲細な
 り。
 ○一首の意は、 人めを忍ぶ心に唯だ獨り戀ひしたふ情のうちついでくは、誠に苦しい事なるよとな
 り。

○和歌所歌合に、依忍増戀といふことを、

春宮大夫公繼

忍ばじよいはまづたひの谷川も瀬をせくにこそ水まさりけれ

○忍ばじよ。今は心につくまず、うちあけてつげまく思ふとの意なり。○いはまづたひの谷川。
 岩の間をつたひて流るる谷川にて、下に、言はずに戀ひゆく意をさかせたり。○瀬をせくにこ
 そ。流れを堰く故にこそにて、言はずに心につくみ居る意をさかせたり。○水まさりけれ。水
 かさの増さるワイにて、思ひの増さる意をさかせたり。二の句より下は、すべて比喩なり。此の次
 に、其の如くといふ詞をさきて、さて、上の忍ばじよにつけて見るべし。

○一首の意は、岩間をつたひて流るる谷川も、其の流れを堰く故にこそ、其の堰きたるところに、水かさの増さるのである。其の如くに、言はずに心につゝみ居る故に、我が思ひのまさるのであれば、今は此の戀ひしさを、心につゝまず、うちあけんと思ふとなり。忍ばじよと冒頭にうちつけて、さて次に、比喻を引ききたる、言ひまはしの面白しといふべし。其の比喻も、よく其の下の意をさかせて、穩當に適切なるを得たるは、見るべき歌といふべし。

○題しらず

信濃

人もまだふみぬ山の岩がくれ流るる水を袖にせくかな

○信濃。後鳥羽院に仕へたる女房にて、後鳥羽院下野ともよぶ。○人もまだふみぬ山の岩がくれ。全く人に知られざる思ひに、獨り思ひ焦るる心を、人の到れる事なき山の岩かけに比喻へたるなり。○ながるゝ水。岩かけを流るる水とつゞけて見るべし。水は涙をたとへたるなり。○袖にせくかな。袖にかくして居る意なり。水の縁にてせくといへり。

○一首の意は、深く心につゝむ戀ひにて、全く人に知られざる涙にくれ居るをいへるなり。抄には「踏み見ぬを、文見ぬにそへたるなり。人もつれなくて、我がやる文も見ぬに、只人知れぬ袖のみ滯るる心なり」と説かれたれど、人もまだふみぬの詞には、おのれはさる程の意なしと思ふ。また、石原主は、「一二の句、いかによめるにか、ふと心えかねたり。もし人にまだ逢ひ初めぬ事を、山の縁にふみ見ぬとよめるにあらじか」と言はれたるが、それもまた淺し。こは前に説ける如く、全く

人に知られざる戀ひに獨り泣くを、足跡到らざる深山の岩かけの流れにたとへたと見れば、其の意明かなるにあらずや。而して、其の意匠も深く巧みなるを見らるるにあらずや。

○題しらず

西行法師

遙かなる岩のはさまに獨り居て人め思はて物思はばや

○遙かなる。人里を遠く／＼離れたる意なり。○岩のはさま。岩の間になり。はさまはすべて物の間を言ふ。山のはさま、門のはさま、垣のはさま、屏風のはさま、みすのはさまなど、すべて物のあはひ、物の間に用ひたる例多し。○獨り居て。獨り岩の間に住みて居つての意なり。岩窟に住むを言へるなり。○人の思はて。人に見らるるを心配せずになり。○もの思はばや。獨り思ひなげかんと思ふとなり。

○一首の意は、人里を遠く／＼離れたる深山の岩窟に、獨り住みて、人に見らるる心配もなしに、獨り思ふ心のまゝに思ひなげかばやと思ふとなり。○人めの心配なしに思ふまゝに思ひなげかむ、それがせめての慰さぞと、深く人目をつゝむ戀ひに思ひあまりての嘆なり。深山の岩窟住居をも辭せず、せめて思ふ存分に思ひなげきたしとは、切なる激情、誠に人を動かすものありといふべし。深山の岩窟の獨棲の意匠も、思ひきつたる詞、さすがに此の法師の非凡なる詩才を示し得たりといふべし。此の集の戀の巻、讀み來つて、はじめて此處に熱狂せる情をさくを得たりといはんか、めでたくもめでたし。

○おなじく

おなじく

數ならぬ心のとがになしはてて知らせてこそは身をも恨みめ

○數ならぬ心。數ならぬ身の分外の心といふ意に見るべし。石原主は「數ならぬ心とつゝきたるはふと解き得がたけれど」と言はれたれど、何んの解きがたき事あらむ。短き詞に複雑なる意を、斯く巧みに言ひまはして、其の意をさかすところ、實に此の時代の歌の苦心したるところなり。○知らせてこそは。我が情を人に知らせてこそなり。『それでもかなはぬ戀ひならば』といふ如き詞を入れて、見るべし。○身をも恨みめ。數ならぬ身故に戀ひのかなはぬと、我が身を恨みにも思はむとなり。

○一首の意は、我が戀ひを、其の人に知らせて、若しそれでも、かなはぬ時には、はじめて數ならぬ身の故なりと、我が身をも恨みやう。されど、心につゝみ隠して、其の人には知られぬ我が戀ひなれば、數ならぬ身の分外の戀ひの咎として、我が身をばかり恨むべきものとは思はずといふ事に、數ならぬ身ゆゑと、よく世間の人は我が身を恨みてあきらめんことを言へど、獨り心につゝみみの戀ひなれば、我が身を恨みてのみは、我れにあきらめ難しと、つゝむ戀ひの苦しきより、かゝる場合の人の言ひ草を難じて、我があきらめられぬ意を訴へたるなり。石原主は「我が身の數ならぬ故言ひ出ても逢はれもせじと思ひて、言はずにゐるが、さうばかり言うても儘くまじ。かう思ふといふ事を、人に知らせて、人のつれなくば、うらみてなりともこらへ見むとなり」と脱かれ

たれど、いとむづかしき見解にて、しかも面白からず。世間の人のかゝる場合の言ひ草を難じて、我がつゝむ戀ひのかなはぬ苦しさを、訴へたるにて、其處に狂せる情も見え、また、一かど新しき忍ぶ戀ひの歌を得たるところなるを、味ふべきにこそ。

○水無瀬の戀ひの十五首歌合に夏戀を

攝政太政大臣

草深き夏野わけゆくさを鹿のねをこそ立てね露ぞこぼるる

○さを鹿の。男鹿の如くの意なり。下の句を形容したる比喩なり。○ねをこそ立てね。なく聲は立てずなり。○露ぞこぼるる。泪はこぼるるを、野の縁にて言へり。○一首の意は、草深き夏野をわけゆく男鹿の如く、我れは戀ひしと聲をあげて泣かざれども、戀ひしの泪にはくれて居るといふ事にて、鹿は夏はなかなぬものなれば、斯く取り來たりて、忍びて戀ひ泣く意をあらはせるなり。

○入道前關白右大臣に侍りける時百首歌人々によませ侍りけるに、忍ぶ戀ひの心を、

太宰大貳重家

後の世をなげく涙と言ひなしてしほりやせまし墨染の袖

○後の世をなげく。後の世とは死後の世なり。死後の世をいかにも思ひなげくとなり。○言ひなして。言うてしまつての意。此のなしは、前の巻に詳しく注せり。○しほりやせまし。涙に袖をしほらんかナアなり。

○一首の意は、人を戀うての涙なれど、後世をいかにも思ひなげく涙なりと、言うてしまつて、墨染の袖をしほらうかナアといふ事にて、法師が忍ぶ戀ひしたる意の歌なり。法師の身より見れば、後世をなげく涙といはんの意匠は、面白しと言ふべし。

○大納言成道文遣はしけれど、伴れなかりける女を、後の世まで恨みのこるべきよし申しければ、

讀人知らず

玉章の通ふばかりに慰さめて後の世までの恨み残すな

○端書はながらの意は、成通ある女に手紙を遣りたれど、同心なかりければ、死後までも恨みに思ふと言ひたるを、さしてよめるとなり。此の讀人知らずは、其の女なるべし。○玉章の通ふばかり。手紙の互ひに通ふだけにてといふ意なり。手紙だけは取りやりせん心をこめたり。○一首の意は、同心はなし難れど、手紙は取りやりせん程に、その手紙の取りやりだけにて、心を慰さめて死後までの恨みなどを残し給ふよとなり。

○前大納言隆房中將に侍りける時、右近の馬場のひをりの日まかれりけるに、物見侍りける女車より、つかはしける。

ためしあればながめはそれと知りながらおぼつかなきは心なりけり

○端書はながらの意は、隆房の中將なりける時、右近の馬場にて、ひをりの日の式ありける日、それ果てて退出したるに、其の式を見物し居りたる女車の人より、此の歌をよこしたりとなり。○ためしあれば。よに例のある事なれば、即ち、さまりたる事なる意なり。戀ひする人のながめする事は、世にさまりたる事なればなりとの意を言へり。○ながめ。隆房のながめ居りたるを、さしたるなり。○それと知りながら。戀ひをして居らると知りながらなり。○おぼつかなきは。誰れを戀ひてか判然せぬはの意。○心なりけり。隆房の心をさして言へるなり。

○一首の意は、戀ひすれば、ながむる事は、世にさまりたる事なれば、あなたのながめらるるは、戀ひをしてとは知りながら、さて誰れをかと、おぼつかなく思ふとなり。

○返へし 隆房

いはぬより心や行きてしるべするながむる方を人の問ふまで

○いはぬより。またそれと言はざる程よりの意。○心や行きて。我が心が早く出向いて行きての意。○しるべする。我が戀ひの案内をすることなり。○ながむる方を。我がながむるは誰れ故との意。○人のとよまで。我が思ふ人の問ふまでに早くの意なり。

○一首の意は、まだそれと言はぬ程より、斯く戀ひながむるは誰れ故ぞと、戀ひしき人に問はる程までに、早く、此の我が心が、我が戀ひの案内をしたるかとなり。我がながむるは、君を戀ふなり、うれしくも知らるゝ事よと、よろこびて返へしたる心なり。

○千五番歌合に

通 光

ながめわびそれとはなしに物ぞ思ふ雲のはたての夕ぐれの空

○ながめわび。苦しく思ひくらししての意。○それとはなしに。ぼんやりとしたる意なり。○雲のはたての夕ぐれの空。夕ぐれの空はの意に見るべし。雲のはたてとは、雲のはてといふのも全じ。古今集戀歌「夕ぐれは雲のはたてに物ぞ思ふ天つそらなる人を戀ふとて、續後拾遺集秋歌爲家」とまらじな雲のはたてに戀ふとても天つ空なる秋の別れは「など皆全じ。雲涯渺たる夕ぐれのけしきを言へるなり。

○一首の意は、苦しく思ひくらしして、雲涯渺たる夕ぐれには、ぼんやりとして思ひなげくといふ事にて、情景あはれに思ひやらるゝものあり。

○雨のふる日、女に遣はしける、

俊 成

思ひあまりそなたの空をながむれば霞みをわけて春雨ぞふる

○思ひあまり。戀ひしさ懐かしさに堪へられぬさまなり。○そなたの空。君が住む方の空なり。この句の上に、せめてとの詞を添へて見るべし。せめてと戀ひしき人の住む方をながむるなり。○霞みをわけて云々。霞のかゝれる空に、春雨のそぼくとふるけしきなり。

○一首の意は、戀ひしさ懐かしさのあまりに、せめてと君住む方の空をながむれば、霞みのかゝりて、春雨がそぼくと降つて居るといふ事にて、いとほづかなさをそへて、しみくと思ひまさる風情なり。優美に哀れなる情景、しみくと詩の美感を感ぜしむるもの、此の集の戀歌讀み來りてこゝに得たり。

○水無瀬戀十五首歌合に

攝政太政大臣

山がつの麻のさ衣をさをあらみあはて月日やすぎふける庵

○山がつの云々。上の句は、人の問はぬ問の遠きを、衣のさを荒さに、よせて言へるなり。をとは、機に用ふる道具の箴の事なり。衣の箴があらいと、衣の織目のあらしきをいふなり。○上の句は、人の問ふ事の間遠なる故にの意に見るべし。○月日やすぎふける庵。月日を過ぎに杉をかけた。月日をすぎふける庵の意に見るべし。

○一首の意は、人の問ふ事の間遠なる故に、あひ見ずにはかり、月日をすぎす我が杉の庵よといふ事にて、山人の身になりての戀歌の心なるべし。詩想は平凡にて、何んの見るべきところはなけ

れども、人の間違なるを、をさをあらみによせ、それを、山がつの麻のさ衣の上に言ひ、さて、杉ふける庵と文なしたる詞の技術を見るべき歌ならんか。

○欲言出戀といへる心を 藤原忠定

思へども言はで月日はすぎの門、さすがにいかが忍びはつべき

○思へども。心には深く思ひ居れどもなり。○言はでうちあけては言はずにの意なり。○すぎの門。月日をば過ぎしに杉をかけて、杉の門と言ひ下し、さて、さすがにの縁とせり。杉の門はさすがにの序にて、歌意に關係なし。

○一首の意は、深く心に思へど、つゝみて言はずに、月日をば過ぎ來たりぬ。されど、かゝる堪へがたき思ひの、いかで忍びて終るを得べきにあらずといふ事にて、今はうちあけて言ひ出でんとも思ふとの餘情なり。句調輕さに失して、情の乏しくおぼゆるは、戀歌には失敗といふべし。

○百首歌奉りし時 俊成

あふ事はかた野の里のさゝの庵しのに露ちる夜半の床かな

○あふ事はかた野の云々。遇ふ事は難しのかたと片野のかたとを言ひかけたり。○あふ事は難くして片野の里の笹の庵」と見るべし。「片野の里の笹の庵」は「しのに露ちる」を言はん序なり。○しのに露ちる。茂く泪のこぼるゝを、笹の庵の縁にて言へり。

○一首の意は、遇ふ事の難くして、夜半の寐床、獨り涙にくるゝ嘆息なり。かた野の懸詞、笹の庵の道具立て、しのに露ちるの詞、優美にして哀れなる風韻のこもれる歌といふべし。

○入道前關白右大臣に侍りける時百首歌の中に、忍ぶ戀 全人

散らすなよ篠の葉草のかりにても露かゝるべき袖の上かは

○散らすなよ。涙をこぼすなよといふを、露の縁にて言へるなり。○篠の葉草の。かりにてもと言ひ出す爲めの序なり。かりそめのかりと、葉草を刈るの刈るの同音にかけたる序なり。篠の葉草は、さる一種の草なりともいへど、此の頃よりの歌には、單に篠と全じ物として用ひたるやうなり。新勅撰集「あきまよふしの、葉草の霜の上に夜を経て月のひえわたるかな、新六、信實「垣ねなるしののを草の冬枯れに霜おく風の弊しきるなり、辨内侍日記「くるゝ夜はしの、葉草の上葉まてくだけの露ももる時雨哉、新千載集「袖ぬらすしの、葉草のかり庵に露の宿とふ秋の夜の月」などあり。かりにてもは、假りそめにても、一寸にてもといふ如き意なり。○露かゝるべき。泪のかゝるべきを、草の縁にて言へり。此の句の上に「思ひなくして」といふ如き詞を、そへて見るべし。

○一首の意は、一寸でも、思ひなくして、泪のかゝるべき袖にはあらし。されば、袖に涙のかゝらば、直ちに戀ひをしてと、人に見らるる故に、我が涙よ、決して袖にこぼるるなよといふ事にて、

泣かずには居られぬ心を、泣くべからずと自身制したる意なり。

○題しらず

藤原元眞

白玉か露かと問はん人もがな物思ふ袖をさして答へむ

○此の歌は伊勢物語の「白玉か何にぞと人のとひし時露と答へて消なましものを」とある歌の段のはなしを思ひよせて作れる歌なり。○物思ふ袖を。物思ふ袖の涙をと見るべし。涙を下にかくしたる詞づかひなり。さして答へむ。袖の涙をさし示して、あれは君を思ふ涙であると答へむものなるをの意。

○一首の意は、あれは白玉か露かと人の問うて欲しい。其の時には、此の戀ひなげく袖の涙をさし示して、あれは君を思ふ我が涙であると答へて、我が心を知らすべきにといふ意にて、我が思ひの人に知られざるを嘆く心なり。其の物語のはなしによりたるところが、一寸器用なる思ひつさと言ふべきか。泪の詞をかくしたるところも、工夫したるところなるべし。

○女に遣はしける

藤原義孝

いつまでの命も知らぬ世の中につらきなげきのやまずもあるかな。

○いつまでの命も知らぬ世の中。無常の人生、今あるも明日はわからぬ我が命數を言へるなり。

○つらきなげき。 伴れなき人を戀ふなげきなり。

○一首の意は、無常の人生、今日ありて明日はわからぬ命をもつて、いつまでもやまぬつらきなげきを、我れはする事よと嘆息して、其の同情を求めたるなり。

○崇徳院に百首歌奉りける時 大炊御門右大臣

わが戀ひは千木のかたそぎかたくなのみゆきあはて年のつもりぬるかな

○千木のかたそぎ。 千木のかたそぎにての意に見るべし。千木は、上代の家作に、家根の左右の端に、搏と並べて、用ふる長き材にて、棟のところにてぶつちがはせ、其のさきは、長く棟より上に聳えしめたるものなり。今も神社などの家根に見ゆ。かたそぎとは、其の上端の一角をそぐより言ふなり。棟より上は、筋かひに別れて立てる故に、行きあはぬ意の比喻に、常に用ひらる。こゝもそれなり。○かたくなのみ。かたくなのみありての意。あふ事のむづかしくばかりありてより。かたそぎのかたくなのみと、重音の修辭を用ひたり。○ゆきあはて。 會合せずしての意なり。

○一首の意は、我が戀ひは、千木のかたそぎの如くにて、相あふ事のむづかしくのみありて、會合もせず年のつもりたるよといふ事にて、久しくあはざるを嘆じたる意なり。

○入道前關白家に百首歌よみ侍りける時あはぬ戀ひと

いふ心を

藤原基輔

いつとなくもしほやく蟹のとまびさし久しくなりぬあはぬ思ひは

○いつとなく。いつと言ふ事なく常にの意なり。○もしほやく蟹 思ひ焦るる身を、もしほやく蟹とたとへて、さて、とまびさしを言ひ出し來たりて、それを久しくの序とせり。とまびさしは序にて、一首の意に關係なし。宮屋の扉のひさしと久しくの同音にかけて、序とせるなり。○あはぬ思ひは。君にあはずしてなげく思ひはなり。

○一首の意は、常に思ひ焦れて、あはぬなげきに暮らす年月の、久しくなりたるよとなり。久しくあはざる嘆息なり。

○夕戀といふことをよみ侍りける。

藤原秀能

藻塩やく蟹の磯屋の夕煙り立つ名も苦し思ひ絶えなで

○上の三句は、立つを言ひ出たす序なり。序なれど、有心の序にて、夕煙りにて、題の夕べをきかせ、また藻鹽焼くの下には、思ひ焦るる一首の意のけしさを浮ばしめたり。○立つ名。戀ひして居るといふ評判なり。○思ひ絶えなで。一本には消えなでとあり。いづれにても、あきらめはてずして戀ひ思ふ故にの意なり。

○一首の意は、あきらめはてずして、戀ひ思ふ故に、いつしかあらはれて、戀ひして居るといふ評判せらるるに到れるが、それも苦しやといふ事にて、人に知られて評判せらるるに到るまで、かなはぬ戀ひに焦れたる苦痛を、訴へたるものなり。

○海邊戀といふ事をよめる。 定家

須磨の蟹の袖に吹き越す沙風のなるとはすれど手にもたまらず

○上の三句は、下の句の意を形容したる比喻なり。○なるとはすれど。馴るゝやうにはあれどなり。馴るとは親しむ意なり。○手にもたまらず。しつかりと相あふ事の名きを、沙風の縁にて、我が手にもたまらずと言へるなり。

○一首の意は、沙風が須磨の蟹の袖に馴れては吹けど、手にはアアたまらぬ如く、我が戀ひも、馴るゝやうにはあれど、しつかりと相遇うて、ちぎる事の出来ぬよといふ事にて、文の取りやりなどに、親しみては來たれど、慥かには未だ遇ひちぎりかねたる戀ひの心なるべし。抄には、あだ人を沙風によせて馴るゝとはすれど、其の情の慥かならぬやうの説を取られたり。それにもきこえざるにはあらねど、暫らく我れは斯くの如く説くを、面白しと思ひて。

○攝政太政大臣家歌合に讀み侍りける

寂蓮

ありとても逢はぬためしの名取り河朽ちだにはてね瀬々のうも
れ木

○ありとても。世に存命して居りたればとの意。 ○逢はぬためしの名取河。 あはぬためしの名取河ならむといふ意に見るべし。逢ふを得ざる戀ひの例に引かるるやうな名を取るの身ならむといふ意なり。それを、名取河は、古今集にも「陸奥にありといふなる名取り河なき名とりてはくるしかりけり、」名取川瀬々の埋れ木あらはればいかにせんとか逢ひ見をめけん」など言ひて、戀ひの名を立てらるゝ場合に、よく引かるゝ故に、名取河の身ならんと文なしたるなり。○朽ちだにはてね。 餘事はかなはずとも、死ぬるだけは得て、死んでもしまへといふ意なり。それを、瀬々の埋れ木の縁にて、朽つると言へり。朽ちだにのだには、餘事はかなはずとも、この事だけは、かなひ得ての意にて言へるなり。○瀬々の埋れ木。 瀬々の埋れ木となりての意に見るべし。かひなき身となりての意なり。それを、河の縁にて言へるなり。

○一首の意は、世に存命したりとても、遂には、逢ふを得ざる戀ひの例に引かるゝ名を取るに過ぎざる身ならむ。それよりは、かひなき身となりて、いつそ死ぬるだけは、かなひ得て、死んでもしまへといふ事にて、あひ難き戀ひになげくの餘りの愚痴なり。名取河、瀬々の埋れ木の比喩もすなほにして面白く、よく優美なる詩趣を得、其の情も哀れに深くきこゆるものありて、情深く詞美なる寂蓮が得意の手腕を示し得たりといふべし。

○千五百番歌合に

攝政太政大臣

なげかずよ今はた同じ名取河瀬々の埋れ木朽ちはてぬとも

○今はた同じ名取河。 今もまた同じ名を立てられたる身なりといふ意を、前の歌と同じ意匠にて、名取河と文なしたり。同じ名とは、逢はれぬ戀ひに焦るゝ評判なるべし。此の下に、朽ちたるも同じ事ぞといふ如き詞を添へて見るべし。○瀬々の埋れ木。 前の歌の意と同じ。○朽ちはてぬとも。よしや我れ死んでしまふとてもなり。上の句のなげかずよは、此の末にあきて見るべし。○一首の意は、今とても、既にあひ難き戀ひに焦るゝ名を取りたる身ぞ。死にたるも同じ事ぞ。かひなき身は、よしいつそ死んでしまふとも、最早嘆がじといふ事なり。○本居翁も石原主も、同じ名を、うき名とのみ説かれたれど、それにては淺し。あひ難き戀ひに焦るゝといふ評判とせざるべからず。さらば、朽ちたるも同じなれば、朽てしまふとも嘆かずといふ情にかなはざるにあらずや。かひなき身なれば、死ぬるもいとほざるよりの意なれば。

○百首歌奉りし時

二條院讃岐

涙川たぎつ心のはやき瀬をしがらみかけてせく袖ぞなき

○上の句の川も、たぎつも、はやき瀬も、皆戀ひ泣く涙の仰山なるさまをたとへたるなり。○しがらみかけてせく袖ぞなき。 ○涙をとどむる柵は袖なれど、袖も其の涙をとどめやうが無きあり

様なり。

○一首の意は、戀ひしさに堪へずして、涙は川の早瀬のやうになきなして流れて、袖の柵もとてもとどめかねたりといふ事にて、いかにも仰山げに仕立てたるところが、見どころなるべし。

○攝政太政大臣百首歌よませ侍りけるに、

高松院右衛門佐

よそながら怪しとだにも思へかし戀ひせぬ人の袖の色かは

○よそながら。我れを戀ふかとの實情よりにはあらずとも意なり。○怪しとだにも。我が袖

の色を見て。あやしやあの唯だならぬ袖の色は。さては戀ひをして居るかただけも思へといふなり。

○戀ひせぬ人の袖の色かは。此のやうに變はりたる我が袖の色は、戀ひせぬ人に見るべきものか、見るべきものにあらじ。戀ひなく紅涙にこそかく袖の色も紅むに變はるものぞといふの意なり。

○一首の意は、戀ひ泣く人の泪にあらずして、斯くの如く紅むに袖の色の変はるものにあらず。

此の袖の色に目をつけて、たとへ、我れを戀うて居るかとの實情からにはあらずとも、不思議やあの袖の色は、さては戀ひ泣きて居るかただけの同情は寄せてよといふ事なり。我が紅涙の袖を見つ

けて、せめこよそながらの同情だけでも寄せてとの愚痴なり。上の句は、やさしく同情を求むる詞

に出でて、下の句は、強く理屈を言ひすてたるところ、いかにもやさしくも強くも、其の情のまご

ゆるを得て、めでたき言ひまはしなり。其の愚痴も切情をあらはして面白し。

○戀ひの歌とて

讀人知らず

しのびあまり落つる泪をせきかへしおさふる袖よりき名もらす
な

○しのびあまり落つる泪。此のと言ふ詞を、上にあて見るべし。しのびあまる涙とは、堪へん

とすれど、堪へかねて、涙のこぼるるをいふなり。○せきかへし。とどめかへしての意なり。○

おさふる袖。涙をおさへつゝむ袖なり。○うき名もらすな。戀ひするといふうき名を、人に立

てらるるなど、袖にたのむなり。

○一首の意は、堪へかねて、我れは泣かるるが、我が袖よ、此の泪をとどめかへして、人に戀ひ

する評判を立てられぬやうにしてくれよといふ事にて、堪へかねて落つる泪を、袖におさへながら、

かくては人目につきて評判せらるべければとの心より、幼く袖にたのみたる意なり。とどめ難き我

が心より、はかなき袖を幼くたのみたるところ、可憐といふべきか。

○入道前關白太政大臣家歌合に 道因法師

紅るに涙の色のなりゆくをいくしほまでと君にとはばや

○上の句は、伴れなき人を戀ふる涙の深くして、紅涙になりゆきたる意なり。此の句の次に「さ

るに君はなほつれなし」といふ詞を置きて見るべし。○いくしほまでと。幾しほ染めの紅涙にな

るまで伴れないかとの意。しほとは染汁に浸して染むる度数の名にて、一しほ 二しほ 八しほ
千しほなど、常にいふ詞なり。紅涙といふより、斯く幾しほ紅く染むるまでと言へるなり。

○一首の意は、君を戀ふ泪は、紅涙になりたるを、なほ君は伴れなし。幾しほ染めの紅涙になるま
で、君は伴れないか、問ひたく思ふといふ事にて、紅涙をしぼるまでに戀ひなげけど、なほ人のつ
れなきより、紅涙によりて、幼くやさしく恨みたるころなり。幾しほまでとの紅涙の用ひ方、面
白く、其の情も可憐なるものありといふべし。

○百首歌の中に

式子内親王

夢にても見ゆらんものを歎きつゝうちぬるよひの袖のけしきは
○夢にても見ゆらむものを。現には見えすとも、夢にて見えさうなものなるにといふ事にて、「そ
れを夢にも見えぬか、全く知らぬ貌して居る」といふやうなる餘情を、添へて見るべし。○なげさ
つうちぬるよひ。かくまでに戀ひなげきながら毎時寝る夜の意。○袖のけしきは。紅涙にし
ぼる袖のさまはといふ事にて、上のなげさつゝにて、涙は自からさかせたるなり。三四五二と、
句をまさかへて見るべし。

○一首の意は、斯くまで戀ひなげきながら毎夜寝る我が袖の、紅涙をしぼり居るけしきは、よし
人の現には見えすとも、夢には見えさうなものなるにナアーといふ事にて、前に言へる如き餘情あ
るなり。本居翁は、「見ゆらむものを」を「見せばや人」と言ひて、末を袖のけしきをとせば、懸

け合ひよろしからむと評せられたれど、さては、石原主の言へる如く、詞せまりて意つきて、一首
の命とすべき餘情は空しく、極めて平凡なる歌となるべし。「見ゆらむものを」とあるが、誠に此の
時代の餘情を尊ぶ手振りを見せたる面白きところなれや。

○かたらひ侍りける女の夢に見えて侍りければ讀みけ
る、
後徳大寺左大臣

さめて後夢なりけりと思ふにも逢ふはなごりのをしくやはあら
ぬ

○夢なりけりと。今逢ひしは、現にあらず、夢であつたとの意。○思ふにも。思ふ場合にもの
意。○逢ふは。君に逢ふとあればの意に見るべし。○なごりのをしくやはあらぬ。なごりの惜し
からぬか、名残は惜しいとなり。

○一首の意は、夢のさめてから、今逢ひしは現にあらず、夢でありしと思ふ場合、それほどの場
合でも、遇ふとあれば、なごりがほしいといふ事にて、君にあふとあれば、いつもなごりをしとい言
つて、深く愛する意をのべたるものなり。あふと見し夢のなごりをしは、夢と知りせば覺めざら
ましなどいふは、つねの意なれど、それを、あふと言へばなごりをしとい言うて、愛する意の深き
を示す歌としたるところ、意匠面白しといふべし。

○千五百番歌合に

攝政太政大臣

身にそへる其の面影も消えなむ夢なりけりと忘るばかりに

○身にそへる。常にわが身につきそうて居る意。○其の面影。目に見ゆる其の戀ひし人の影なり。○消えなむ。消えてしまつて欲しいとなり。○夢なりけりと。見し其の人は、はかなき夢でありしと思つてなり。○忘るばかりに。我が戀ひし心の、忘らるる程にといふ意。

○一首の意は、見し其の人は、はかなき夢でありしと思つて、我が戀ひし人の忘らるるやうに、此の我が目の前に常にちらつく其の人の影は、消えてしまつて欲しいといふ事にて、戀ひし人の面影の、身をはなれずちらつきて忘れぬよりの幼き愚痴なり。言ひまはしに、強とところあるを、味ふべし。

○五十首歌奉りし時、

前大納言忠良

たのめおきし浅茅が露に秋かけて木の葉ふりしく宿の通ひ路

○此の歌は、伊勢物語なる「秋かけて言ひしながらもあらなくに木の葉ふりしくえにこそありけれ」を、本歌としてよめる如し。○たのめおきし。たのめはあてにさせる意にて、人のあてにさせておきたるよとなり。○浅茅が露に秋かけて。浅茅に露のおく頃にと、秋に心をかけての意。秋かけてとは、秋にはあはんと心にかけての意なり。此のかけては、なほ神かけてなどいふと全じ。

此の上の三句は、三、二、一、と句をおさかへて、見るべし。浅茅に露の置く秋の頃には、遇はんとちぎりて、あてにさせ置きたるよなり。上の三句は、別に斯くまとめて見るべし。而して、此の三句の次に、「さるに、其のちぎりし人は秋にも来ず」といふ如き意を、入れて見るべし。○木の葉ふりしく宿の通ひ路。今は冬になりて、ふりしく木の葉に、宿の通ひ路も埋れたりとの意なり。さるになほ人はとひ来ぬとの餘情あり。

○一首の意は、浅茅に露の置く秋の頃には、必ずあはんと、人はたのめ置きたるよ。あてにして待つて居りたるに、其の人は来たらず。今は冬になりて、ふりしく木の葉に、宿の通路は埋れたり。なほ人はとひ来ずしてとの意なり。秋にはんとちぎりし人の、秋にも来ず。冬になりても見えぬを、うらみたる歌なり。本居翁は、秋かけての詞を難じて、秋かけては、夏より秋へかけて言ふべきなり。木の葉は夏より秋へかけて散るものにはあらず。もしや、木の葉は冬のはじめ散るものなるが、秋の末よりもかつ／＼ちるとの意にて言へるか。さやうに後より前をかくる事を、かけてとは言はず、無理なり」と許せられ、石原主もこれに同意して、「冬ちるべき木の葉の、秋をも兼ねてちるなりとせば、よろしかるべきか」と辨せられたれど、皆大に誤れり。秋かけての詞を、「木の葉ふりしく」に續けて見るよりの誤解なり。秋かけてたのめおきしと續くにて、たのめおきしは「浅茅が露」に續くにあらず、こゝにてさるるなり。上の三句は、「浅茅が露に秋かけてたのめおきし」となるなり。而して、秋かけてのかけては、兼ねての意にあらず、神かけてといふと全じく、心にかくる意になるなり。若し斯く説かば、上の句の言ひまはし、餘りに變はりたりと言はれんか。決し

て然らず。たのめおきしと先づ断れるは、「契りさな、かたみに袖をしぼりつゝ」といふやうに、かゝる嘆息の場合、斯くあるが、もとより至當にして、自から道勁なる發表法にかなふところなり。よく其の調子を見よ、先づ最も主となる「たのめおきしよ」の嘆息の聲を、はじめに言ひ出て、さて次に、淺茅が露に、また次に秋かけてと、順序に後より言ひ添へたる發表なり。激情の場合、かく轉裝する事は、自からの道理にして、決して無理なる變りたる詞づかひにあらじ。一首、極めて發表法の面白き歌といふべく、此の時代の發表法の妙を示したるものにこそ。

○隔河忍戀といふ事を

正三位經家

忍びあまり天の河せにことよせんせめては秋を忘れだにすな

○忍びあまり。心のみは思ひされずなりたる意なり。○天の河せにことよせむ。今は天の川せを隔てて戀ふ棚機の思ひに託けて言はんとなり。○せめては。度々逢ふ事は出来ずとも、せめての意。○秋を忘れだにすな。年に一度の逢ふせだけは忘れずに下されといふ意。棚機の秋の逢ふせの縁にて、年に一度位の會合を、秋と言へるなり。

○一首の意は、忍びあまりて、我れは今は、天の河原を隔てて戀ふ棚機に託けて言はん。度々逢ふ事は出来ずとも、どうぞせめて年に一度位は忘れずに逢うて下されとなり。

○遠き境を待つ戀といへる心を

賀茂重政

たのめども遙けかるべき歸へる山いく重の雲の下に待つらむ

○たのめども。きつと早く歸へつて來ると、人はあてにさせてにもの意。○遙けかるべき歸へる山。歸へらんまでは月日の久しくかかるべき遠き旅なればといふ意にて、其のかへるを、越前の名所なる歸へる山によせて、いく重の雲の下の縁とせり。また、久しき月日をも、其の縁にて、遙かなるべきと言へり。○いく重の雲の下。「いかに限りなき思ひにて」といふ事を、山の縁にて言へるなり、○待つらむ。人の歸りを待つ事ならむといふにて、悲しやといふの如き餘情をこめたり。

○一首の意は、きつと早く歸つて來ると、人はあてにさせて出立せられても、歸りてあはん迄は、月日の久しくかかるべき旅である。されば、今よりいかに限りなき思ひに焦れて、其の歸へりの待たる事ならむ。それを思へば、悲しいといふ事にて、これは、遠く別るるに臨みて、また其の人の歸へり來てあひ見むまでの久しかるべきを思ひやりて、待つ間の戀ひしさをいかにと、思ひなげきたるものなり。歸へる山を本としての縁語の結構を見るべき歌といふべし。

○攝政太政大臣家百首歌合に

中宮大夫家房

逢ふ事は何時といぶきの峯に生ふるさしも絶えせぬ思ひなりけり

○いつといぶきの峰に。いぶきに、言ふと伊吹山を引きかけたり。懸詞なり。逢ふ事は何時と言ふ伊吹の峰に」と、のぼして見るべし。逢ふ事は何時と言ふは、逢ふ事の何時ともたのみ難き意にて、此の詞の次に「頼みもなし」といふ詞を、ききて見るべし。伊吹の峰には、伊吹の峰に生ふ

さしも草と言ひ下して、其のさしも草を、さしもにかけて、序とせるなり。歌意に關係なし。○さしも絶えぬ思ひ云々。此の句の上に、さるにといふ詞をまきて見るべし。逢ふ時も期せられぬに、さるに、さやうにマア絶えぬ思ひであるワイといふ意。

○一首の意は、相逢ふ事は、何時と言はんか、頼みもなし。さるに、さやうにマア、我が思ひは絶えぬ事よといふにて、あてもなき戀ひに、なほ思ひ絶えず、焦るる心の愚さを、嘆息したるなり。つまり、逢ふあてもなき戀ひに、あきらめずして焦るるよりの嘆息なり。

○全じく

家 隆

富士のねの煙りも猶ぞ立ちのぼる上なきものは思ひなりけり

○猶ぞ立ちのぼる。猶は俗にもつとといふ如き意、其の上になほといふ事なり。富士の嶺は高しのに、煙は其の上になほ高く立ちのぼるといふなり。上の句ははてなきものの例なり。○うへなき。はてなきの意なり。○思ひ。我が戀ひの思ひなり。

○一首の意は、富士の嶺は高いが、其の煙でも、其の上になほ高く立ちのぼる。其の煙りのやうに、ホニに、はてなきものは、我が戀ふ心であるワイといふ事にて、層一層戀ひまゐりて、はてなき思ひを、上なき思ひと言ふより、富士の高嶺の煙りの例などを引き來たりて、我が戀ひのはてなきを、嘆息したる意なり。富士の煙は、歌に多く用ひられたれど、其の煙は嶺よりも高くのぼるといふやうに用ひ來たれるところが、新しき工夫なるべし。攝政太政大臣家百首歌合せに、奇煙戀を

題としての歌なり。

○名立戀といふ心をよみ侍りける、

權中納言俊忠

なき名のみ立つ田の山に立つ雲のゆくへも知らぬながめをぞする

○なき名のみ立つ田の山。立田山の立つに、名のみ立つと言ひかけたる懸詞の技あり。なき名のみ立つとは、よき中ぞとの無實の評判ばかりせらるるを言ふ。立田の山は、立田の山に立つ雲と言ひ下して、ゆくへも知らぬの比喻に用ひたり。「立田の山に立つ雲の如く」の意に見るべし。○ゆくへも知らぬながめ。自分は、おぼつかなき戀ひに、思ひながめのみ居るさまなり。抄には、行く方も知らぬを、なき名の立つにかけて、「行く方も知らぬ事になき名のみ立つ事よと歎きてうちながめて」と説かれたれど、なき名の如何にはかゝるにあらず。これは、行く方も知らぬ戀ひにながむるをいふなり。

○一首の意は、よき中なりとの無實の評判ばかり立ちて、其の實は無き我が身は、立田山の雲の如く、行く方もわからぬ戀ひにうち嘆きて居るといふ事にて、よき中ぞとの噂さはせらるれど、實はかなはぬ戀ひにて、自分獨り焦れ居るさまなり。

○百首歌の中に戀ひの心を 惟明親王

あふ事の空しき空のうき雲は身を知る雨のたよりなりけり

○空しき空。 逢ふ事のなき意の空しきと、虚空のむなしきとを引きかたる懸詞の枝あり。○逢ふ事の空しくして、空しき空のうき雲」といふやうに、詞をのばして見るべし。○逢ふ事のなくして」は逢はれずしての意にて、此の句の下には、うちながめ居る心を添へたれば、「逢はれぬ戀ひに、うちながめ居れば」といふ如き意になして、見るべし。○空のうき雲は。 憂き空の浮雲はの意に見るべし。浮きに憂きを添へたり。○身を知る雨。 我が身のかひなき事を思ひて落す涙なり。雲の縁にて言へり。○たよりなりけり。 其の縁であるよとの意。なつかしとの意を除したり。

○一首の意は、 あはれぬ戀ひにうちながめて、ながめ居れば、大空に浮ぶ憂き雲は、わが身のかひなきを思つてこぼす涙の縁で、なつかしいワイといふ事なり。あはれぬ戀ひの思ひに、うちながめ居りて、ふと大空の雲を、我が涙の縁のものと思ひよりたるにて、其の情は可憐なりといふべし。

○おなじく

左衛門督通具

我が戀ひは逢ふを限りの頼みだに行く方も知らぬ空のうき雲

○此の歌は、古今集の「わが戀は行く方も知らずはてもなしあふを限りと思ふ斗りぞ」を、本歌としてよめるなり。○逢ふを限りの。 逢ふを限りの命なりとの頼みだにと見るべし。○あふを限りの命なりと思つて居るが、その頼みだに「の意なり。○行く方も知らぬ空のうき雲。 たのまれぬ意をたとへたる詞なり。

○一首の意は、 戀ひする我が身は、逢ふを限りの命と思つて居るが、其の頼みだに、丁度、大空の浮雲で、頼みにはならぬといふ事にて、逢はぬ中に死んでしまふかもわからぬとの餘情なり。本歌の用ひ方の面白さを見るべし。優美にして哀れなる歌からも、此の時代の歌風の妙を見せたりといふべし。

○水無瀬、戀十五首歌合に春戀の心を

俊成女

面影のかすめる月ぞ宿りける春やむかしの袖の涙に

○面影のかすめる月。 其の人の面影のかすみて見ゆる月にて、袖に宿る月に、人の面影のかすみて見ゆるさまなり。○月を宿りける。 月が袖の涙に宿るとつづくなり。涙に濡れたる袖に、月影のうつるさまなり。○春やむかしの袖の涙に。 業平の「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」の歌によりたり。其の歌によりて、「諸共に見たる春は、昔になりたりと、噴きてこぼす我が袖の涙に」の意に見るべし。

○一首の意は、 諸共に見たる春は、昔になりたりとなげきてこぼす涙にぬれたる袖に、其の人の

面影のおぼろに、月影のうつるといふ事にて、なつかしくこひしさの身にしむ情をあましたり。風月昔のまゝの春夜、其の人の面影さへうかべて、頻りになつかしく思ひなげくさまなり。本歌によりたる春や昔の詞をはじめとして、詞すべて優美に面白く、月影に面影のかすめると添へたる意匠は、實に此の歌の情景を、限りなくあげ得て、一首の生命こゝにありともいふべし。

○冬戀

定家

床の霜枕の氷り消えわびぬむすびもおかぬ人のちぎりに

○床の霜枕の氷り。寒夜の獨り寐に戀ひ泣く涙の、霜とおき氷りと結ぶけしさなり。○消えわびぬ。死にさうに戀ひわぶとなり。それを、霜の氷り縁にて、消えと言へり。○むすびもおかぬ。固く離れじと心からの約束せざりし人なり。○ちぎりに。ちぎり故にの意なり。下の句の意は、一度はちぎられたれども、固く離れじと心からのちぎりはせざりし人にて、其の後は見すててあはざる故にといふ事なり。

○一首の意は、固く離れじと心からはちぎらざりし人にて、其の後は見棄てて逢はざる故に、我れは、戀ひ恨む涙の、床の霜枕の氷りと泣きあかし居て、命も消えさうに苦しんで居るといふ事なり。薄情なる人を戀ひ恨みて、涙冷やかなる夜床、死にさうな思ひする意なり。石原主は、床の霜枕の氷りを、消えわびぬの意の上にかけて、其の霜氷りの如く消えさうにと脱かれたれど、上の二句は寒夜涙にくれ居る様にて、消えはたゞ其の縁にて、死ぬる意を言へるのみ。縁語を用ひたるまで

の事のみ。またむづかしき歌なりといはれたれど、霜の如く氷りの如くなどの意に見る故に、むづかしくもなるなり。上の句より、一句くよく吟じて見られよ。少しもむづかしきところはおぼえざるにあらずや。其の情景は、一句くありくよ浮び來たるべし。成るべく細に複雑にと構ふる詩想を、短かき詞に言ひまはさんとする此の時代の歌を見るには、單に詞の上のみをたどりては得難し。吟じて其の調を味ひ、また自からの感情想像を充分に活かして、而して後に、其の詞をも考へて見るにあらずば、其の眞の心を得がたきものなれや。

○攝政太政大臣家百首歌合に曉戀

有家朝臣

つれなさのたぐひまでやはつらからぬ月をもめてし有明の空

○つれなさの。伴れなき人の意。○たぐひまで。たぐひは其の種類といふに全じく、つれなき人の種類までには、伴れなき人と同じ程までといふ意なるべし。○つらからぬ。上のやはは、此の下におきて見るべし。つらくないか、つらく思ふといふ事なり。○月をもめてし。昔は其の人と共に月をも賞祝したりし意。○有明の空。其の有明の空はつらいといふやうにつくくなり。○一首の意は、昔は其の人と共に月をも賞祝したりし有明の空は、其の伴れなき人と全じ程までにつらく思ふといふ事にて、法師憎くけれや袈裟まで同じやうににくいといふに似たる熱狂したる情なり。其の無意味の有明の空をも、同じく憎く思ふとの情は、切情のあまりに狂したるにて、面白

けれど、二の句のたぐひまでやはといへるところ、やゝむづかしき言ひまはしの嫌ひあり。

○宇治にて夜戀といふ事を、をのことも仕らまつ

りしに、

秀能

袖の上に誰れゆゑ月はやどるぞとよそになしても人のとへかし

○上の三句の意は、誰れを戀ひ泣く故に、我が涙にぬらす袖の上に、月影のうつるをといふ事なり。誰れゆゑにさ様に泣かるる袖の涙ぞといふ意の上に、月影のうつるといふ事を添へて、題の夜の意をさかせて、また夥しく泣くけしきを見せたり。月影のうつるまでの涙は容易のものにあらればなり。○よそになしても。我れゆゑとさとりての實情よりはあらずとも、せめてよそ事にしてもといふ意。○人のとへかし。とうてもくれよと願ふ意なり。

○一首の意は、涙にぬるゝあなたの袖の上に、月影がうつる。それほどまでにあなたは誰れゆゑに戀ひ泣き給ふのかと、たとへ我れゆゑとさとりての實情よりはあらずとも、せめて他事にしても問ひくれよといふ事にて、戀ひ佗びて、よそながらの見舞の同情をも得たしと思ふ切情なり。

○久戀といへる事を

越前

夏びきの手びきの糸の年経ても絶えぬ思ひにむすほほれつゝ

○夏引きの手びきの糸の。糸をへると經ての全音にかけて、年を経ると言ひ出だす序とせるなり。

一首の意に關係なし。○絶えぬ思ひ。思ひつゞくる意。○むすほほれつゝ。むすほほるとは思ひ亂れて、心の晴れぬさまを言ふ。糸の縁にて言へり。

○一首の意は、斯く年月を重ねても忘れられず、あひたしくと思ひつゞけて、心は亂れてばかり、よそぎくらすして居るといふ事なり。夏引きの手びきの糸の事は、前に詳しく言へり。

○家に百首歌合し侍りけるに、祈る戀ひといふ心を、

攝政太政大臣

幾夜われなみにしをれてきふね河袖に玉ちるもの思ふらむ

○われなみにしをれて。我れは貴船河の波にしをれてと見るべし。波にしをれてとは、波に濡れそぼたれての意なり。貴船は山城の名所にて、其處には明神あり。後拾遺集の戀歌の部に、和泉式部が菅て人に忘られたる時、貴船に詣てて、御手洗川に笠のとぶを見て、「物思へば澤の笠もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る」とよみけるに、明神が男の聲にて、「奥山にたざりて落つる瀧つ瀬の玉ちるばかり物な思ひそ」と神託ありしよし言ひ傳へたる見ゆ。上の句は、貴船の明神に毎夜參詣するさまなり。○袖に玉ちる。袖に涙の亂れこぼるるを、其の貴船明神の歌なりといふ歌の詞を取りて、玉ちると言へるなり。

○一首の意は、幾夜我れは貴船何の波にぬれそぼたれて、斯く此の明神に參詣祈禱しに來つゝなほあひ難き戀ひに、斯く袖に涙の亂れこぼるる程のもの思ひする事ならむといふ事なり。貴船を取

り出でて、なみにしをたれとといひ、玉ちるといへる詞づかひは、此の歌の工夫のあるところなるべし。波にしをれて来ふね河といふあたり、やゝ輕きにすぎたる嫌ひあれど、巧みにして流暢なる歌がらは、また争ふべからざるべし。

○題しらず

定 家

年もへぬ祈るちぎりははつせ山をのへの鐘のよその夕ぐれ

○年もへぬ。斯く初瀬の御佛に祈り申す事も多くの年を重ねたりとの意なり。○祈るちぎりは。其の祈り申す我がちぎりはといふ事にて、此の上に、さるにといふ詞を置き、また此の句の次ぎには、空しくしてといふ詞を、置きて見るべし。○尾の上の鐘のよその夕ぐれ。尾の上の鐘とは、御寺の鐘を言ひたるなり。初瀬のみ寺に祈願する意をかきたる初瀬山の詞より、尾の上の鐘と言ひ下したるのみなり。本居翁は、尾の上の鐘なる故に、よそに遠くこゆる意にて、よそとつゞけたり」と言はれたれど、さるむづかしき意に見ずともよし。よそとは、他人の上のといふ意なり。さて、此の下の句は、「尾の上の鐘の夕ぐれも、他人の上のちぎりの時のみなるよ」といふ意なり。御寺の晩鐘のなる頃は、人の通ひて相違ふ事なるが、自分には、あはせ給へと祈る効験もなくして、あふ人のなき故に、他人の上のちぎりの時なりと言へるなり。

○一首の意は、かく祈り申す事も、幾年を重ねたり。さるに、其の祈り申す我がちぎりは、空しくして、御寺の晩鐘の鳴る頃も、我れには相逢ふ時にあらずして、唯だ他人のみの通ひてちぎる時なるよといふ事にて、察したまはれとなほ佛に祈り申す意をあましたり。下の句の意匠言ひまはしは、殊に面白く見るべき歌なりや。其の詞によりて、上の句に省きたる空しくしての心も、自から問ゆるところ、はたらかせ得たる詞にあらずや。

○片思ひの心をよめる

俊 成

うき身をば我れだに厭ふ厭へたゞそをだに同じ心と思はむ

○うき身。つらき身なり。思ふ人に思はれざる故に、我が身をつらき身と思ふなり。○我れだに厭ふ。我れさへ愛さ身はいやに成つて棄てたく思うて居るの意。だには自分でも愛さ身はいやになつて居る故に、他人が愛さ身を厭ふ事などは、とやかくと思ひわづらふ心は我れになかるべら意にて言へるなり。○厭へたゞ。あなたも愛さ身を厭はるとの事ならば、一向に愛さ身を厭ひなされよといふ意。○そをだに。それだけでもの意にて、「全じく愛さ身をいとよといふ事だけでもせめて」といふ事なり。○同じ心と思はん。あなたと全じ心なりと思つて、我が心を慰めんとなり。○一首の意は、思ふ人に思はれざるつらき身は、我れでもいやに成つて棄てたく思うて居りまする。他人が愛さ身を厭ふといふ事などは、とやかく思ひわづらひ申さず。されば、愛さ身を厭ふとならば、あなたも一向に厭ひなされよ。さうすれば、身を厭ふだけは、あなたも我れも全じ心の人であると思つて、せめてそれに、あなたを思ふ心を慰さめましようといふ事なり。此の歌は、我が片思ひして居る人は、また他人に片思ひして居る場合なり。上の句は、いかにも無情のやうに聞

ゆれど、身をつめりて他の痛さを思ひやらしめんやうの心にて、伴れなきを恨む心を、かく飽くまでも強く打ち出でたるなり。下の句は、いかに伴れなくても、なほ自分は戀ひしたふ意よりのやさしき愚痴なり。上の句に強く恨みつけて、下の句にやさしげに言ひ添へたる、其の情いかに可憐なるものありて、愛すべしと言ふべし。

○題しらず

權中納言長方

戀ひ死なむ全じうき名をいかにして逢ふにかへつと人に言はれむ

○戀ひ死なむ同じうき名を。戀ひ死なむ此の同じうき名をの意に見るべし。「かくては戀ひ死ねばかりなるが」と言ふ意を、一首のはじめにあてて見るべし。同じうき名とは、戀ひ死にしたりといはるるも、逢ふを命にかへて死にたりといはるるも、全じくうき名なりといへるなり。○いかにして。どうぞしてといふ事。○逢ふにかへつと。逢ふに命をかへて死にたりといふ意。逢ふに命をかへるとは、逢ふ事と命とを取りかへるにて、逢ふを得、其の代りに命をすつる事なり。古今集に「命やは何にそは露のあだ物を逢ふにしかへばをしからなくに」なども全じなり。○人に言はれむ。言はれやうと願ふといふ意に見るべし。上のいかにしての詞にて、自から、願ふ意は、こゝにこもるなり。

○一首の意は、斯くは、戀ひ死にするばかりなるが、戀ひ死にせりといふ評判も、逢ふに命をへて死にたりといふ評判も、同じうき名なれば、どうぞして戀ひ死の評判を残す身とならずして、逢ふに命をかへて死にたりとの評判を残す身となりて、死にたいといふ事にて、死ねばかりに戀ひしく思ひ焦るる心よりの愚痴なり。其の情を察すれば、切なるものありと言ふべし。

○おなじく

殷富門院大輔

明日知らぬ命をぞ思ふ自づからあらば逢ふ夜を待つにつけても

○明日知らぬ命。明日もわからぬ命にて、無常の人生を言へるなり。○思ふ。心配する意なり。本居翁は悲しく思ふと説かれたれど、悲しくなどと、其處まで定めて言はぬ方が、よからむ。氣にかゝるとか、心配するとかいふ意に見る方、此の歌の心なりと思ふ。○自からあらば。ながらへてあらば、自然またといふ意。○逢ふ夜を待つにつけても。逢ふ夜もあらんかと待つにつけてもの意なり。下の句は、拾遺集の「いかにしてしばし忘れむ命だにあらば逢ふ夜のありもこそすれ」を本歌としたるなるべし。

○一首の意は、ながらへてあらば、自然とまたいつか逢ふ時もあらんかと、その折りを待つにつけても、明日もわからぬといふ無常の命が心配になるといふ事にて、つれなき戀ひに思ひ弱る身、はかなき頼みに、無常の人生を、一層思ひしみて、心配する意なり。思ひ弱る身とか、一層無常の命の思はるといふ詞は、それとあらねども、其處が一首の詞の下に、讀者の感情想像を活かして得べきところなり。しか思ひやりて見よ、いかにも心細く哀れなる情景のきこゆる歌といふべし。

○おなじく

八條院高倉

つれもなき人の心はうつせみの空しき戀ひに身をやかへてむ

○うつせみの。人の心は愛しのうに、うつ蟬のうをにかけて、懸詞とせり。而して、うつ蟬の詞は、空しきの序とせるにて、歌意に關係なし。人の心は愛し、さる故にむなしき戀ひに」といふやうにして見るべし。○空しき戀ひ。逢ふ事の無き戀ひの意。○身をやかへてん。身をかへてしまふ事かナアの嘆息にて、死ぬる事を言へるなり。

○一首の意は、同情なき人の心はつらし。さる故に、逢ふ事なき戀ひに、身をかへて死んでしまふ事かナアといふ事にて、人の伴れなきに死ねばかりにおぼゆる心の嘆息なり。空しき戀ひに身をかへるといふ意匠が、一首の工夫のあるところなるべし。

○おなじく

西行

なにとなくさすがにをしき命かなありへば人や思ひ知るとて

○さすかに。「人に嫌はれたる身、をしかる筈の命にはあらねどもされど」といふ意なり。○ありへば、世にありて年月経ればといふ事にて、生きながらへて年月かさねて戀ひしたひて居るならばといふ意になして見るべし。○人の思ひしるとて。我が心を人の推察してくれるかと思つて、それ故にといふ意なり。

○一首のは、斯く人に嫌はれたる身の、をしかへるべき命にはあらざれど、されど、何にとなく惜しいワイ。生きながらへて、年月思ひ焦れて居らば、若しや此の心を人の推察してくれる事もあらうかと思つてといふ事にて、伴れなき戀ひに、今は命も惜しからず思ふ心に、なほはかなき頼みの未練の残りて、何にとなくまた惜しき心地もする情なり。平凡のやうなれど、げにさるべき一かどの人情の賊を捉へ得たり。詞も、例の此の法師が、無造作なるやうにて、意味のよかき手振りを見せて、面白し。

○全じく

おなじく

思ひ知る人あり明けの世なりせば盡きせず身をば恨みざらまし

○思ひ知る人。此の心を察してくれる人。○あり明けの世。人のある有り明けの世に見るべし。○ありは懸詞なり。あり明けは、我が世の終りを比喩へたる暗喩と見るべし。○身をば。かひなきわが身をばと見るべし。かひなき身とは、人に同情せられぬ故に言ふなり。

○一首の意は、我が世の終りにても、せめて、此の心を人の推察してくれやうならば、此の様にかひなき此の身を、盡きせず恨むる事はしまいにナアといふ事にて、我が世の終りまで同情は更になからんと思ふまでの伴れなきに、かひなき身がいやまし恨めしとの餘情をこめたり。我が世の終りにても、せめて此の心を推察してくれる事あらば、それを思ひ出にせんとは、切情の限りなりや。人を思ふの情、こゝに至りて賊の限りといふべし。本居翁は「人あり明けと言ひかけ、つさせ

ず月をいへるいやしき工みにていとらるるし」と難せられ、また「有明の月此の歌にいさなかもよせなき事なり」と論ぜられたれど、それは、有明とは我が世の終りの暗喩なる事を知らぬより、また、つさせずに、月をよせたるなど、むづかしく見らるるより、いやしくもさこゆるなり。其の心をかへて見られよ。何んのかしきところあるべき。石原主も、これにつきて「何んのもせもなき有明の月を、二つの秀句にいひたるが、めづらしとて、撰集には入りしなるべし、させる深き意はなけれど、げにめなれぬことにはあるなり」と辨せられたれど、此の歌の秀れたるは、さるまらがひたるめづらしき故にはあらず。有明の世の暗喩の面白きと、其の切情のやうしきとにこそあるなれ。

戀歌三

○中關白通ひ初め侍りける比

儀同三司母

忘れじの行末まではかたければ今日を限りの命ともがな

○儀同三司は、高階或忠の女にて、伊周の母なり。○忘れじの行末まで。忘れじとのたまふ其の行末までの長さちぎりといふ意にて、行末まで長く變はらじ忘れじと仰せらるれど、其の行末までの長さちぎりはむづかしの事なり。○かたければ。むづかき故にといふ事にて、人の心の頼み難き世なれば、行末長く變はらぬ事はむづかしの心より言へるなり。○今日を限りの命ともがな。私は、今日を限りの命となりて、死にたいと思ふといふ事に、君にあひたる嬉れしき今日を、我が世の限りにて、死にたいと言ふ意なり。

○一首の意は、行末長く變はらじ忘れじと仰せらるれど、人の心の定めなき此の世、行末までの變はらぬちぎりは、むづかき故に、私はいつそ、此の嬉れしき今日を限りにて、死なばやと思ひますといふ事にて、あひ見る嬉れしきと共に、忘れんことを氣づかふ心よりの歌なり。遇ふ嬉れしきに忘れんことの氣づかひの伴ふは、人情の尤もなるところなり。それ故に、いつそ此の嬉れしき一夜を思ひ出して死にたく思ふとは、限りなくやさしく深き情にあらずや。哀れに可憐なる歌と言ふべし。

○忍びたる女を、假りそめなる所にゐて、まかりて歸へりて、あしたに遣かはしける、
謙徳公

限りなく結びおきける草枕いつ此のたびをおもひわすれむ

○端書の意は、人目を憚る女を、旅に伴れ出して、逢ひて、さて歸へり來たりたる翌日、其の女の許に言ひやりたる歌なりとなり。○限りなく。行末まで限りなき意なり。○結びおきける。ちぎりおきたる意なり。それを、草に縁をもたせて、結びおきけるといひて、草枕につとけたり。草枕は、このたびの序に用ひたるにて、意味には關係なし。○このたび。今度の事をの意にて此の旅の意をそへたり。此の旅の今度の事をの意に見るべし。

○一首の意は、行末まで限りなく深くちぎりおきたる此の旅の今度の事を、いつ忘れやうか、決して忘れじといふ事にて、旅中のうれしきちぎりよるこぶと共に、其の約束したる如く、決して長く忘れじとの我が心中をのべやりたるなり。

○題しらす

業平

思ふには忍ぶることぞまけにける逢ふにしかへばさもあらばあれ
○此の歌は、伊勢物語にあり。憚るべき女の許に、男の常に来て、側を離れずに居る故に、女

のこれを制して、さる行ひしては、不都合なり、若し世に知られなば、必ず重き咎めにあひて、身を亡ぼすに至らんと言ひければ、其の男のよめる歌なりとあり。其の心にて見るべし。○思ふには。君を戀ひしく思ふ心にはの意。○忍ぶる事。人目を憚りつゝむ事なり。○負けにける。人目を憚りてつゝむ心は、君を戀ふ心には勝ち難くして、今は忍ぶ事の出来ずなれるを言ふ。絶えず側を離れず、人目につくをも憚らざる行ひを、辨解したる詞なり。○あふにしかへば。君に逢ふ事と取りかへる我が身ならばの意。此の下に、「よし人目につき、世の重き咎めを受けて、身を亡ぼすに至るとも」といふ如き意を入れて見るべし。○さもあらばあれ。身を亡ぼす事ならば身を亡ぼせ、厭ひはせじとの意なり。

○一首の意は、人目に立ちてはと、自分も忍びては居たれど、忍ぶ力は、君を思ふ心には遂に勝てずして、今は人目につくもいとはずなりて、斯く離れずに居ります。君に逢ふ嬉れしさと取りかへる我が身ならば、よし身を亡ぼすに至るとも、更に厭はじと思ふといふ事にて、君が一夜の情けには、百年の我が身も棄て、惜しからざる心よりの此の狂態、あはれと察してたまはれとの餘情なり。其の情切に、其のいひまはしの巧みに且つ強きを得たるところ、いつもながら實に此の朝臣の非凡なるところにして、學ぶべきところなれや。

○人の許にまかりそめて、あしたに遣はしける

廉義公

昨日まで逢ふにしかへばと思ひしを今日は命の惜しくもある哉

○藤義公とは關白頼忠の諡號にて、清慎公實頼の子にて、公任卿の父なり。○逢ふにしかへば。

逢ふにしかへば、をしからぬ命ぞと思ひたるにとなり。○昨日まで。君にあはざりし昨日まではの意。○今日は。一度君にあふを得ての今日はの意。

○一首の意は、君にあはざりし昨日までは、逢ふ事に取りかへるならば、惜しくはあらぬ命なりと思ひたるに、一度君にあふを得ての今日は、また其の命が惜しく思はるるやうになつたソイといふ事なり。あひ得ざる程は、命にかへてもあひたく思ふは、其の人を思ふの情の極なり。あふを得ては、また命の長かれと思ふ、其の人を思ふの情の賊なり。人情の誠に出でたる一首の切情、真に可憐に愛すべきものにあらずや。

○百首歌に

式子内親王

逢ふ事を今日まつが枝の手向草幾夜しをるる袖とかは知る

○今日まつが枝の手向草。まつに、待つと松との全音を引きかけて、懸詞の技を用ひたり。されば、「今日待つ、松が枝の手向草」とのばして見るべし。今日待つとは、今日やうく待ち得たるよと言ふ意に見るべし。松が枝の手向草は、萬葉集一の巻の「白波の濱松が枝の手向草幾よまでにか年の經ぬらむ」といふを、本歌として、その詞によりて、幾夜を言ひ出だす序に用ひたるにて、一首の意には關係なし。○幾夜しをるる袖とかは知る。これまで幾夜涙に濡れしをれたる我が袖と

思うてかよ、幾夜もく重さねて涙にしをれたる事をといふ意なり。しをるは、草の縁にて言へり。かはは感動の意を添へたる疑問の辭なり。

○一首の意は、逢ふ事を今日やうやう待ち得たるよ。これまで、君に逢ひたしくと待ちこがれて幾夜涙に袖をしをらせて暮らしたりと思はれてか、實に幾夜もく泣いて待ち焦れたる事でありますよといふ事にて、「よくくあはれに思し召して、可愛く思つてたまはれ」といふ餘情をこめたり。じめて逢ふ夜に、待ちこがれたる年月の涙を訴へて、それほどの身を可愛くまぼしめしてと、深き同情を求むる意なり。やさしき女子の情景は、げにと可愛くまぼえらるる詩想なりといふべし。

○頭中將に侍りける頃五節所のわらははに物申しそめて、

後尋ねてつかはしける、源正清朝臣

戀ひしさに今日ぞ尋ぬる奥山のひかげの露に袖はぬれつゝ

○五節所のわらはは。五節の舞姫に侍きて蒸爐しとねなどの世話をする童女の事なり。五節の事は前に言へり。○奥山のひかげの露。君を戀ふる涙をたとへて言へり。ひかげとは、日蔭のかづらといふ草の事にて、五節の時には、其の草を飾りにかくる故に、かく洒落れてたとへたり。奥山のといへるは、其の草は多く深山に生ずるものなればなり。○袖は濡れつゝ。尋ぬるの縁にて、泣きつゝをかく言へり。

○一首の意は、君を戀うて泣きつゝ、あまりの戀ひしさに今日はち尋ね申しますといふ事なり。奥山のひかけの露に濡れつゝとの意匠が、工夫のあるところと思へど、其の工夫の外には、何んの見どころもなき歌といふべし。

○題しらず

西行

逢ふまでの命もがなと思ひしはくやしかりけるわが心かな

○あふまでの命もがなと云々。どうぞ人に逢ふを得るまでは、命のあつて欲しいと願ひし事はの意なり。此のはじめに、「未だ逢ひ見ざりし程に」といふ如き詞を、置きて見るべし。○下の句の上は、今思へばといふ如き詞を、入れて見るべし。

○一首の意は、未だ逢ひ見ざりし程に、どうぞして人にあふまでの命のあつて欲しいと願ひし事は、今思へば、誠に悔しく思ふワイといふ事にて、逢ひ見ての後は、またも思ひたしとか、棄てられはすまいかななどと、いろ／＼思ひの増えるにつけて、逢ひ見ざりし程に、いつと死にたらば、かゝる思ひはあるまじかりしを、くやしい感見であつたとの愚痴なり。いよ／＼思ひまざる心より、逢ふまでの命をと願ひし心をくやむとの幼き愚痴は、切情の限りにて面白しといふべし。發表も、巧みにして、しかも、すなほに、すなほにして、しかも、強きところ、例の此の法師が清新なる手振りを見るべきの歌なりや。

○全じく

三條院女藏人左近

人心薄花染めのかり衣さてだにあらでいろやかはらむ

○人心。人の心はの意にて。人は我が思ふ人を婉曲にさしたるなり。○薄花染めのかり衣。ホンの薄い情愛といふ事の暗喩なり。○さてだにあらで。薄い情愛でも、さて其のまゝにあらばよいが、其の薄い情けにてばかりも止まらずして、其の上にといふ意なり。○色やかはらむ。情愛の全く無くなりて、自分を棄ててしまはんといふ事を、薄花染めのかり衣の縁にて、いろや變らむと言へるなり。

○一首の意は、人の心は、ホンの薄い情愛である。その薄い情愛でも、さて、其のまゝにあらばよいが、其の薄い情愛にてばかりもとまらずして、其の上に、遂には全く自分を忘れて棄ててしまはんといふ事にて」と思へば、誠に心細く思ふワイ」といふ如き餘情をこめたり。ちぎり初めつる人の、情愛うすくおぼゆるより、心細く恨めしく思ひたる意なり。薄花染のかり衣の暗喩、薄しといひ、かりといひて、極めて薄き意をさかせたるところ、一寸面白しといふべく、一首の情景、やさしき女子の心の見えて、いとほし。

○おなじく

興風

あひ見てもかひなかりけりうは玉のはかなき夢に劣る現は

○かひなかりけり。あひ見るかひはないワイなり。○うは玉の。夢の枕詞に用ひたり。○はかなき夢に劣る現。夢よりもはかなき現の意にて、實際にあひたるなれど、ホンのはかなき會合に

て、しかも、それなりにまた逢はざる事なるべし。

○一首の意は、 實際にあひたるなれど、夢よりもはかなきほどのちぎりなれば、實際にあひ見ても、あひ見しかひはないツイといふ事にて、ホンのはかなき會合の後、また其の人の逢はざる故に、かゝるはかなきちぎりにては、逢ふかひはなしと言へるなり。はかなき夢に劣る現といふ意匠が、工夫のあるところなるべし。

○おなじく

實方朝臣

中々に物思ひ初めて寝ぬる夜ははかなき夢もえやは見えける

○物思ひ初めて。 此處の物思ひは、一度逢ひ見たる後の物思ひを言へる如し。一度逢ひ見たる後いよく増さりて戀ひ初めての意に見るべし。○えやは見えける。見るを得る事か、見るを得ずといふ事にて、夢をも見る事を得ず、眠らず明かす意なり。

○一首の意は、 まだ一度もあはざりし程には、其の人の夢をも見たが、一度あひ見て後は、いやましての思ひに、寐ねても眠られねば、却つて、はかなき夢も見られずといふ事にて、一度あひ見て後は、いやまし戀ひしくて、夜も全く眠られずにあかす意なり。一度あひ見て後の増さる思ひなる事は、よく考ふれば、さどられざるにあらねど、少しく發表のたしかならざるにあらざるや。

○忍びたる人と二人臥して

伊勢

夢とても人に語たるな知るといへば手枕ならぬ枕だにせず

○夢とても。 たとへ夢なりとも二人の中の事はなり。二人の中の事は、夢がたりにも人にするなといふ意なり。○知ると言へば。 枕が人の中の事を知ると言ふ故にといふ事にて、枕にわかると言ふ故にの意なり。○手枕ならぬ枕だにせず。 手枕以外の枕でもせずとは、決して人にもれぬやうにと思ふ故に、知らるゝ恐れある枕でもさけて、唯手枕ばかりして、斯く寐るとなり。

○一首の意は、 枕に二人の中のわかるといふ故に、斯く逢ふ夜は、知らるる恐れある枕をも、さけて、唯手枕のみして寐る事である。二人が中は決して人にもれぬやうに注意せねばならぬ。されば、たとへ夢がたりなりとも、二人の上の事は、決して人にするなといふ事にて、人目を憚る中なれば、深くつゝみて、永く楽しくちぎらんとの意なり。枕にも知らるるを恐れて、斯く手枕のみすると言ひたるところが、一首の工夫のところなるべし。

○題志らず

和泉式部

枕だに知らねば言はじ見しまゝに君語たるなよ春の夜の夢

○枕だに知らねば。 枕でも此事は知らざる故に、即ち、枕にも此事はわからざる故にの意なり。手枕にて寐たるよりの意匠なるべし。されば、二人が注意すれば、他の人に知らる事はなしとの意をこめて見るべし。○言はじ。 枕も此の事を人にもらしやうはないと思ふとの意。○見しまゝに。 逢ひしまゝに此の事は深く隠してての意。○春の夜の夢。 此の名残をしきうれしちぎりをとふ事なり。

○一首の意は、此の名残をしきうれしきちぎりは、枕にてもわからぬ故に、枕も人にもらす氣づかひなし。二人の不注意以外には、他に知らるる恐れなし。君よ、斯くあひしまゝに深く隠しはてて、決して人に語るなよといふ事なり。春の夜の夢の暗喩こそ面白けれ。名残をしきあかぬ意をさかせ、また、夢の如きうれしきちぎりの 意をもさかせたる、誠に才女が手腕を見せて、めてたし。

○人にも言ひはじめて

馬内侍

忘れても人に語たるなうたたねの夢見て後もながかりし夜を

○忘れても。決してといふ心を、強く言ふ詞づかひなり。西行が「忘れてもまた越ゆべしと思ひさや命なりけりさ夜の中山」の忘れてもと、全じ詞づかひなり。○うたねの夢見て後。ホンの短き會合を、轉寐の夢と言へるなり。○ながかりし夜を。名残りの惜しかりし會合の意を、轉寐の夢の縁にて、夢後長かりし夜とたとへたり。
○一首の意は、ホンの短き會合、名残りをしかりし其のかたらしを、決して人にもらし給ふなといふ事にて、人に知られず、なほ永くちぎりにたければの意を、あましたり。夢みて後もながかりし夜の比喩は、少しくむづかしけれど、よく考へて見れば、斯くの如き意ならんと思ふ。さ思へば、また面白く工みたりといふへきところもあれや。

○女につかはしける

藤原範永朝臣

つらかりし多くの年は忘られて一夜の夢をあはれとぞ見し

○つらかりし多くの年。逢ひ見るを得ずして思ひ焦れたる積年の憂さつらさを言ふなり。○一夜の夢を。夢のやうな一夜のうれしき會合の意。○あはれとぞ見し。身にしみてうれしく思ひたるよとなり。
○一首の意は、逢ひ見るを得ずして思ひ悶えたる積年の憂さつらさを恨めしさは、皆すべて忘られて、夢のやうな一夜の會見を、身にしみてうれしう思ひましたといふ事にて、望みかなひたる一夜の會見をよろこびやりし意なり。つらかりし多くの年と一夜の夢、忘られてとあはれとぞ見しの、二種の對偶法によりて、仕立てたる歌なり。すなほにして、其の情も動きて、誠にあはれとぞ見る歌なりや。

○題しらず

高倉院御製

今朝よりはいとど思ひを焚きましてなげきこりつむ逢坂の關

○いとど思ひを。逢ひ見ざりし昨日までも、全しく思ひ焦れたれど、今朝は二層思ひをましたる意なり。○焚きまして。思ひに火をよせて、更に増さうて思ひ焦るゝ意を言へり。○なげきこりつむ。深く戀ひなげく意を、火の縁より、薪をつむに、縁をもたせて言へり。○逢坂の關は、逢ひ見る事の例の比喩なり。

○一首の意は、まだ逢ひ見ざりし程も、思ひ焦れてなげきたれど、あひ見て後の今朝からは、更

に思ひ焦れて、また逢ひたしと、深く戀ひなげくといふ事にて、はじめて逢ひ見たる翌朝、またあひたくて、更に戀ひなげく意を、言ひやれる意なり。焚きましての比喩はよけれど、なげきこりつひなどは、殊更に細工したるあと見えて、却つて其の情を減じたりといふべし。

○初めて會ふ戀の心を

俊

頼

あしのやの賤はた帯の片むすび心やすくもうちとくるかな

○あしのやの賤はた帯の片むすび。葦の屋に住む賤の女の帯の片むすびといふ事にて、賤機帯とは、しづ布の帯といふに全しく、片むすびはホンの一寸結びあくを言ふなるべし。萬葉集十一卷に「しへの賤はた帯をむすび垂れ誰れ云ふ人も君にはまさじ」、武烈紀に「大君の御帯のしづはたむすび垂れ云々」などむすび垂るにかけて言ふより見ても、賤布の帯は一寸むすびあくといふさまより、自から片むすびなどとも、こゝに言へるなるべし。此の三句は、やすくもうちとくるといふ詞を言ひ出す序にて、一首の意に關係なし。○下の句の上に、「思ひ思ひて、やつと逢ひたるうれしさに」といふ如き詞を入れて見るべし。○心やすくも。心の奥もなく、たワイなくの意なり。○うちとくる。懇ろにかたらふ事なり。

○一首の意は、思ひ／＼てやつと逢ひたる嬉しさに、心の奥もなく、誠にたワイなく、うちとけて語たらふ事よといふ事にて、さても恥かしやといふ如き餘情あり。餘情を察し來たれば、はじめて面白きものあり。

○題しらず

よみ人知らず

かりそめのふし見の里の草枕露かかりきと人に語るな

○かりそめのふし見の里。ふし見のふしに懸詞の枝を用ひたり。かりそめに臥すの臥しと伏見の里のふしと言ひかけたるなり。かりそめに臥すとは、一寸逢ひ見しをいへるなり。伏見の里の草枕は露を言ひだす迄の技術にて、歌意に關係なし。○露か／＼りきと。少しでも、斯くあひたりといふ事をの意を、草枕の縁にて言へり。

○一首の意は、かりそめに斯く逢ひ見たるよ。さて、斯くあひ見たりとは、決して少しにても人に語たる勿れといふ事にて、其の意明かなり。臥すを伏見の里にかけて、さて、草枕と言ひ下し、その縁にて、露か／＼りきといへるあたりの修辭の、優美巧妙なるを、味ふべき歌なりや。

○人知れず忍びける事を、文など散らすと聞きける人に

遣はしける、

相

摸

いかにせむ葛の裏吹く秋風の下葉の露のかくれなき身を

○端書の意は、人に知られぬやうに、深く隠くして居るものを、此方よりやれる手紙などを、人に見せ散らすとき、其の人の許に言ひやれる歌なりとの事なり。○葛の裏吹く秋風に下葉の露の。かくれなき身を形容したる比喩なり。葛の裏葉の秋風とは、葛の裏葉を吹き返へす秋風といふ事に

て、秋風の葛の葉を吹きかへす故に、其の下葉における露の隠れずあらはれて見ゆる如くの意に見るべし。○かくれなき身を、あらはれて人に知らるゝ身と云ふ事なり。いかにせんは此の下にきて見るべし。

○一首の意は、私は深く隠して居るものを、秋風の葛の葉を吹きかへす故に、其の下葉に置ける露も、人に見られて知らるる如くに、私の手紙などを人に見せ散らし給ふ情けなしいあなたの心故に、人にそれと知らるるに到る、いかにせん佗しやといふ事にて、人に知らるるやうの事をするを恨みなげきてやれるなり。葛の裏葉云々の比喩、優美にして巧みに面白し。秋風の道具、殊に面白し。もはや人に知られてもかまはぬと思ふやうなる舉動は、最早私を厭ひて遠ざくる心の秋風なりといふやうなる意をも、自からもたせて、其の情けなき心を恨む意の、いかにも強く面白く想像せらるるものあればなり。

○題しらず

實方

あけがたき二見の浦による波の袖のみぬれておきつ島人

○あけがたき二見の浦による波の。袖のみぬれてを言ひ出す序なり。序なれど、あけがたきは一首の上にかかせたる意味あり。即ち、夜の明け難く永き意をかかせたり。あひ見し夜のなごりに、あはずして寝る夜は、いね難くして殊に夜を長く思ふ意を、かかせたるなり。○袖のみ濡れて。涙に袖を濡らしてばかりの意。○おきつ島人。いねずに起きあかすわが身といふ事を、浦の縁にてさへり。

○一首の意は、あはねば殊更に永くもおぼゆる夜を、私は泣いてばかり、寐ずに起きあかして居るといふ事にて、察し給はれの餘情あり。あけがたきの意匠は面白けれど、おきつ島人といへるあたりは、細工のあと、いかにも目につき、且つ、調もつまりて、面白からずといふべし。

○おなじく

伊勢

逢ふ事のあけぬ夜ながら明けぬれば我れこそ歸へれ心やはゆく

○逢ふ事のあけぬ夜ながら。逢うて語らふ事の未だ決着せざる夜のまゝにてといふ事なり。○我れこそ歸へれ。「夜のあけて歸へらねばならぬ故に、我が身は歸入りてゆく。されど」といふ意なり。○心やはゆく。心はゆかずといふ事にて、歸入るの縁にて言へり。心のゆくとは思ふ事の成りて、快よく思ふを言ふ。○一首の意は、逢うて語たらふ事の、未だ決着せざるまゝに、夜は明けたり。今はかへらねばならぬ故に、我れは歸へれども、心は晴れず心地よからずといふ事にて、まだしかとしての心中をも得ずして歸入る心のなげきなり。下の句の意匠面白し。我れは歸へれど心はゆかざる文が、此の歌の命なるべし。

○九月十日あまりに、夜更けて、和泉式部が門をたゝかせ侍りけるに、聞きつけざりければ、あしたに遣はしける。

太宰帥敦道親王

秋の夜の有り明けの月の入るまでにやすらひかねて歸へりにしかな

○敦道親王 冷泉院第三の皇子なり。○秋の夜の。秋の長き夜のの意に見るべし。秋の夜は長しといひならはせば、自から長き意は其の中にさかせたるなり。○下の句の上に「戸や明くると待ちたらずみたるが」といふ如き詞を略したり。○やすらひかねて。戸や明くると、幾度か歸へりゆくを躊躇し佇立み居りたれど、あまりの事に待ち佇み難くなりてといふ意なり。

○一首の意は、秋の長い夜の、有り明けの月が隠るるまでも、久しい間、若しや戸を開くるかと待ち佇みたるが、遂ひに堪へかねて歸へりたるよといふ事にて、意は明かなり。久しく佇みたるにはあらねど、しか言ひなしたるところが、詩を得たるところなり。

○題しらず

道信朝臣

心にもあらぬわが身の行きかへり道の空にて消えぬべきかな

○心にもあらぬわが身。我れは我が心にもあらすしてといふ事にて、我が心にはあらすとは、「あはんと行くも、我が心よりにあらず。あはずにと歸へることも、我が心にあらず」となり。戀ひしさに我れともなく誘はれて出てつ、また逢ふ人にあらずと知るより、あひたき心の逡巡して歸へるさすなり。○ゆきかへり。行きたり來たりのみしての意に見るべし。○道の空にて。中途にての意。○消えぬべきかな。命は消えさうであるよとなり。死にさうなりとの意なり。

○一首の意は、我れは、我が心よりにあらずる行き歸りをのみして、中途にて命は消えさうであるといふ事にて、戀ひしさに誘はれて、そとろに尋ねんとしては行き、またとても逢はれじと思ふに、逡巡しては歸へる間に、戀ひ焦るゝ命は死にさうであるよとの嘆息なり。上の句の意匠、極めて面白し。抄には、「行きてもあひ見ねば、心には行かんとも思はねど」と言うて、心にもあらぬとの詞を、尋ね行く方にのみつけて見られたれど、それにては淺はかなり。行くと歸へるとの兩方につけて、見るべきなり。とても逢ふ人にはあらずと思ふ故に、尋ね行かんとは思はねど、戀ひしさに誘はれて我れともなくそとろに尋ね行かんとするより、行くを心にもあらぬと言ひ、また、あひたしとは是非に思へど、さて逢ふ人にはあらずと思ふより、自から心のひけて歸へるより、歸へるを心にもあらずと言へるなり。此の意匠が實に苦心せられたる趣向なるべし。誠に面白き情景を捉へ來たりたりといふべし。單に行く方にのみつけて見ては、此の歌の趣向は平凡にて、詩趣は全く没し去るにあらずや。面白き情景の中に、切なる情を捉へ來たりて、誠に可憐に哀れなる歌を得たりと言ふべし。

○近江の更衣に給はせける 延喜御歌

はかなくも明けにけるかな朝露のおきての後ぞ消えまさりける

○明けにけるかな。人に逢ひたる夜の明けたる嘆息なり。○朝露の。おきての序なり。○おきての後。起き出でての後にて、夜の全く明けたる意に見るべし。露の縁にて言へり。○消えまさりける。別るる時にも、惜しくて、死にさうに思ひたるが、それにも増して、餘計に死にさうに戀ひしく思ふよとなり。

○一首の意は、誠にはかなくも夜の明けたる事なりしよ。別るる時も誠に惜しくて、死にさうな心もちてあつたが、かく夜の全くあけての後は、その時にもまして戀ひしさに死にさうな心もちのするよとなり、時の立つまゝに益々戀ひしさの増さる意なり。

○御返し

更衣源周子

朝露のおきつる空もおもほえず消えかへりつる心まどひに

○朝露のおきつる空。前の御歌の詞を受けたり。夜の明けはなれたるをも、我れはそれと覺えずといふなり。○消えかへりつる。消え入りたるに全じ。即ち、死に入りさうに思ふ心もちなり。消えかへるとは消ゆを一層に甚しく言ふ詞なり。古今集戀歌友則「わが宿の菊の垣根に置く霜の消えかへりてぞ戀ひしかりける」、後撰集秋歌深養父「消えかへり物思ふ秋の衣こそ涙の川の紅葉なりけれ」、拾遺集戀歌「あな戀ひしはつかに人をみづの泡の消えかへるとも知らせてしがな」など、皆全じ。消えかへるなどいふかへるも、同じ詞づかひなり。○心まどひに。心の亂れ故になり。

○一首の意は、夜あけはなれては、更に消えさうに思ふと仰せらるるが、私はお別れの惜しさに、死に入りさうな心もちしてまでに、思ひ亂れたれば、夜のあけはなれたるも何にも、心に覺えず居りますとなり。更衣を思ふ御歌の深きみ心よりも、なほ一層深くわが思ふ心をあらはして、返へしまつれるなり。返歌として、よくすなほに詠まれたりと言ふべし。

○題しらず

圓融院御歌

おき添ふる露やいかなる露ならむ今は消えねと思ふわが身に

○おき添ふる露。思ひ侘びてこぼるる泪を、露と見立てて、一首の趣向を立てたるなり。○いかなる露。何んとした露なるよわからぬと、幼くあやしみたる心なり。○今は消えねと思ふ云々。あまりに思ひ侘びて、今は死んでしまへと思ふ我が身といふ意を、消えねと思ふと云みて、一首の趣向を立てたるなり。

○一首の意は、あまりに思ひ侘びて、今はいつぞ消えてしまへと思ふ我が身に、また更に露が置き添ふるが、何んとした露ぞ、わからぬといふ事にて、いつぞ死んでしまへ、とすれば、此のまざる思ひの苦しきはなしとまで思ふ身に、泪のこぼるるさまを、其の消えねと思ふ身といふ詞に、露の意をもたてせ、さて、何んたる露ぞと、泪をあやしむやうにして、一首の趣向とせるなり。

○おなじく

謙徳公

思ひ出でて今は消ぬべしよもすがらあきうかりつるさくの上の露

○今は消ぬべし。今は死にさうである、例の露の縁にて言へる詞。○あきうかりつる。起きづらかつたといふ事にて、露に縁をもたせたり。起きづらいつとは、起き出でて別れんことつらさを言ふなり。さて、此の起きづらかりし意は、唯だに別れを思ひての起きづらさなりとも思はれず。思ひ出でてと言ひ、よもすがらと言へる詞より見れば、相逢ひたれど、終夜心のとげざる事ありて、別れのつらかりし意なる如し。○さくの上の露。其の朝の意をさかせたる詞なるべし。消ゆ、よもすがら、あきうかりけるなどと併せて、一首の結構までに、特に用ひたる細工なるべし。菊といひ露といふは、歌意に關係なしとほほゆ。

○一首の意は、終夜心のとげざる事ありて、別れづらかりし其の朝のことを思ひ出して、今は死にさうに思ふといふなるべし。四の句の意少しく疑ひあれど、暫らく斯く説きあかんとす。彼の古今集の「音にのみさく白露夜はあき遊は思ひにあへず消ぬべし」の詞を取りて、作り立てたるものらしく、菊の上の露も、それよりの細工と思はるれど、餘りに投げ込みたるやうにて、面白からざるのみならず、すへて詞の細工のみにて作りあはせたる如き歌にて、此の時代の歌の弊を示したるものとほほゆ。

○おなじく

清 慎 公

りば玉の夜の衣をたちながらかへるものとは今ぞ知りぬる

○うば玉の夜の衣を。立ちながらの序なり。衣を裁つと立つとをかけて、序とせるなり。序なれども、一首の上にかかせたる趣味はあり。男女逢ひたる意をさかせたるなり。夜の衣は爰の事なれば、園中の意をさかせたる如し。○立ちながら。立つたるまゝにてといふ事にて、心とけてのちぎりなくして只に歸へる意を、強く言ひたるものなるべし。○かへるものとは。別れてかへる筈のものとは、今了解したるとなり。

○一首の意は、男女相逢ふ事は、斯く疎き程のさまにて別れて歸へる筈のものと、今日始めて了解したりといふ事なり。さる筈のものにあらざるを、さる筈のものと了解したりと、曲げて言ひて、恨みの意を示したるなり。其の意匠が詩となれるところにて、一首綺麗に強く言ひ得たるを見るべし。

○夏の夜女の許にまかりて侍りけるに、人しづまる程、夜
いたく更けて、あひて侍りければ、よめる。

藤原清正

短夜の残り少く更け行けばかねてももの憂き曉のぞら

○人しづまる程。人の皆寐しづまりたる頃の意なり。○短夜。夏の夜なれば言へり。○かねても

の憂き。逢はぬ前かから既に、別るるに間のなき事を知れば、其の曉をのみつらく思ふとの意なり。
 ○一首の意は、短き夏の夜の、既に残り少く更けたる故に、今から斯く逢ひても、別れん曉までに最早間もなしと思ひ知れば、今から其の別れん曉のみが、つらく思はるといふ事にて、逢うても慰めらるる方なく恨めしき意をあまりたり。いよく別るべき曉となりてこそ、つらく思ふなる事を、かねてつらく思ふといひて、遅く僅に逢ひたるを恨む意をさかせたるにて、そこが一首の歌となれる意匠のあるところなり。

○女みこに通ひ初めて、あしたに遣はしける。

大納言清蔭

あくと言へばしづ心なき春の夜の夢とや君を夜のみは見む

○女みこ。皇女の事なり。抄に前齊院詔子、延喜廿一年賀茂より退きて清蔭に配すと、大和物語勅物を引きて注せられたり。此の歌の事は、大和物語に出てたり。就いて見るべし。
 ○あくと言へば。あくとは、夜の明けけるを言へるにて、「春の夜は短かくて、逢ふ程もなく明くると言へばの意に見るべし。○しづ心なき。静かなる心なき、即ち、落ちつかざる意なり。○夢とや君を。夢とは夢の如くの意。○夜のみは見む。斯く夜ばかり君を見む事かナア」と、夢とやのやを、末にさかせて見るべし。君を見むとは、君に逢はんと全し。
 ○一首の意は、春の夜は短かくて、逢ふ程もなく明くといふ故に、落ちつかざる心もあらず。宛

がら夢の如し。斯くて、夜ばかり君に夢の如く逢ふ事かナアといふ事にて、常に逢ひ見たき意をあまりたり。一三四の句までは、逢ふ時のうれしさに亂るる心にて、五の句は逢ふ夜のみは他かぬ心なり。複雑なる心を言ひまはし得たるところを見るべく、また、春の夜の夢とや君をの意匠も、面白しといふべし。唯だ夜を重ねたるところ、今一工夫ありなき心地す。

○彌生の頃終夜物語りして歸へり侍りける人の今朝は
いとど物思はしきよし申しつかはしたりけるに。

和泉式部

今朝はしもなげきもすらむいたづらに春の夜一夜夢をだに見て

○今朝はしも。今朝は、實に、ナアにて、今朝のはは、今朝を特に取り出して示したる詞、しもは感動の詞なり。○なげきもすらむ。後悔の嘆をして居る事ならむの意。○三の句の上に、昨夜はの詞をあまり見るべし。○春の夜一夜。春の良夜を終夜の意。○夢をだに見て。夢ほどのちぎりばかりもしたまはて、情愛なく歸へり給ひたればの意なり。唯だ物語りのみして歸へりたるより、戯れて言へるなるべし。

○一首の意は、昨夜は、春の良夜を終夜、單に物語りばかりして歸られて、夢ほどのちぎりばかりもし給はて、伴れなくてのみ、いたづらに歸へられたれば、ホニ今朝は後悔の嘆きをして居ら

るる事てせうといふ事にて、今朝はいとど戀しく思はると言うて來たりたるを、わざと戯れに後悔のもの思ひに取りなして、斯く返へしやれるなり。春の夜一夜夢をだに見ての詞は、何等の才情ぞ。自から逆想の面白きものありて、限りなく人を動かすの詞なりや。すべて、作者の非凡なる才藻を示して、ゆかしき歌なりや。

○題しらず

赤染衛門

心からしばしとつゝ、む物からに鳴のはねかきつらき今朝かな

○心から。我れ自身の心からの意。○しばしとつゝ。暫時の間は人に知られぬやうにと瞞し
み憚るなれどもといふ事にて、瞞しみ憚りて逢はずに居るなれども意をさかせたり。○鳴のは
ねがき。鳴が鶯にて羽を掻く事にて、鳴は殊更に羽根をかく鳥なりといふ。されば、古今集の
歌にも「曉の鳴のはねがき百羽がき君が來ぬ夜は我れぞ數かく」など言うて、茂き事の比喩に用ひ
たり。こゝもそれにて、茂き嘆きの暗喩に用ひたり。抄には、逢はぬ夜の數をかぞへる意にと
られたれど、無理なり。

○一首の意は、しばし人に知られぬやうにと瞞み憚る自分の心から、逢はずに居るなれども、心
には戀しき逢ひたさのやむ時なく、今朝は誠に深く思ひ歎かれてつらいといふ事にて、憚りてあは
ずに居るなれど、さすがに戀ひしさは、今朝いよ／＼深く思ひ嘆かるるさまなり。赤染衛門集に
「かくからに暫しとつゝむ物ながら鳴のはがきのつらき今朝かな」といふあり。それを訂正した

る歌とおほゆ。詞も言ひまはしも、いかに此の訂正の方の品位をあげたるかを味ひて、歌には詞
いひまはしの大切なるをささるべし。

○忍びたる所より歸へりて、朝たにつかはしける。

九條入道右大臣

佗びつつも君が心にかなふとて今朝も袂をほしぞわづらふ

○わびつつも。斯くあひ語らずにすぐる事は、自分は嘆き悶ながらもといふ意に見るべし。
自分は常に逢ひたき意なり。○君が心にかなふとて。君が心に相合ふやうにとていふ事にて、君が
心に反きて君の機嫌を破らぬやうにするとの意なり。常に逢ふを許容さぬ程の君が薄き情愛、
それに反きて強ひて常に逢はんと思せば、遂ひには棄てられんと恐るる心なり。○今朝も。あひか
たらはずに歸へりてといふ詞を、今朝もの上におきて見るべし。○袂をほしぞわづらふ。戀ひしさ
恨めしさにいたく泣くさまなり。

○一首の意は、自分は常に語らひたし。斯くあひかはらずにすぐる事は、自分は誠に嘆き悶
えて居る。されど、君が心に反きて、君の機嫌をそんじて、棄てらるゝ事はかりはないやうにと
念じて、またも徒らに空しく歸り來たりて、今朝も戀ひしさ恨めしさの涙にくれて居りますといふ
事なり。君が心にかなふとての情、哀れにやさしく可憐なりといふべし。

○小八條の御息所に遣はしける 亭子院御歌

手枕にかせる袂の露けさは明けぬとつぐる涙なりけり

○手枕にかせる袂。君が手枕にさせたる我が袂の意。○露けさは。手枕にせる袂の、平にぬれたるさまなり。○明けぬとつぐる。「夜が明けたり、最早お歸りにならずばと、君の告ぐる故」の意に見るべし。

○一首の意は、君が手枕にさせたる我が袂の、露けく濡るるは、夜が明けたり最早お歸へりにならずばと、君の告げらるるが佗びしよ我が涙の爲めであるツイといふことにて、別れのをしき心より、夜の明けたりお歸へり遊ばせと言はるるを、恨めしく思ひたる意なり。恨むべからざる事を恨む。そこに熱情のあるところにて、詩情と成れるところなり。小八條の御息所とは、民部卿源昇の女なり。

○題しらず

藤原惟成

しばしまてまだ夜は深し長月のあり明けの月は人まどふなり

○しばし待て。もう少しゆつくりして居られよといふ意にて、夜が明けたりとて起き別れんと急ぐ人を引きとめたる意なり。○まだ夜は深し。まだ夜明けには間のありといふ事。○長月の有り明けの月は。此の次に、「光りの餘りに明かなる故に」といふ意を、入れて見るべし。其の意にて言へる長月の有り明け月なり。○人まどふなり。夜の明けたるか、人が思ひまよふといふ事なり。

○一首の意は、もう少しゆつくりして居られよ、まだ夜の明ける迄には、間のあり。ホソに、九月の有明の月は、光りのあまりに明い故に、人が夜の明けたるやうに思ひ迷ふよといふ事にて、上の二句は、急ぎて起き別れんとする人を引きとむる詞にて、下の三句は、引きとめながら、月を見出でて、明るさをかこちたる嘆息なり。風情いふばかりなく思ひ忍ばるる歌なりや。

○前栽の露おきたるを、などか見ずなりにしと申しける
女に、
實方朝臣

おきて見ば袖のみ濡れていとどしく草葉の玉の數やまさらむ
○端書の意は、前栽に露おきたる景色の美しさを、なに故に遅くまで起きずして、見ずにしまつたるごと、女の言ひければ、かく答へたりとなり。○おきて見ば。起き出でて、それを見たらばといふ事。前栽の露の景色を見ざりしぞとの女の問ひに對して言へるなり。○袖のみ濡れて。別れのをしさに、泪のちびたしくこぼるる意なり。○いとどしく。いよ／＼ますますの意にて、さらぬだに茂きに、我が泪の爲めに、更に露の置き添ふべしとの意にて、言へり。○草葉の玉の數やまさらむ。「草葉の露の餘計に茂くなる事ならむと思ひたる故に」の意なり。下に「それがいとほしさに、起きて見ざりしなり」との意をあましたり。

○一首の意は、私が起きて、それを見たらば、私はあなたに別るる事の惜しくて、おびたしく泪をこぼして居れば、さらぬだに茂き草葉の露の、我が泪の爲めに一層置きまさる事ならむと思ふ

て、それがいとほしさに、早く起きて見ざりしなりといふ事にて、實は別る事の惜しくて起き出でがたかりし意を、其の女の詞に對して、我が泪に、草葉の露を重らせては、いとほしくしてと、戯れ答へて、別れをしむ我が意をまさかせるなり。涙に草葉の露のまざるとはなし。それを、斯くいひたるところが、面白き詩情となりたるところなり。

○二條院の御時、曉歸へりなんとする戀ひといふことを
二條院讃岐

明けぬれどまだきぬぐに成りやらて人の袖をも濡らしつるかな

○明けぬれど。夜ははや明けたれどなり。最早起き別れねばならぬ時なるにの意にて言へり。
○まだきぬぐになりやらて。まだ起き別るを得ずしてといふ事。きぬぐとは、夫婦の朝の別れを言ふ。昔は、夫婦全棲せず。夕にあひ朝に別るるを、ならひとせり。されば、夕べには衣を一つにあつめて共寝したるを、朝には別々に着て離るる故に、衣々になると言ひて、朝の別れをたとへて言ふやうになれるなり。○人の袖をも。共寝したる人の袖までとの意。此の句の上に「我が別れかねる涙の爲めに」といふやうなる詞を、あきて見るべし。
○一首の意は、夜は明けて、最早起き別れねばならぬ時になりたれど、なほ起き別るるを得ずし

て、我が別れかねる泪に、共寝したる人の袖までを濡らしたワイといふ事にて、夜明けたれど起き別れかねて泣きたる意なり。ならひなればとて、別るるはをしき夫婦が朝の情、さもあるべしと、哀れに思ひやらるる風情の歌なりや。

○題しらず

西行

面影の忘らるまじきわかれかななごりを人の月にとめて

○忘らるまじき。忘らるべからざるに同じ。忘るる事は出来まいといふ意なり。○なごりを人の。人がなごりをと轉じて見るべし。○月にとめて。月にとめて行きたるなればといふやうに見るべし。なごりを月にとむとは、月夜の別れなれば、此れより後、月見る度に、なつかしく思ひ出ださるべき意にて、言へるなり。
○一首の意は、此の月下の別れ、人がなごりを月にとめて行き別れたるなれば、別れて後も、月は夜なく見るべければ、其の月には、いつも思ひ出だされて、此の別れの面影は忘れまいナアといふ事にて、月夜別れて歸へる人を送り出でて、つくぐとなごりをしく見送りて、さぞや忘れず忍ばるるならむと、うちなげきたるさまなるべし。風情限りなく浮動してまほゆ。本居翁は「人のといへる詞いかにぞや聞こゆ。袖のとあらば、難なく、心も深かるべし。其の故は、袖の月といへば、泪にうつれる月なるが、その月をとめてといへば、いつまでも泪のかわかぬ意もこもればなり。」と難ぜられたれど、それこそは難ずべき批評なれや。四の句は、人のなごりをとい

ふぞ、普通の詞づかひとすべしなれど、それにては、調も弱く、また情も弱し。 どうしてもなごりをと、前に打ち出でて、これに情をこめ力をもたせ、調をも強からしむべきところなれば、かく轉装したるにて、誠によく其の場合に適ひたる自然の詞づかひなり。 また、これを袖のなどと訂正せば、一首の清新なる詩趣は全く没し去るべし。 袖の泪にうつる月などとしては、平凡の極ならずや。 平凡なる詩人ならば、それほど詩想にとどまるべし。 非凡なる西行をや。 なごりを月にとどめてといひたるが、彼れの苦心したるところにて、此の歌の清新なるを得たるところなり。 よくく味うて賞すべしといふべし。 此の集の戀歌の中の秀れたる一つなり。

○後朝の戀ひの心を

攝政太政大臣

又も來む秋をたのむの雁だにもなきてぞかへる春のあけぼの

○又も來む。 秋にはまた來むといふ事。 ○たのむ。 頼むに田の面をかけたなり。 戀詞なり。 秋を頼む田の面の雁といふ意に見るべし。 ○雁だにも。 雁でもの意なり。 『ましてや我れは』といふ餘情は、このだにの詞よりさかするなり。 一二の句の意は、今別れても、秋にはまた來るといふ頼みのある田の面の雁でもの意なり。 ○春のあけぼの。 曙の別れにはの意に見るべし。 五四句と句を轉じて見るべし。 ○後朝戀とは、さぬくの別れの戀ひなり。 ○一首の意は、今こゝに別れても、秋には又くるといふ頼みのある田の面の雁でも、春の曙の別れには、泣いて歸つて行くといふ事にて、ましてや、また何時來てあふといふ頼みもなく別れる

我が此の曙の別れは、悲しさはやる方もなしといふ餘情なり。 また何時あはんとの頼みもなきさぬきの別れの、悲しく侘びしき情なり。 春の曙の春の詞は、歸雁の上なれば、曙の別れに、春の曙と言へるにて、餘情の我が別れの上には、單に曙の別れとのみに見るべきなり。 だにもの一語に、深き餘情を自からさかせたる、言ひまはしもめてたく、一首の詞もすべて優美にして、美はしく、餘韻限りなき歌といふべし。

○女の許にまかりて、心地例ならず侍りければ、歸へりて遣はしける。 賀茂成助

誰れゆきて君につげまし道しばの露もろともに消えなましかば
○端書の意は、 女の許にまかりたるに、俄に病氣のまかりて、心地あしくおぼえたれば、歸り來たりて後に、此の歌を言ひやれるなりとなり。 ○誰れゆきて。 誰れが君の許に行きての意。 ○君につげまし。 我が死にたる事を、君に報らせん、報らす人はなからむの意なり。 此の一二句の下に、『さても君にも知られずして死ぬるなりしよ』との餘情あり。 また、此の一二句の上に、『人知れぬ二人の中なれば』といふ如き詞をあきて見るべし。 ○道しばの露もろ共に。 道のしば草の露と共にの意なり。 曉にかへりたるより、露を取り出でたるなり。 ○消えなましかば。 死にたらむにはの意。 三四五二二句と轉じて見るべし。

○一首の意は、道の芝草の露と共に消えて死んでしまつたならば、人知れぬ二人りの中、誰れが行

きて、我が死を君に報らせんか、知らずる人もなからむ。さすれば、君にも知られずして死ぬる事であつたりしといふ事にて、君にも知られずして死なば、いかに悲しかりしならむとの情愛をのべて、無事なりしを報らせたる歌なり。其の情愛をのべたるところに、詩となれるものあるなり。道芝の露と諸共に」といへる意匠、其の場合によく適應して、ちもしろきを得たり。

○女の許に物をだに言はんとてまがれりけるに、空しく
歸へりてあしたに、
左大將朝光

消えかへりあるか無きかのわが身かな恨みて歸へる道芝の露

○端書^{ハツキ}の意は、談話ばかりなりとせんと思つて、女の許に行きたるに、詞もかはす事出来ずして、空しく歸したれば、翌朝此の歌を遣はしけるとなり。○消えかへり。死に入る事を、露の縁にて言へり。物をだに言はて、空しく歸へしたる恨めしさ悲しさに、身は殆んど死に入る思ひするなり。○あるかなさか。消え入るを、更に詞をかへて、細に言ひ添へたるなり。○うらみてかへる。其の無情を恨みつゝ歸へるなり。○道芝の露。恨みて歸へる身といふ事を、恨みて歸へる道芝の露とたとへて、一首の趣向を立てたるなり。

○一首の意は、恨みて歸へる身は、殆んど死に入りて、有るか無きかの心地するといふ事にて、空しく歸へしたる無情の恨めしさ悲しさを訴へたるなり。此の道芝の露の如き修辭は、此の時代の一種の詩趣を添ふる技術なり。

○三條關白女御入内のあしたに遣はしける。

花山院御製

朝ぼらけ置きつる霜の消えかへり暮れまつほどの袖を見せばや

○端書^{ハツキ}の意は、三條關白の女が女御として入内せられたる翌朝に遣はされし歌なりとなり。○朝ぼらけ置きつる霜の。消えかへりを言ひ出だす序にして、此の朝ぼらけに起き別れしなる意を、一首の上にきかせたり。○暮れまつほどの。また逢ふ此の夕暮れを待つ間の意。○袖を見せばや。袖の涙を見せたいと思ふといふ事にて、いたく戀ひ侘びて泣いて居るとつくる心なり。○一首の意は、此の朝ぼらけに別れてよりは、死に入りさうな心地にて、またあはん此の夕ぐれを待つて居る間の此の袖の涙を見せたい事ぞ。それはく戀ひこがれて泣いて居るぞといふ事なり。それはく泣いて居るといふ意をさかせん爲めに、袖を見せばやと言ひたるところが、意匠のあるところなり。

○法性寺入道前關白太政大臣家歌合に、

藤原道經

庭に生ふる夕かげ草の下露や暮れを待つ間の泪なるらむ

○夕かげ草。朝顔の異名なりと、藻鹽草に見ゆ。後鳥羽院の御歌に「山里の夕影草の下露を袖

にかけつゝ訪ふ人ぞなき」萬葉集に「わが宿の夕影草の白露の消ぬがにもと思ほゆるかも」續千載集秋歌後久我太政大臣に「水無瀬山夕影草の下つゆや秋なく鹿の泪なるらむ」など見えたり。皆斯く茂き露にかけて用ひたり。此處もそれにて、上の句は茂き露のさまなり。抄には、夕草といふ意にて、草の名にあらずとの説を記されたれど、暫らく漢鹽草の説に従ふ。○暮れを待つ間の。再び逢ふ此の夕暮れを待つ間といふ意に見るべし。○泪なるらむ。戀ひ侘ぶる我が泪なるらむの意。

○一首の意は、庭に生えて居る夕影草の茂き下露は、君に逢ふ此の夕ぐれを待つ間の我が戀ひ泣く涙であらうといふ事にて、結梅、夕暮れを待ちて戀ひ侘ぶる泪は、夕影草の露の如く茂しと言ひて、待ち焦るる愛情を訴へたるなり。

○題しらず

小侍従

待つ宵に更けゆく鐘の聲きけばあかぬ別れのとりは物かは

○まつ宵に。今宵はと約したる人を待つて居る夜の意なり。○更けゆく鐘の聲。だん／＼と更けゆく鐘の聲をさく意にて、初夜の鐘、後夜の鐘とだん／＼更けゆく夜半の鐘聲をさく意なり。此の下に「其のつらさは」といふ如き詞を入れて見るべし。○あかぬ別れのとり。あかぬ別れを促す鳥の聲の意に見るべし。情まだ盡くしかぬる程に、別れを促す鳥の聲といふ事なり。○ものは。物の數にもあらずとなり。

○一首の意は、今宵はと約したる人を待つて夜、来るか来るかと待つて居つて、初夜後夜とだんだん更けゆく鐘聲をさくつらさに比べては、情まだ盡くしかぬる程に別れを促す鳥の聲などは、物の數にあらずといふ事にて、あかぬ別れを促す鳥の聲は、つらさのものにも歌はれ、また自分もつらく思ふたが、併し、人を待つて夜の徒らに初夜後夜とだん／＼更けゆく鐘聲をさく時のつらさは、更に深しというて、約して到らざるつらさを恨みたる歌なり。あかぬ別れを促す鳥、いかでつらからぬかは。されど、徒らに待ちあかす夜半の鐘聲は、人のつらさも添へて、げにぞ更につらからむ。詩想げにと人情をあらはしてめでたし。詞もまたすなほに且つ道勁に言ひまはし得て、賦にめてたしといふべし。作者、此の歌のめでたさに、待つ宵の侍従とよびはやされしといふ。此の集戀歌中の、また秀れたる一つに數ふべし。

○おなじく

藤原知家

これもまたながき別れになりやせむ暮れを待つべき命ならねば
○これもまた。今朝の此の別れがやがてまたの意。○ながき別れ。死別を言ふ。○暮れを待つべき命ならねば。暮れまで生きる事の出来やうとは思はぬ命なればといふ事にて、今朝の別れの餘り悲しきより、これでは悲しさに命もやがて絶えむと思ふ心より、言へるなり。人生の無常などの普通の意にて言へるにはあらず。されば、今朝の別れの此の餘りの悲しさにては、暮れまで生きん命とも思はれぬ故にといふ如き心になして見るべし。

○一首の意は、暮れまで生きて居らば、また逢はれん筈なれど、今朝の別れの餘り悲しければ、此の悲しさに、命もやがて絶ゆべければ、暮れまで生きん事は出来まじと思ふ故に、これがまた死別にならうかッアアといふ事にて、朝の別れに痛く悲しむ意なり。痛く悲しむとの詞を言はずして、深き悲しみをあらはしたるところ、面白し。死別になるかも知れぬとのころは、哀れにも切なる情と言ふべし。暮れをまつべき命にあらずの意も、人生無常などの意よりにあらずして、一かど新しきところありて、面白し。唯だ少しく難すべきは、これもまたといふ詞なり。これもといふ詞は、普通には他にも同様の事のある時に用ふるものにて、單にこれがまたといふ意には、すなほに取り難ければなり。

○おなじく

西行

有り明けは思ひ出であれや横雲のただよはれつるしののめの空

○有り明けは。有り明けの空にはの意なり。○思ひ出であれや。思ひ出であるツイなり。思ひ出でとは、思ひ出でて、心の慰めとなる事をいふ。單に思ひ出づるといふのみの意にはあらず。本居翁も石原主も、皆誤解せられたり。悲しき中にもさすがに思ひ出でて心の慰めらるるものある意なり。○横雲の。横雲の如くの意。横雲とは有り明けの空に横にたなびきかゝる雲をいふなり。○たゞよはれつる。名残りをしくて歸へりためらひたる意を、雲の縁にて言へり。○しののめの空。其のしののめの空にてといふ意に見るべし。

○一首の意は、有り明けの空は、人に別れし其の曉、たゞよふ横雲のやうに、別れかねて歸へりためらひし其の空なれば、有り明けの空には、悲しき中にも、さすがに思ひ出でて、心の慰めらるるものがあるツイといふ事にて、久しく逢はずにのみなりて、悲しくて送れる別後の旦暮にも、有り明けの空には、毎時、其の別れし折りの有機が思ひ浮ばれて、さすがになつかしき思ひ出でて慰めらるる方もある意なり。石原主は「有り明けの空にたゞよふ雲のやうに別れかねてたゞよひし折りの事は、有り明けの月見る度に思ひ出づるとなり」と説かれたれど、それにては説を足らじ。單に思ひ出づるのみにては、其の想平凡なり、其の風情乏し。悲しき中にも、さすがに思ひ出でて慰めらるる意に見ざるべからず。斯く言はば、別れし折りの空に、心の慰めらるる思ひ出でては、をかしと難する人もあらむか。されど、よく人情を察せられて見よ。別れし其の空に對しては、哀情を動かすも常なるべし。されど、單に哀情の動くのみにはあらず。また、其の折りの有機や、其の人の面影や、別れの詞や、何にやかを思ひ出して、何となく心の慰みとなるやうの事もあつるものなり。人情儘にかゝる場合のものあるをおぼゆ。單に思ひ出づるのみにても、哀情を感ずるのみにても、其の情平凡なり淺薄なり。悲しき中にも何んとなう心の慰めらるる思ひ出でて、それが微妙なる人情なり。西行が此の歌は、其の微妙なる情を寫し來たれるなり。其處に、此の歌の情面白く、風情限りなく哀れなるものあるなり。微妙なる人情を捉へ來たりて、誠にめでたき抒情詩とこそ言ふべけれ。

○おなじく

清原元輔

大井川るせきの水のわくらばに今日はたのめし暮れにやはあらぬ

○大井川るせきの水の。わくらばにの序にて、一首の意味に關係なし。わくらばとは、たまさかに或は稀れにといふ事なり。堰せきの水の湧くと、わくらばにのわくとの同音にかけたる序なり。わくらばにの例を、一つ二つあげんか。萬葉九の卷に「人となる事は難きを、わくらばになれるわが身は死にも生きも君がまゝにと思ひつゝ云々」、古今集雜歌行平「わくらばにとふ人あらば須磨の浦もしほたれつゝわぶと答へよ」など、皆たまさかにの意なり。○たのめし暮れ。今宵は逢はんと約してあてにさせたる暮れなりとの意なり。暮れにやはあらぬとは、暮れにはあらずや暮れなりといふ事なり。

○一首の意は、たまさかに、今日は逢はんとあてにさせたる此の暮れなりといふ事にて、さるに逢はずとは、何んといふ無情ぞといふ餘情あり。逢はんと約したる暮れ、しかもたまさかに逢ふなるに、人の約に反きてあはざるを、恨みたる意なり。理屈立てに強く言ひたるところ、其の無情のよく／＼なるに應じて、よしと言ふべし。

○今日と契りける人のあるかととひ侍りければ、

讀人知らず

夕ぐれに命かけたるかげるふのありやあらずや問ふもはかなし
○端書の意は、今日逢ふと約束したる人の來て、御在宅にてかと問ひければ、かく答へたる歌なりとなり。○夕ぐれに。此の逢はんと夕ぐれの意。○命かけたる。我が命を置いて居るといふ事にて、此の夕ぐれに我が命を置いて居るとは、此の夕ぐれの如何に、命の有無をまかせ居る意なり。○かげらふ。はかなき我が身の比喩なり。蛭蟬といふ虫は、朝に生きて夕べに死す物といへば、此の夕ぐれに命をまかせて居る我が身に似たるより、たとへたるなり。此の夕ぐれに命をまかせて居る蛭蟬の此の身といふ様に見るべし。○ありやあらずや。居るや居らざるやと、問ひを受けたる詞なり。○問ふもはかなし。問はるる事も既にはかなしとなり。此の夕ぐれの君の如何に、命をまかせて居る身なれば、君來たらば命はあらん、來たまはずは命はなき身なり。來て先づ早く我が命をあらしむべきに、それを居るか居らぬかなどと問はるるは、はかなしとの心なり。

○一首の意は、此の逢はんと夕ぐれに、我が命をまかせて居る蛭蟬の此の身である。君に逢はば我が命はあらん、逢はずは我が命は其處に空しくなるべきなり。されば、先づ早く逢ひて、我が命あらしむべきなるに、居るか居らぬかなどと問はるるは、はかなしといふ事にて、これを命にして待つて居るものを、今更にありやと問はるるなどは、人の心も知らずと恨みたるやうの心なり。蛭蟬に我がはかなき身をたとへたるを骨として、ゆふぐれに命かけたりといひて、もとより切に待つ意をあらはし、「ありやなしやと問ふもはかなし」と言うて、人の心も知らずと恨みたる意

をあらはして、作れるなり。意匠は巧みなるものといふべし。

○西行法師人々に百首歌よませ侍りけるに、

定家

あぢきなくつらき嵐の聲も愛しなど夕ぐれに待ちならひけむ

○あぢきなく。わけもなくといふに同じ。○つらき嵐。つらきものと定まりたる嵐といふ事に、つらきものと定まりたれば、別につらしと取立てて最早聞くべきものにもあらざる意にて、言へり。「つらきものと定まりたれば、つらきはあたりまへのものとして聞きすつべき嵐」といふやうなる意にして、見るべし。○愛し。其のあたりまへと聞くべき嵐の聲を、わけもなくつらく思ふとなり。此の三の句の次に、「それも人を待つからである」といふ如き詞を省きたり。○など夕ぐれにまちならひけん。何故に夕ぐれに人を待つを我が習慣となしたる事ならんとなり。

○一首の意は、つらき物と定まりたる嵐、其のつらき意は、あたりまへの事と聞き棄つべき嵐の聲までが、わけもなく身にしみてつらく思はるる。これも人を待つて居るからである。何故に夕ぐれに人を待つ事を、我れは習慣になしたる事ならむといふ事にて、人を待ち焦れて、嵐の聲も殊につらく、いとど身にしむより、夕ぐれに人を待つてくせのなくばと、幼く思ひよりたる意なり。本居翁は「つらき嵐と言つて、又愛しとは、わづらはしいひびきなり」と難じ、石原主も「此の難は言はれたり。此の病ひなくば、いかにめでたき歌ならん」と賛成せられたれど、また例によ

りて、目のつけ方淺し。單に嵐のつらく思はるといふに止まらば、誠に重複したりと嫌ふべし。されど、此のつらき嵐の愛しといへるは、さる平凡なる普通なる意にはあらざるべし。つらきはあたりまへの嵐が、あたりまへの事と聞き棄てられずして、殊更に耳につきて、つらくおぼゆる意なり。さればこそ、上に「わけもなく」と言へるなれ。此の時代の歌、しかも定家の歌、さる普通なる平凡なる淺薄なる意を以て、見るべきにあらず。成るべく一語にも多くの意味をこめて詠むが、此の時代の得意とするところなるをや。

○戀ひの歌とて

太上天皇

たのめずば人をまつちの山なりと寐なましものをいざよひの月

○たのめずば。今宵は來たと人のあてにさせずばの意。○人をまつちの山なりとも。人を待つ身なりともといふ事を、待乳山にかけて洒落れたり。人を待つ身なりとは、常に毎夜人に逢ひたしと毎夜待ちこがれて居る身なりとの意なり。待乳山は末の月と共に、一首の結構上にまで用ひたる洒落にて、歌の實意には關係なし。三句の次に「今宵はあてにせずして」といふ如き意を、入れて見るべし。○寐なましものを。早くねたらうものなるにの意。○いざよひの月。單にためらひたりといふ意なり。それを、月の縁にて、いざよひと言つて、いざよひの月と洒落れたり。ためらひたりとは久しく寐る事を見合せたる意なり。

○一首の意は、今宵は來たとあてにさせずば、たとへ常に人を待ち焦れて居る身なりとも、今

宵とはあてにせずして、早く寐たりしものならんに、今宵來ると言ひたる爲めに、久しく寐ることを見合はせたりといふ事にて、さるに人はつひに來たらず、待ちぼうけしたりとの餘情なり。待乳山いよよひの月、此の時代には、往々見ゆる一首の結構上の洒落にて、此の洒落が、此の歌の生命なり。

○水無瀬にて戀十五首歌合に、夕戀といへる心を、
攝政太政大臣

何故と思ひも入れぬ夕べだに待ちいでしものを山の端の月

○思ひも入れぬ。 思ひ込みたる事もなかりし夕べの意なり。○待ち出でしものを。 山の端の月は待ち出でしものなるにと、轉じて見るべし。 本居翁曰はく、「待ち出でしとは、此の歌にては、わざと月を待ち出でたるにはあらず。もの思ひてながめをする程に月の出でたるを言ふ」と其の通りなり。

○一首の意は、何故とさして思ひ込みたる事もなかりし夕べでも、自から月の出づる頃までながめはせしものなるに、まして此の思ひ込みたる戀ひの此の頃は、ながめをのみして、山の端の月の出づるを見ぬ夜はなしといふ事にて、ましてより以下の意は、夕べだにのだにの詞を以て、餘情にきかせたるなり。

○寄風戀

宮内卿

きくやいかにうはの空なる風だにもまつにおとする習ひありとは

○きくやいかに。 お聞き及びになつてか、どうですかと問ひたる詞なり。 最後に置きて見るべし。○うはの空なる風だにも。 うはの空なるとは、今日俗にも言ふ言にて、うかくと浮きたる心、うはきな心を言ふなり。 大空を吹く風なれば、かくうはき心のものに取り立て、さて、人の浮薄なるをとかむる言外の情をひかするの詞とせり。○まつにおとする。 まつとさへ言へば訪づるといふ事にて、松の名を待つに寄せて、まつとさへ言へばとさかせたるなり。○習ひありとは。 習ひありといふ事はの意なり。

○一首の意は、空を吹く浮氣な風でも、まつとさへ言へば、訪づるるなりといふ事は、あなたはお聞き及びになつてかどうかといふ事にて、結極、待つて居るに訪れざる人の浮薄をなじりたる意なり。 本居翁は、きくやいかにの詞は少しく言ひすごして聞ゆると難せられたれど、己れは其の強きところが、此の歌に面白しとこそ思ふなれ。 石原主が「意の切なるをむねとすれば、いかにく」と重かねても言はまほしき所なり」と言はれたるぞ、實によき。 或人は、きくや君と言はばよからむ」と言ひたるよしなるが、さ言うては、いかにも平凡に且つ弱さいひ方にあらずや。 石原主がこれを論じて「君としても聞こゆれど、常の事なり、いかにと言うてもよろしきに、いかにと言はまじ」と言はれたるも、なほ弱し。 こゝは、必ずいかにと言はてはあるべからざる所なり。

しからざれば、發表の強きを得ざればなり。大空の風にうはき心や、まづに訪づるといふ心を有たすが、既に切情の狂せるところなり。此の歌は、あまりの伴れなき浮薄に、思ひあまりて、なじりやりたる場合なれば、さくやいかにと、理屈だてにあくまでも強くうち出てたるが、其の意に應じて、自然なる遒勁なる發表なりと言はざるべからず。さる恐かなる目を以て、此の名歌をよとせむとするをよとせば、我れ地下の宮内卿の爲めに、否歌道の爲めに、あくまでも辨せざる能はず。

○題しらず

西行

人は来て風のけしきも更けぬるにあはれに雁のおとづれてゆく

○人は来て。今宵はと待つ人は来たらずしての意。○風のけしきも更けぬる。風聲露色いよよもの侘びしく夜の更け来たれるさまなり。○あはれに云々。戀しく身にしむ聲にて雁のなきすきたるさまなり。

○一首の意は、今宵はと待つ人は来たらずして、風聲露色、いよよもの侘びしく、夜は更け来たりて、折りから悲しく身にしみわたる雁聲の、待ちながむる窓前をすぎゆくツイといふ事にて、人を待ちながめての秋の深夜の、愁情限りなき様なり。哀雁のすぎゆくを、あはれに訪づれてゆくと言へるも、面白し。待ちながめ居る身を、氣の毒の事よと雁の同情をよせて行くと言ふやうなる意味もこもるやうに想像せられて、面白し。風のけしきも更けゆくといひたるも、限りなくめ

てたしや。一首實に優美に悲哀に餘韻限りなく、風情いふばかりなく、誠に愛讀せしむる歌なりや。此の戀歌中の秀れたる一つに數ふべし。

○題しらず

八條院高倉

いかが吹く身にしむ色の變はるかなたのむる暮れの松風の聲

○いかが吹く。いかに吹くにやの意にて、松風の今宵はいかに吹くにやとなり。○身にしむ色。身にしむ松風の音を言ふ。○變はるかな。例よりも變りたるよといふ事にて、例よりも特に松風の音の身にしむ意なり。○たのむるくれの。あてにして待つ此の暮れの意。

○一首の意は、あてにして人を待つ此の夕ぐれの松風はいかに吹くにや、つねよりもかはりて、殊更に身にしみわたる音なりといふ事にて、あてにしたる人を待ち焦るる夕ぐれの情、松風も殊に身にしみて感ずる心なり。本居翁も石原主も、後拾遺集の「松風は色やみどりに吹きつらむ物思ふ人の身にぞしみける」といへるを、本歌としてよめるやうに説かれたれど、松風の身にしむといふほどの事は、常にいひならはしたる事にて、あながちに其の歌によりたりとは言ひ難かるべし。本歌どりにあらずとほゆ。

○題しらず

長明

たのめおく人もながらの山にだにさ夜ふけぬればまつ風の聲

○たのめちく人もながらの山にだに。今宵はとあてにさせたる人もなき時でもといふ意なり。それを、人もなしをながらの山にかけて、洒落れたり。ながらの山は、末の松風の聲と併せて、一首の結構上に用ひたる洒落れにて、歌の實意には關係なし。なほ前の太上天皇の待つち山いさよひの月と同じ技術なり。○まつ風の聲。まつといふ詞のみは、一首の實意に關係あり。人の待たる意なり。

○一首の意は、今宵はとあてにさせたる人のなき時でも、夜更けぬれば、自から人の待たるるものなるを、まして、斯く今宵はと約束したる人のあるなれば、待たれてくならぬといふ事にて、ましてより下の意は、だにも詞によりて、言外にさかせる餘情なり。今宵はと約束したる人のありて、常よりも待たるる意なり。抄には、ながらの山も松風の聲も、皆實意に關係あるやうに見て、心なき山にても、夜更ければ松風が吹く、ましてや、頼めたる人ある此の身の今宵といふやうに脱がれたり。それにてまさこゆれど、此の時代の歌の詠み方より見れば、前の如く見るべきものならんと思ひて、がくは。

○題しらず

秀能

今來んとたのめし事を忘れずば此の夕ぐれの月や待つらむ

○今來んと。近き程にまゐらむの意、本居翁のいはれたる如し。本歌どりの歌にて、古今集の素性が「今來んと言ひしばかりに長月の有り明けの月を待ち出づるかな」の詞をとれり。○たのめし事。此方よりたのめたるなり。先方の人よりたのめたるにはあらず。○忘れずは。人の忘れずばの意。○此の夕ぐれの月や云々。我が來る頃と思つて、月の出づるを待ちて居るならむと云なり。

○一首の意は、近き程にまゐらむと我が約束したる事を、忘れずば、此の夕ぐれに、人は我が行く頃と思つて、月の出づるを待ちながめて居るならむといふ事にて、約束はしたれど、俄に障る事ありて、訪ふを得ざるより、忘れずに居るとせば、必ず待ち焦れて居るならむと、思ひやりたる意なり。此の夕ぐれの月や待つらむと思ひやりたる心情、あはれにやさしく、餘情限りなくめでたき歌なりや。

○待つ戀ひといへる心を

式子内親王

君待つと寢屋へも入らぬ楨の戸にいたくな更けそ山の端の月

○君待つと。とはとての意なり。○いたくな更けそ。餘り夜更けに成つてくれるなよと、月にしたのみたる意なり。楨の戸に更けるとは、楨の戸にさす月の光りの、夜更けのけしきになるをいふなり。

○一首の意は、君を待つとて、寢所へも入らずに起きてうちながめ居るを、楨の戸にさす山の端の月よ、あまりふけてくれるなよといふ事にて、夜がふけさうて心細いといふ餘情あり。だんだん夜更けてゆくに、なほ人は來たらざるより、此のまゝあげてはとの心細さより、切情の幼くなり

て、月影にふけてくれるなとたのみたるなり。無心の月影にたのみたる幼き心が、切情の狂してあらはれたるところにて、哀れなる詩想と成れる本なり。情哀れに風情もこもれる歌なりや。

○戀ひの歌とてよめる

西行

たのめぬに君來やと待つ宵の間の更けゆかて唯だあけなましかば

○宵の間の。宵のまゝにての意に見るべし。上の二句の意は、今宵と約束したるにはあらざれど、若しや來るかゝと人を待つ意なり。○約束せざる人を待つとは、戀ひしき人は自から常に待たるものなれば言へるなり。○更けゆかて唯だ。夜更くる事なくのみの意なり。○明けなましかば。夜の明けたらんにはといふ事にて、かゝるつらさもなくして、いかに嬉れしからむといふ餘情あり。

○一首の意は、約束したるにはあらねど、若しや來るかゝと待つて居る夜は、宵のまゝにて、夜ふくる事なくして、明けたらむには、いかに嬉れしからむといふ事にて、夕べには自から戀ひしき人の待たれて、夜ふくるまでもあてなく待ちて寐られざるよりの愚痴なり。約束したるにはあらず。されば、とても來べき筈はなきなり。來べき筈はなけれども、常に戀ひしき人にて、夕べには待たるなり。待ちて深夜までもねられざるなり。ねられず思ひ侘びては、實に苦しさに堪へざるなり。其の苦しきのあまりに、宵のまゝにて夜の更けるといふ事なくして明けなば、

此の苦しみもなくして嬉れしからむと愚痴をこぼしたるなり。宵のまゝにての無理なる希望は、例の情の窮しての幼心にて、此の抒情詩の賦にあはれに面白きところなり。たのめたる人を待つにあらずして、たのめぬ人を待つとせし上の句の意匠も、賦にめでたし。戀ひしき人は常に夕べには待たる心よりの意匠にて、其の人を戀ふの情、自から限りなくこもりたればなり。

○おなじく

定家

歸へるさの物とや人のながむらむ待つ夜ながらのあり明けの月

○歸へるさの物とや。此の朝、人と別れて歸へる途に、此の有り明けの月をつれなき物とやながむらんの意なり。つれなき物とながむらは、有り明けの月が、夜の明くるをしらせて、別れて歸へるを促す意より、つれなき月よと見るといふ事なり。此の歸へるさは、我が思ふ人の、他の人に近い逢ひての歸へり路なり。○人は。我が戀うて待つ人はの意なり。○待つ夜ながらの有り明けの月。我れは其の人を待つまゝにて、一夜空しくあけゆく有り明けの月なるをの意なり。

○一首の意は、我れは斯く我が戀ひしき人を待つまゝに、一夜空しく明かしてうちながむる有り明けの月なるを、其の我が思ふ人は、よその人と逢ひての今朝の歸り途に、唯だ其の逢ひたる人に別れを促したるつれなき月よとばかり、思ひながめて居る事ならむといふ事にて、うらやましさを恨めしさの限りなき餘情をこめたり。複雑なる詩想を、遒勁に優美に流暢に發表し得たる修辭、實に絶妙と稱すべし。發表のみにはあらず。其の詩想は更に更に絶妙を得たりと言ふべし。定家

卿が秀歌の中の秀とすべし。これを以て新古今集三首の名歌の一つに數へたりといふ長明が詩眼も敬すべきかな。

○題しらず

讀 人 も

君來むと言ひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの戀ひつつぞぬる

○此の歌は伊勢物語にいたり。○過ぎぬれば。空しく過ぎぬればの意に見るべし。○たのまぬものの。君の心は頼みにはならじと思ひつゝもの意なり。○戀ひつゝぞぬる。毎夜く戀ひてはく獨り寝るとなり。伊勢物語には、下の句戀ひつゝぞ居るとあり。

○一首の意は、幾度か君は來たらむと言はるれど、毎夜空しく過ぐる故に、今は君が心は頼みにはならじと思ふけれども、なほ思ひ絶えかねて、毎夜戀ひてはく獨り寝るといふ事にて、一首の意明かなり。其の情はあはれに思ひやらるるものありといふべし。

○おなじく

人 丸

衣手に山おろし吹きて寒き夜を君來まさずば獨りかもねむ

○衣手に。待ちながめて居る袖にの意に見るべし。○寒き夜を。此の寒き夜をの意。○君來まさずば。若し此のまゝに君の來まさぬ事ならばの意。○獨りかもねむ。獨りねむ事かナア一の嘆息。

○一首の意は、待ちながめて居る袖に、山おろしの風が吹きて、此のやうに寒い夜であるのに、君のかくて來まさぬならば、獨り寝ん事かナア一といふ事にて、誠に侘しく思ふ故に、あはれ來たれかしと待つ意なり。新古今時代の歌風とちがひ居るところを味へば、また上代の歌のめてたさころも見えてゆかし。

○左大將朝光久しう音づれ侍らで旅なる所に來遇ひて、

枕のなければ草を結びてしたるに、

馬 内 侍

逢ふ事はこれや限りの旅ならむ草の枕も霜枯れにけり

○草を結びてしたるに。草を結び束かねて枕としたるにの意なり。○これや限りの旅。この度が逢ふ事のお仕舞ひならんかといふ事を、旅の途中なれば、かく文なして言へり。○一首の末に「此のしるしにて、察する時は、二人の中もかれて」といふやうなる意を略したり。

○一首の意は、今二人りの間に用ふる草の枕も、斯く霜枯れたワイ。此のしるしにて察する時は、二人の中は、此の末かれくになりて、斯く逢ふ事は、この度が限りならむかといふ事にて、草の枕の枯れたるを、二人りが中の離れくにならんしと見たる中に、これまで久しく問はずりしは、我れに薄くなりたりと、心細く恨む意を、暗にさかせたるなり。當意即妙の吟、其の才

味ふべし。

○天曆の御時、間遠にあれやと侍りければ、

女御徽子女王

なれゆくはうき世なればや須磨の蛭のしほやき衣間遠なるらむ

○端書の意は、天曆の帝が、どうも逢ふ事の間遠なる事よと仰せられたる時に、かく答へたる歌となり。○なれゆくは。餘りに親しくするはの意。○うき世なればや。他かるるつらさを見る世の中なればといふ事にて、やは末の想像の詞に合せたるまでの疑問辭にて、さして殊なる意なし。

○須磨の蛭の鹽やき衣。間遠の序に用ひたり。古今集戀歌の「須磨のあまの鹽やき衣をさあらみ間遠にしあれや君が來まざぬ」などある古歌の詞によりたるものなり。

○一首の意は、あまりに馴れゆくは、反つて他かるるに到るつらさのある世の中なれば、逢ふ事の間遠なるのであらうといふ事にて、間遠であるよと言はれたるを答へに、他かれまつるを恐れての間遠でありますと、辨解したるなり。間遠なりけりと断定して言はずして、なるらむと想像にしたるは、やさしく言はん爲めなり。あまりに馴れては反つて他かるるつらさあるを恐るるとの心は、いつまでも愛せられん意より言へるにて、可憐なりと言ふべし。

○逢ひて後あひ難き女に

坂上是則

霧深き秋の野中の忘れ水絶え間がちなる比にもあるかな

○忘れ水。野中などの草間に絶えくにて人に知られぬ水と言ふ。後拾遺集戀歌「はるく」と野中に見ゆる忘れ水絶えまなくを歎く頃哉、詞花集戀歌範綱「住吉の淺澤小野の忘れ水絶えく」なると逢ふよしもがな、金葉集戀歌「うとましましや木の下蔭の忘れ水いくらの人の影を見つらむ」、などの歌にて、知るべし。上の句は、絶え間がちなる比喩に見るべし。

○一首の意は、霧深く立つ秋の野中の忘れ水のやうに、此の頃は、逢ふ事のとかく絶えくとなる事よといふ事にて、一首の意明かなり。霧深きを野中に添へたるは、人に知られぬ忘れ水の意を深からしめたる細工なり。

○三條院みこの宮と申しける時、久しく問はせ給はざりければ、
安法法師女

よのつねの秋風ならば萩の葉のそよとばかりの音はしてまし

○みこの宮。皇太子、即ち、春宮の事なり。○よのつねの。尋常普通の意。○秋風。厭き心をたとへたる暗喩なり。○萩の葉の。そよとの序なり。上の暗喩秋風の縁によりて、秋風に萩の葉の音は、常に言ふ事なれば、そよとを言ひ出だす序に用ひたるにて、一首の意に關係なし。○そよとばかりの音はしてまし。一寸の訪れはあらうものなれどといふ事にて、人の厭き心はよく

よく甚しき故に、一寸の訪れもなしとの餘情あり。

○一首の意は、尋常一様の厭き心ならば、一寸の訪れ位はあるべきなれど、よく／＼甚しき厭き心ゆゑ、少しの訪れもなしといふ事にて、少しの訪れもなきを恨みたる歌なり。秋風の暗喩を骨として、すべて其の縁にて作りたり。

○題しらす

中納言家持

あしびきの山の蔭草むすび置きて戀ひやわたらむあふよしをなみ

○山の蔭草。山蔭に生えたる草の事にて、みそかなる所の人の暗喩なり。○むすび置きて。人
とちぎり置きてを、草の縁にて言へり。○戀ひやわたらむ。斯く戀ひつゞけん事かナアといふ
意にて、みそかなる契りなる故に、人目を憚りて、あはれぬより、みそかならずして常に逢ひたさ
心より言へる嘆息なり。○あふよしをなみ。逢ふ事の出来ざる故にの意なり。
○一首の意は、みそかなる所の人と、斯くちぎりを結び初めて、人目を憚る故に、逢ふ事は絶え
て出来ず。そして、斯く戀ひつゞくる事かナアといふ事にて、いと忍びて契り初めたる戀ひ
の、また逢ふ事も出来ずして、獨り戀ひ焦るるよりの嘆息なり。

○題しらす

延喜御歌

東路に刈るてふ萱の亂れつつ東の間もなく戀ひやわたらむ

○東路に刈るてふ萱の。亂るる心の形容にひきたる比喩なり。萱の如くの意に見るべし。○亂
れつつ。心の亂れつ亂れつしてなり。○東の間もなく。僅の思ひやむ間もなくの意を、萱の縁
にていへり。○戀ひやわたらむ。前の歌のと全し。
○一首の意は、東路に刈るといふ萱の如くに、此の心は亂れて亂れて、少しのやむ間もなく、斯
く戀ひつゞけん事かナアといふ事にて、やむ時なく思ひ亂れての嘆息なり。

○題しらす

權中納言敦忠

結びおきし袂だに見ぬ花すゝきかるともかれじ君しとかずば

○上の句の意は、花薄を結び置きしまゝに、其の後、更に一寸でも君は見にも来ぬといふ事なり。
一寸でもの意は、袂だにの詞にて見るなり。○かるともかれじ。決して枯れじといふ意を、強く
言へるなり。○君しとかずば。其の結びを、君がまた来て解くにあらざばといふ意。
○一首の意は、花薄を結び置きしまゝに、其の後一寸でも君は見にも来ぬが、君が又来て其の結び
を解かるるにあらずば、花薄は決して枯れず君を待たんといふ事にて、花薄によせて、一度逢ひ
たるまゝに訪はざる人の許に、君の見え給ふまでは、死ぬとも死なじと思ふと、待つ意を言ひやり
しものならむ。かるともかれじは、死ぬとも死なじの意をさかせたるべし。

○百首歌中に

源重之

霜の上に今朝ふる雪の寒ければかさねて人をつらしとぞ思ふ

○霜の上に。「此の頃寒くつらかりし霜の上にまた」の意に見るべし。○寒ければ。更に寒くつらき故にの意に見るべし。○かさねて。更にまたの意にて、つらき上に更につらさの加はる意なり。○人を。待つにはとほざる人をいへるなり。

○一首の意は、此の頃寒くつらかりし霜の上に、今朝はまた雪がよつて、一層寒くつらき故に、久しくもとはざる人を、今日は一層つらく思ふといふ事にて、雪さへふりて寒き故に、人の更に戀ひしき心より、今朝はつらさのまさるといへるなり。かさねてといふ詞が、此の歌の生命なり。

重之集には、四の句を人を重さねてと見えたれど、此の集のいひ方の方よし。人を重さねてには、調よければなり。

○題しらず

安法法師女

ひとりふす荒れたる宿の床の上にあはれ幾夜のねざめしつらむ

○荒れたる宿。古今集遍照が「わが宿は道もなきまで荒れにけりつれなき人を待つとせし間に」といふ歌の荒れた宿のやうなる心にて、つれなきを待つ程に年を経たる意なり。

○一首の意は、つれなきを待つ程に年を経て、宿も荒れたるが、獨りねの夜床に、マア一幾夜、斯くねざめてはねざめては、もの思ひして来た事であらうといふ事にて、一夜ねざめの床に、つくつくつれなきを思ひやりての嘆息なるべし。つれなしともうらめしとも言はずして、唯だ幾夜かく

ねざめく物思ひし來れる事ならむとのみ嘆きて、其の他は自から餘情にこめたるところが、誠に思ひやらるる風情のこもるを得て、面白きなり。やさしく哀れに心細さは見えたる歌といふべし。

○題しらず

源重之

山城の淀の若菰かりにきて袖ぬれぬとはかこたざらなむ

○山城の淀の若菰。かりにきてを言ひ出だす序にて、一首の意に關係なし。菰草を刈るといふ事を、假り初めに來ての全音にかけて、序とせるなり。○かりに來て。かりには假りそめにと全じく、ホンの一寸逢ひに來たれる事なり。深く思つて逢ひに來たれるにあらずとの意をこめたる詞なり。○袖ぬれぬとは。久しく逢はずして涙に袖をぬらして居つたとはの意なり。○かこたざらなむ。かこたずに欲しいといふことにて、かこつとは嘆き訴ふる事なり。

○一首の意は、深くも思はず、此のやうに、ホンの一寸逢ひに來ながら、久しく逢はずして泣いて居つたなどと言ひ給ふな。そんな事は言はずに欲しい。言はれたりとして、眞實とはさかれぬ故にといふ事にて、久しく訪はざりし人の、一寸逢ひに來て、心には逢ひたさに泣きくらし居つたなどかこちたるより、久しぶりなるに、唯だ假り初めばかりの訪れにすぎぬほどの心にて、そんな申しわけは聞きたくもなしと、怨じたる意なり。

○題しらず

貫之

かけて思ふ人もなければ夕ざればおもかげ絶えぬ主かつらかな

○かけて思ふ。 我れを心にかけて思ひくれる事にて、上の二句の意は、我が思ふ人は我れを心にかけて思ひくれぬといふ意にて、それを、心にかけて思ひくれる人は離れもなしといふやうに言つて、一層強くさせたるなり。○面影たまぬ。我が目の前に其の人の影の絶えずらつて見ゆるなり。○玉かづらかな。玉かづらは、其の人の美しき姿を言ひたる換喩なり。○一首の意は。人は心にかけて我れを思はねど、我れは常に心にかゝりて其の人の戀ひしく、夕になれば、其の人の美しき姿が、目の前にちらつて離れぬワイといふ事なり。伊勢物語に「人はいさ思ひやすらむ玉かづら面影にのみ」と見えつゝ」といふあり。其の上の二句の意を、こゝには更に強くちつたると、夕さればの意匠を添へたるか、異るのみ。

○宮仕へし侍りける女を、かたらひ侍りけるに、やむことなき男の入
り立ちて言ふけしきを見て、恨みけるを、女あらがひければ、よみ侍
りける
平 定 文

つはりをたゞすの森のゆふだすきかけつゝちかへわれを思はば
○端書の意は。 御所に御奉公して居る女と親しくして居りたるに、其の女の許に、ある貴人の切に
言ひ寄る様子を見知りたれば、一日其の女に、心變はりを恨みたるに、さる事は無しと女の言ひ争
ひたれば、かくよみたりとなり。○たゞすの森。 偽りをたゞす糸の森とかけたるなり。糸の森に
糸の神をさかせたり。○ゆふだすき。 木綿褌にて、神前に仕ふる木綿褌の意にて糸の神の意の糸
の森より言ひつゞけて、さてかけつゝの序としたり。 歌の意味には關係なし。○かけつゝ。 神
にかけて契への意なり、○我れを思はば。 眞實に我れを思つて變心あらじとならばの意。

○一首の意は、眞實に我れを思つて、變心あらじとならば、偽りを糸す神にかけて契へよとなり。
さる事なしと言ふのみにては、信ぜられぬ故に、神にかけて契へよとなり。

○人につかはしける 鳥羽院御歌

いかばかりうれしからまし諸共に戀ひらるる身も苦しかりせば
○諸共に。 諸共に苦しかりせばとつゞくなり。 全じ事に苦を共にする意にて、同じ戀ひに共に
苦しむを言ふ。 同じ戀ひとは、君は我れを、我れは君を戀ふ事なり。○戀ひらるる身も。 戀ひせ
ずには居られぬ身もといふ事なり。 人には戀ひなき能はず。それで、自分も君を戀ひて居るが、
君も必ず戀ひはあらんといふ意にて言へるなり。
○一首の意は、 互ひに戀ひせずには居られぬものなるが、同じ戀ひに共に苦しむのならば、苦
しき戀ひも、これほど離れし事であらうのにといふ事にて、君の我れを思はぬ故に、全じ戀ひに共
に苦しむ事も出来ずして、我れは片戀ひの悲しいといふ情をあましたり。 諸共に云々の意は、「相
思ふ戀ひに苦しむ事ならば」の意なるを、抄には、「我れに戀ひらるる身も、我れと諸共に戀ひ路を
思ひ知つて苦しむば、かくつれなくはあらじ」と説かれ、また一説には「我が戀ひの苦しきと共に、
戀ひらるる君も、共に苦しむば、離れしからむ」など説きたれど、皆誤れり。 畢竟戀ひらるる身

といふ詞の意味を取りかねたるが故の謬見なり。

○かた思ひの心を

入道前關白太政大臣

我ればかりつらさをしのお人やあると今世にあらば思ひあはせよ
○我ればかり。我が身ほどにの意。○つらさを忍ぶ。つらさは人の我れに無情なるをいふ。しのぶは堪忍する意。○今世にあらば。今わが戀ひ死にしたる後に、君が世にあらばの意なりと、石原主のいへる如し。なほ世にあらばといふ中に、君の戀ひせん時にの意をこめたり。今は近くぢきにといふ事にて、やがて、モ一、自分の戀ひ死にせん意をこめたるなり。
○一首の意は、此の我が身ほど、人のつらさに堪忍する者が、世にあるか無いか、もう直ちに我が戀ひ死にせん後、君世にありて人を戀ひせられん時に、思ひあはせよといふ事にて、片思ひの苦しきは忍び難きものぞ、それを斯く自分は永く忍びつづけて居る、察しはないのかと、恨みいかりたる意を、婉曲に發表したるなり。今世にあらばの詞、活き得て面白し。下の句、胸もつよくして、自から其の情のつよくこめたることも、よしといふべし。

○攝政太政大臣家百首歌合に契る戀ひの心を

慈圓

たゞたのめたとへば人のいつはりを重ねてこそは又もうらみめ

○たゞたのめ。とやかくと疑はずに、たゞ我れに信頼せられよといふ事にて、此の下に、我れには偽りなしといふ意をこめたり。○たとへば。俗言にも常に用ふる詞にて、假りに設けて語たる時の詞なり。○三三四の句は「たとへば此の後人が偽りを重さぬる事ありとせん、其の時にこそ」といふ如き意なり。○又も。今はやめて後にといふ意にて用ふる又なり。俗にも「今日は差し支へあり、またまわる事とせう」などいふ時の又なり。

○一首の意は、とやかくと疑ひて恨み給ふが、最早其の疑ひはやめて、たゞ一向に我れに信頼せられよ。我れには更に偽りなし。若し此の後、假りに偽りを重さぬる事ありとせん、其の時にこそまた恨みたまへ。今日の疑ひは最早やめたまへ。我れには更に偽りなしといふ事にて、人のとやかくと疑ひて恨みたるを、我れに偽りはなし信頼せられよと契ひたる意なり。唯だ頼めと最初に強く断定して言ひ、さて、若偽る事あらむ時には、又も恨らめと、一步をゆづりて、やはらかになだめて言へる言ひまはしは、よく其の場合に應じて、強く且つやさしさを得て、面白し。

○女を恨みて今はまからずと申して後、猶ほ忘れ難く覺

左衛門督家通

えければ遣はしける。つらしとは思ふものからふし柴のしばしもこりぬ心なりけり

○思ふものから。思ひ恨むなれどもこの意。○ふし柴の。しばしもこりぬの序に用ひたるにて、一首の意に關係なし。ふし柴とは、柴といふに全じ。ふしも柴の事にて、柴を重さねていへる詞なり。

○柴を暫時(しばし)の全音にかけ、また、柴をこるを懲りの全音にかけて、序にせるなり。○しばしもこりぬ。少しの間も懲りて思ひ忘るる事を得ずなほ戀はるる意なり。

○一首の意は、つらいとは人を思ひ恨めども、されど、なほ懲りずして、少しの間も忘れずに戀はるよといふ事にて、其の意明かなり。

○たのむ事侍りける女、わづらふ事侍りけるが、おこたりて、久我内大臣のもとに遣はしける

よみ人知らず

たのめ來し言の葉ばかりとゞめ置きて淺茅が露と消えなましかば

○端書の意は、久我内大臣と約したる女が、病まひにかゝりけるが、癒えなければ、此の歌を送りたりといふ事にて、誰人知らずは、やがて、其の女なり。○たのめ來し言の葉ばかり。あなたと約し來たれる言葉だけといふ事。○とゞめ置きて。此の世に遣はさきての意。○消えなましかば。死んでしまつたならばといふ事。末にいかにも悲しかりけんといふ情をあましたり。○淺茅が露とは、かなく死するの形容に引きたる比喻なり。

○一首の意は、あなたと約束し來たれる言葉だけを、世にとゞめて、若し此の身此度の病まひに、淺茅が露とはかなく消えて死んでしまつたならば、いかに悲しかりけむと思ひますといふ事にて、其の情心細げに哀れに思ひやらるる歌なりといふべし。

○返へし

久我内大臣

あはれにも誰れかは露を思はまし消え残るべきわが身ならねば

○あはれにも。思はましにつづくなり。○露を。露とはかなく消ゆる命をの意に見るべし。此の露は女の上の事にはあらず。我が上の事なり。我が死をといふなり。○消え残るべき云々。あなたの死後に、死なずに残つて居る事は出來ぬ身なればの意。君なくして獨りは生きん心なきを言へるなり。

○一首の意は、あなたが淺茅の露と消えなば、私も後に残りて生きやうとは思はぬ故に。私もまた露と消えてしまふ事であつただ、あなたも亡くなりたらむには、誰れが死ぬる私を哀れに思うてくれやう。あはれに思うてくれる人もなくして、私は死んでしまふ事であつたといふ事にて、若しそんな事であつたならば、私は更に悲しい事なりしをといふ情をあましたり。若し君との契りを實行せずして死にたらむには、私は悲しかりしと、女の言ひおこしたるに對して、あなたが死ぬやうの事あらば、私も後には生きては居ぬ心、あはれに思うてくれるあなたの無くしての我が死は更に悲しと言つて、君の死なんは君よりも更に我れ悲し。君の癒えたるは、君よりも更に我が悦びぞと、我が心の更に深きよしをのべたるなり。巧みにも返へしたる歌なりや。此の二首あはせて、相愛する男女が真情をうたひて、其の想ゆかし。

○題しらず

小侍従

つらきをも恨みぬ我れに習ふなよ憂き身を知らぬ人もこそあれ

○つらきをも。君のつらきをもに見るべし。つらきは無情の意。○恨みぬ。わが憂き生まれの身のとがになして、人の無情をも恨みずに居る意に見るべし。下の句のかけあひにて、自から其の意はきかせたるなり。○我れに習ふなよ。此の習ふは思ひなる意なり。其のやうなるものと思ひなる事なり。皆我れの如きものと思ひならひて、人にも我れへの如くつらくあたる事をし給ふなよの意なり。○憂き身を知らぬ。我れは憂き生まれの身なりといふ事を知らぬ人も世にはあればとなり。我れは憂き身なりといふ事を知らぬとは、我れは憂き身なれば、人のつらきも道理なりと思ひ知らぬといふ意なり。

○一首の意は、我れはあなたのつれなきは、我が憂き生まれの身の故なりと思つて、あなたを恨みずに居りますが、人は皆我れの如きものなりと思ひなれて、我れへの如く、他の人につれなくあたる事をしたまふなよ、世の中には、我れは憂き身なれば、人のつれなきも道理ぞと思ひ知らぬ人もあればといふ事にて、人の無情を、婉曲に恨みたる歌なり。我が憂き生まれの身の故なりとあきらめて居ると言ひて、されどこれに思ひなれて、人にも全じやうにつらくあたり給ふなよと諭したる、あくまでおとなしくやさしさ其の情も思ひやられ、打ちつけに恨みたるよりは、却つて人の心に深く感ぜしむるものあるを得たり。婉曲の發表法の妙味を示し得て、詩趣いふばかりなし我れこの歌をよみて、小詩従の歌集を俄に一讀したり。

○題しらず

殷富門院大輔

何にかいとふよもながらへじさのみやは憂きに堪へたる命なる

へき

○何にかいとふ。何故にさまで我れをいとひたまふぞの意なり。何故に我れは我が命を厭ふと取りたる説もあれど、一首の調の上よりよく考へ、また其の詩想を熟考するに、決してさは見るべからずと思ひて、尼張の家菴の見解に従ひたり。「此の句の次にさばかり我れを厭ひ給はずとも」といふやうなる意を入れて見るべし。○よもながらへじ。我が身は必ず永くは生きながらへずと思ふとの意。最早戀ひ死にすべしとの心より言へるなり。○さのみやは憂きに堪へたる命なるべき。さうばかりはつらさに堪へて居らるゝ我が命にあるまいからといふ意なり。さのみは、今まで斯く堪へては居るが、さうばかり久しくはの意なり。○一首の意は、何故にさまでに我れを厭ひ給ふぞ。さばかり我れを厭ひ給はずとも、我が身は最早よも永くは生きながらへては居るまじ。今まで斯く君のつらさに堪へては來たか、さうばかり久しく堪へて居らるゝ命にてはあるまじと思ふ故にといふ事にて。やがて戀ひ死なんに間もなき我が命ぞ、さまで強く厭ひ給はて、露ばかりの情けらしき事は、ゆるし給ひてもよからむとの情をあらしたり。何にか厭ふと先づなじり、よもながらへじと訴へ、さのみは堪へぬ命と泣きて理由をのべたる、其の發表、よく其の切情に應じて、遒勁なるを得たるも面白く、また其の情も、切に思ひやらるゝものありて、哀れなり。

○題しらず

刑部卿頼輔

戀ひ死なん命はなほもをしきかな全じ世にあるかひはなけれど

○一首のはじめに、「今は戀ひ死なんばかりなり。死ぬるがましなりと思へど」といふ意を置きて見るべし。下の句は、相思うてこそ同じ世に生きるかひはありといふ心より、言へるなり。

○一首の意は、今は我れは戀ひ死にせんばかりなり。かくまでには君は無情なれば、いつそ死ぬる方まじぞと思へど、それでもなほ命はをしく思ふワイ。片思ひにては同じ世にすむかひはなけれどもといふ事にて、一首の意は明かなり。死ぬるをましと思へど、なほ命がをしいといへるところが、人情の誠よりの未練にて、哀れなるところなり。

○題しらず

西行

あはれとて人の心のなさけあれな數ならぬにはよらぬなげきを

○あはれとて。尤もなる嘆きよと可哀想に思ひ給ひての意。○人の心のなさけあれな。人の心の情愛あつて欲しいといふ事にて、情愛をかけて欲しいと願ふ意なり。○數ならぬにはよらぬなげきを。數ならぬとは、人の數にあらざる意にて。戀愛のなげきは、身分の高下にはよらぬものにて、我がなげきは、それなるをあはれと思うての意なり。

○一首の意は、自分の高下にはよらぬ我が戀愛のなげきを、尤ものなげきよと可哀想に思うて、情愛をかけて欲しいといふ事なり。戀ひに上下の隔てなしとの理屈を、無遠慮にうちつけたるところ、

誠を主眼とせる法師がいつもの心見えて、面白し。しかも其の理屈は最後にして、あはれとて情愛をかけてと、先づ愁訴したるあたり、いひまはしの妙を得て、面白し。

○題しらず

おなじ人

身を知れば人のとがとも思はぬに恨みがほにもぬる、袖かな

○身を知れば。わが身の數ならぬを知ればの意。○人のとがとも思はぬに。我が戀ひの成らぬは、人の無情のとが故とは思はぬものとの意。○恨みがほにも。人の無情を恨みがほにの意。

○一首の意は、わが身の數ならぬを知つて居れば、我が戀ひの成らぬは、人の無情のとが故とは思はぬものを、さても人の無情を恨みがほにこぼるるわが泪よといふ事にて、さてもわからぬ心ぞとの情をあましたり、理屈は知れり、されど理屈を以て抑さへきらるるほどの戀情にあらねば、自から泪のこぼるるを、わざと悟りがほにとがめたるなり。わざと悟りがほに言うて、却つてこたらぬ未練を訴へたところが、詩となれるところなり。

○女に遣はしける

俊成

よしさらば後の世とだに頼めおけつらさに堪へぬ身ともこそなれ

○よしさらば。よしとは今も俗に言ふ詞にて、我が心にはかなはねど、せん方なければとて、他

に打ちまかす意をいふなり。此の世にて逢ふを得ざるならば、陸方なし、さうしてまかうといふ心にて言へるなり。此の句は「よし、此の世にて逢ふを得ざるならば」の意なり。○後の世とだに。後世に逢はんとだけでもの意。○頼めまけ。契り置けの意。○つらさに堪へぬ身ともことなれ。君のつらさに堪へ得ずして我れは死すべしとの意なり。

○一首の意は、君のつらさに堪へずして、我れは死ぬべし。よし、此の世にて逢ふを得じとならば、せめて後世に逢はんとだけでも契り置けといふ事にて、既にあひたる女の、事情ありて逢ひ難けにしたるより。恨みたる詞なるべし。よし陸方なければと先打ち出で、次にせめて後世をとたのみ、最後に思ひ死にもすべし身をほのめかしたるなど、詞の順序、其の處を得て面白し。

○かへし

定家朝臣母

たのめおかむたださばかりを契りにてうき世の中の夢になしてよ

○たのめおかむ。さうは仰せらるゝ通り、後世にとらざりまかんといふ意。○たのめばかりと。後世にて逢はんといふだけを、唯だ此の世にての縁にはしての意、契りは俗に言ふ縁の意なりと、本居翁の言へる如し。○下の句の上に「これまでの事は」といふ詞を省きたり。○夢になしてよ。夢と思つてしまつてよといふ意。

○一首の意は、さうは仰せらるゝ通り、後世にとらざりまかむ。たゞそれだけを此の世の縁にして、これまでの事は此の浮き世の中の夢と思つてしまつてよといふ事にて、際る事ありて、今は逢はれ

ぬなれば、さうは夢にもなして恨みずによとたのみたる意なり。たゞそれだけの縁、後世の夢と思つてよと頼む詞の中に、いかに自分も悲しく思ふ情の、自からこもるものありて、やさしくあはれなる抒情詩といふべし。

戀歌四

○中將に侍りける時、女につかはしける。

清 慎 公

よひくに君をあはれと思ひつゝ、人には言はてねをのみぞなく

○君をあはれと思ひつゝ。 君にあひたしとしみく思ひ焦れつゝの意なり。○人には言はて、
獨り心に思ふ意なるべし。

○一首の意は、夜になれば、毎時、君にあひたしと、しみく思ひ焦れつゝ、獨り心に泣いて居るといふ事にて、障る事ありて訪ふを得ざれど、訪ひたき心に毎夜泣いて居る、察したまはれと言ひやれるなり。

○返へし

讀み人しらず

君だにも思ひ出でけるよひくを待つはいかなる心地かはする

○君だにも。 君でもの意。訪はれぬ程の君なれば、情は深からじと思ふとの心にて、言へるなり
○思ひ出づる。あひたしと思ひ出づる意。○待つは。君を待つ我が身はの意。○いかなる心地かはする。いかなる心地のする事か、賊に堪へられぬ思ひなりといふ事。

○一首の意は、君でも、夜々は逢ひたしと思ひ出で給ふとか。其の夜々、君を待つて居る我が身は、マア、どんな心もちて居るか、賊に堪へがたく思ひ焦れて居る事ですといふ事にて、心には逢ひたさに毎夜泣いて居るとの詞に對して、待つ身は更に泣いて居ると訴へたるなり。君でも思ひ出づると先方の情をおとしたるが、此の返歌の情の面白さを得たるどころなり。

○少將滋幹につかはしける。

讀人しらず

戀しさに死ぬる命を思ひ出でてとふ人あらば無しと答へよ

○死ぬる命を。 死ぬる命の我れをの意に見るべし。○無しと答へよ。 我れは死んでしまつたと答へてくれよとなり。

○一首の意は、あなた故に我れはやがて戀ひ死にすべし。若し我が事を思ひ出して、人がとひたらば、其の人は死んでしまつたと答へて給はれ、最早戀ひ死にすべければといふ事にて、わが命は最早生き難しとの戀ひしさをつけたるなり。人が問ひたらば死んでしまつたと答へてくれと、わざと其のつらき人にたのみたるところは、婉曲に其の人に打ちつけたるにて、其の皮肉が此の歌のおもしろきところなり。

○恨むる事侍りて、さらに參て來じと誓言して、二日ばかりありて遣はしける。

謙 徳 公

別れては昨日今日こそ隔てつれ千代しもへたる心地のみする

○別れては。別れてから、マア一の意なり。○昨日今日こそ。端書の日ばかりの意なり。○四の句の上にさらにといふ如き詞をおくべし。○千代。千年に同じ。○一首の意は、別れてから、マア、僅に昨日今日二日離れたばかりである。さるに、千年も過ぎたる心地ばかりするといふ事にて、最早あひ見じと恨み誓ひて別れたるなれど、やはり其の人の事の忘れかねて、見ざる二日は、千年の心地するとの意なり。恨み別れても、其の人の忘れかねる意を、直接に言はずして、別れての二日も千年と思ふと、間接に其の意を發表したるところが、此の歌の面白く見るべきところなり。

○返へし

惠子女王

昨日とも今日とも知らず今はとて別れし程の心まどひに

○知らず。我れはわからずの意。ものもあぼえずぼんやりして居る心なり。今はとて。モ一これ限り逢はじと契はれたるを言ふ。○別れし程の。君の別れし其の時の意。○心まどひに。心まどひとは心の亂れたるをいふ。

○一首の意は、君は別れてから昨日今日二日なりなど覺えたまへど、自分は、これかぎり逢はじと君の契ひ給ひて別れたまひし其の時、心は亂れはてたれば、日數も何にも更にわからず、ぼんやりして居るといふ事にて、別れし事の悲しくて、ぼんやりとして物事もわからぬ程に、思ひ亂れて居る心なり。ぼんやりとしてまで思ひ悲しみ居る意を、先方の歌の昨日今日をうけて、昨日とも今日とも覺えずと言ひてきかせたるところ、面白く、また、其の物も覺えずに居る詞を、先づ言ひて、次に其の理由を附したる言ひまはしも、其の場合に應じて、自から適勁なる發表を得て面白し。

○入道攝政久しくまうて來ざりける比、鬢かきて出てけるゆするつきの水入りながら侍りけるを見て、

右大將道綱母

たえぬるか影だに見えばとふべきをかたみの水はみぐさるにけり

○ゆするつき。泔器と書きて、水を入れて鬢などをかきあぐるに用ふ品なり。攝政兼家が別れて歸へる時に、鬢をかくに用いたる器の水が、其のまゝになりて居るのを見て、よめる歌なりとなり。○絶えぬるか。人は思ひ絶えぬるかか意。見かぎりはてたるかといふ事なり。○影だに見えは。泔器の水に、其の人の影のうつりて見えなばといふ事。○とふべきを。其の人の心を問ふ事の出来るものなるにの意。○かたみの水。其の人の用ひて出てたるなれば言へり。泔器の其の水なり。○みぐさるにけり。みぐさは水草或は水苔にて、水苔が一杯に生えてしまつたワイといふ事なり。其の

人の影もうつらぬ心をこめたり。

○一首の意は、人は見かぎつてしまつたのか。若し此の泔器の水に、其の人の影のうつるならば、人の心をとふ事の出来るものを、其の水も水苔の一杯に生えてしまつて、人の影もうつらないワイといふ事にて、いよ／＼おぼつかなく心細き意をあましたり。よし水に影のうつるとも、とふかひはなき事なり。それを、せめてそれでもあらばと思ふは、久しく訪はざる人の戀ひしさの切情よりの痴態にて、そこが哀れなる詩となれるところなり。おぼつかなく心細きを餘情にこめたるも、哀れなり。絶えぬるか先づ打ち出でたるも、其のおぼつかなく思ひあまる情を示して、面白し。

○内に久しくまゐり給はざりける頃、五月五日、後朱雀院の御返事に、

かた／＼に引き別れつゝ、あやめ草あらぬねをやはかけむと思ひし

○内裏に久しく参上せざりし頃、五月の五日後朱雀院より給ひたるお使ひの御返事に、かく申上げたりとなり、陽明門院は三條院の皇女にて、後朱雀の后なり。○かた／＼に。此方彼方にの意。○ひき別れつゝ。ひきは語調の爲めの接詞にて、意なし。別かれ／＼に離れての意。○あやめ草。○あらぬねのねにかけたる序なり。五月の五日なれば、取り出でたる文なり。あやめの根と泣くねの

ねの同音にかけて、序とせるなり。○あらぬねをやは。あらぬねとはあるべからざる泣く音の意。やはは例の反語にて、思ひしの下に置きて見るべし。○かけんと思ひし。袖にかけんとは思はざりしよとなり。泣くねを袖にかくるとは、泪を袖にこぼす事にて、つまりは泣く事なり。五月の五日は、菖蒲の根を薬玉にして、几帳や袖にかくるより、其の縁にて言へり。

○一首の意は、此方彼方に斯く別れ／＼に離れ居て、かゝるあるべからざる泪を、袖にこぼさうとは思はざりし事といふ事にて、何にか他人の邪間する事などありて、心ならずもかく泣いて別れ居るとの悲しき心なるべし。五月の五日のちん文なれば、あやめ草、なくね、かくるなどと、其の節句の縁にて言はれたるところが、思ひつきなるべし。

題しらす

伊勢

言の葉のうつらふだにもあるものをいとど時雨のふりまさるらむ

○言の葉。人のちぎりたる詞を言へるなり。○うつらふだにも。人のちぎりたる詞の遠變を、木の葉の縁にて、うつらふと言へり。○あるものを。悲しくあるものをの意。○四の句の上に、何故にといふ詞を省きたり。此の省略の往々用ひらるる事は、前の卷に詳しく言へり。四五句の意は、時雨さへふる頃となりて、いよ／＼悲しさの添はるを、とがめたる意なり。

○一首の意は、斯く人の違變せるばかりも、既に悲しくあるものを、其の上に、何故に時雨までがふりそひて、いよく悲しさを増さしむる事ぞといふ事にて、秋になどと約束したる事あるに、其の人の秋にもとはずして、遂ひに冬にもなれるよりの悲嘆なるべし。秋にとちぎりたる事は、詞にはあらねども、人の言の葉のうつらふといふを、下の句の時雨のふりまざるに對して見て、自からさかせたるものなるべし、秋にとちぎりたるを違變して、秋にも來たらず、それを悲しく思ふといはずして、單に人の詞のうつらふだにも悲しきと言ひて、其の意を斯くさかせたるところが、此の歌の工夫のあるところなるべし。

○題しらず

右大將道綱母

吹く風につけてもとはむさゝがにの通ひし道は空にたゆとも

○吹く風につけても。吹く風に言づけてもの意。○とはむ。人の安否をとほむと思ふといふの意。○さゝがにの。さゝがには蜘蛛の異名にて、此のさゝがにのといふ句は「蜘蛛の振舞ひをあてにして我が待つては待ちし」といふ意に見るべし。蜘蛛の糸をかくる時は、戀ひし人の來たるしらせなりといふ事は、舊くより傳へられたる迷信にて、有名なる衣通姫の「我かせ子が來べき宵なりさゝがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも」と言はれたる歌も、これによりたるものなり。されば、斯くまでに絶えはてざる程の中を、蜘蛛のふるまひをあてにして待ちし人の通ひし道と言ひたるなり。○通ひし道。人の訪ひ來たる事を言へり。○空にたゆるも。空しく絶ゆるとももの意なり。

○一首の意は、蜘蛛のふるまひをあてにして待ちし人の訪問は、かく空しく無くなつてしまつても、なほ自分は、吹く風のことづけても、人の安否をさかんと思ふといふ事にて、蜘蛛のふるまひをあてに待ちしほどの會合も、今は全く無くなりたる程に、人は絶えはてたれど、自分はなほ其の人の忘れ難くして、其の人はどうして居るか、恙なくてかなど安否のとひたく思ふといふ意なり。自分はいくまでも其の人を思ひすてられがたきころなり。さゝがにの通ひし路の空に絶ゆといふところは、此の歌の苦心せし意匠なるべし、いかにもむづかしくして、殆んど説き得がたき心地す。我が此の見解、或は誤れるならんも知れねど、しかとらば、一の意味は明に見らるるものあり、且つ、面白きものありとおぼえて、斯くは説き去りぬ。なほ大かたの人の教へを仰ぐ。

○後の宮久しく里におはしける頃遣はしける。

天曆御歌

葛の葉にあらぬ我が身も秋風の吹くにつけつゝ恨みつるかな

○秋風の吹くにつけつゝ。秋風は、飽き心の意なるべし。人の飽き心のつくによりての意なるべし。それを、秋風と文なして、上の葛の葉にはあらぬといふ比喩の意に合せたるなるべし。秋風に葛の葉が裏を見せる。それを、裏見を恨みにかけて、取り出でたる比喩なればなり。○恨みつるかな。恨めしく思ふツイといふ事にて、秋風の葛の葉の縁なり。